

# 前置詞の話

## 1. 方向の表現

Wo (何處に) と  
Wohin (何處へ)

英語では別に『何處に』(あるいは『何處で』)と『何處へ』を區別しないで、兩方とも *where* と云いますが、獨逸語では『へ』を意味する *hin* という語があつて、『何處へ』という時には必ずこれをつけます:

Wohin gehen Sie? どこへ行きますか?

此の *hin* は、最後にもつてきてもよろしい:

Wo gehen Sie hin?

もつとも、英語にも *whither* という *wohin* に相當する語はありますが、用い方には多少の條件がついて、ドイツ語の *wohin* のように一般的に用いるわけにはゆきません。

要するに「どこへ行きますか?」には二通りの云い方があるわけです。後の方の云い方はちよつと奇異な感じを與えるかも知れませんが、*hin* (へ) の反對の *her* (から) の場合をとつて見ると、『あなたはどこから來ましたか?』は

1. Woher kommen Sie?

2. Wo kommen Sie her?

の二通りになりますが、後の方は英語の *Where do you come from?* とよく似ている事がおわかりになりましょう。(もつとも此の *Where do you come from?* は出身地を問うわけで、つまりお國はどちらですかという意です。どこから來たのかという時は *Where have you come from?* です。ドイツ語の方では、「來たか」でも現在形を用いるのです)

此の *woher* に對しても英語では *whence* という語がありますが、これもいわば文語で、ドイツ語の *woher* のように一般的には用いられません。

位置と方向

此の *wo* と *wohin* との區別が、(すなわち「位置」と「方向」ですね)、ドイツ語では非常に重要になつてきます。そのうちでも殊に「方向」という考え方がドイツ語では特によく發達しているのです。方向を指すにはよく矢印→を用いますが、此の *hin* という語が、謂わばその矢印なんです。たとえば、何とかの展覽會があるが、あなたはどうします、と聞

かれたとき、「僕は行きます」と答える時には、單に Ich gehe とは云いません。必ず Ich gehe hin と云います。單に Ich gehe というのは、「わたしはお暇いたします」という時に云う慣用句なのです。(Er geht は「かれは去る」、Er geht hin は「かれは赴く」)

なんなら „Ich gehe→“ などと、すこぶる藝術的に表現しても好いのですが、この→のかわりに hin を用いると思えば感じが出るでしょう。

田舎者が東京へ来て、驛で「便所→」という掲示を見て、すぐその掲示の下でシャーとやつたそうです。「おいおい、そこでやつちやあ困る」というと、掲示をさして、便所と書いてあるじやないかという返辭。注意した人はあきれて、「此の矢印が見えないか」というと、田舎者ははじめて矢印に気がつき、あわてて機關銃を水平の角度に向けなおし、壁にむかつて直角に掃射を開始した……

これはマア少し話が面白ろすぎますけれども、それに似たトンチンカンな獨逸語を讀む人にもあるのです。というのは→の印は必ずしも hin であらわされるばかりでなく、時とすると、何の印もないことがあるからです。何の印もないから直ぐ其處でシャーとやつていいかという、そういうわけではなくて、よく見ると、hin はなくても、hin に相當する「四格」というものが→の役目を演

→ は hin 以外に  
四格形でも表現する

じていることがあります。

それはすなはち前置詞を使うときはなしです。たとえば in は「中」という前置詞ですが、In der Hand (die Hand [手] の三格) というと「手の中に」の意になり、in die Hand (四格!) というと「手の中へ」の意になります。auf は「上」を意味する前置詞ですが、auf dem Tisch (der Tisch [机] の三格) は「机の上に」auf den Tisch は「机の上へ」となります。

もつとも in の場合は英語でも in と into によつて區別しており、auf の場合も時に on to (あるいは onto) があつて、特に方向の表現をはつきり出すことができるようになっていますが、ドイツ語は、その他 unter (下) でも vor (前) でも hinter (うしろ) でも neben (そば) でも zwischen (間、中間) でも、とにかく空間關係を表現する大抵の前置詞は、三格と四格の使いわけによつて、位置と方向との區別を表現することができるのです。(そういう前置詞は九つあります、「三四格支配の前置詞」といつて、どんな文法書にでも出てくる有名な現象です) 茲では次の二つの文で此の文法をおぼえておきましょう：

Der Vogel fliegt *im* Zimmer. 鳥が部屋の中を飛ぶ。

**Der Vogel fliegt ins Zimmer.** 鳥が部屋へ飛びこむ。

im というのは in と dem との結合した形で、ins は in das です。部屋 Zimmer は中性です。

「外」という aus は  
少しちがう！

in の反対の「外」という aus は、「の外へ」という意で、方向だけしか意味しません。しかも必ず三格とともに用います。「鳥が部屋の外へ飛び出す」

は Der Vogel fliegt aus dem Zimmer です。(あるいは、hin を用いると、Der Vogel fliegt zum Zimmer hinaus という変な言い方をしますが、これはまだ覚えなくても好いでしょう)。

では「…の外に」、「…の外で」(位置!) の場合にはどうなるかという、これは außerhalb [アオセルハルプ] という、えらいやかましい長い前置詞を用いてしかも次に来る名詞は二格の形にします: Der Vogel fliegt außerhalb des Zimmers (鳥は部屋の外を飛んでいる)。

bei と zu

それから、或人の「所で」食事をする、或人の「所へ」出かける、といったような、人間の場合には、これは三格四格では表現できないで、その代りに bei (…の所で)、zu (…の所へ) という三格支配前置詞を使い分けます:

**Er arbeitet bei mir.** 彼は僕の所で働く。

**Er kommt zu mir.** 彼は僕の所へ来る。

助動詞と→

以上でわかる通り、ドイツ語は他の國語に比べて→印が非常にはつきりと形の上にあらわれるので、たとえば

**Er will in die Stadt.** 彼は市内へ行こうと思う。

**Ich muß aus der Stadt.** 僕は町を出なければならぬ。

のように、助動詞だけ用いれば、「行く」とか「出る」とか「逃げる」とか「駈けつける」とか云つたような動詞はなくても好いことになつています。Er will in die Stadt gehen はむしろ少し間の抜けた感じすら與えます。會話などで、Wohin so früh? (こんなに早くからどこへ行くんです) ときかれて、單に In die Stadt! といえ好いところを、Ich will in die Stadt gehen などという、ちよつと間が抜けておかしいのです。Ich will は云つてもよろしいが、gehen

だけはむしろ無きに如かず

です。ところが、少しドイ

吾輩は探偵犬である。ちょうど此の原稿を書いているとき、世間は下山總裁事件で大騒ぎをしているが、まだ吾輩の所へは一向たのみに来ない。幸に吾輩の鼻にとつては頗る好条件な梅雨の頃であるのに、三越の入口から地下鐵までの足取りを探知するのに、人間の嘘言などを取りあげて数日を空費し、それ位なことなら一分間で嗅ぎ分けて見せる此の吾輩に一言の挨拶もなかつたというは、いつたいどうした



ことか? ——地面が乾燥していれば嗅跡は数時間で消えるが、梅雨時のビル内や地下道ならば二週間は大丈夫なのだ。

今じやあもうどうにもならんから愚痴はやめる。その代り語學的なことを二三! 吾輩は獨逸語では Spürhund (嗅ぎ出し犬), Polizeihund (警察犬) または Bluthund (純血犬) という。Bluthund というと、ドイツ人は先づ「殺人鬼」という意の Bluthund を第一

に考えるが、その他に、英語の bloodhound (搜索犬) を直譯した Bluthund もあるということを知っておかねばならぬ。

餘計なお切題かも知れぬが、或る獨和辭書に Bluthund のことを、獵獸の「血」の匂いを嗅いで追跡する搜索犬だとか何とか説明してあるのは、これは恐らく出鱈目であるまいかと思う。Blut- はそんな意味ではなく、Vollblut (純血) の意、すなわち雜種にならないように、多年の結婚政策によつて系統の純性を守つて來た犬ということである。吾輩の鼻は別に血の匂いで相手を追跡するわけではない。たとえば下山さんが数日前まで着ていたねまきの匂いでも嗅がしてもらえれば、それだけでもつて三越から後の足取りを歩いて見せる。優秀なのになると、地下鐵に乗つた後の行衛だつてあるいはわかるかも知れないのだ。

英語は犬のことを dog というが、追跡犬のときにはドイツ語の Hund と同じ hound という語を用いるところにも注目していただきたい。

ツ語が出来て口の軽い人がドイツ人と會話すると、はたで聞いていると、どうも gehen が多すぎるという感じを持つのはわたしばかりではないだろうと思います。わたし自身の経験に徴してみても、Ich will in die Stadt (我れ市内へと欲す) じやあ、ドイツ語としては立派かも知れないが、まだよく慣れない頃にはどうも何だか斯う物足りなく

て、つい gehen と後へくっつけたくなる。gehen なんてのはよく知つてゐる單語で、お手のものだから、口に附いていて、すぐ輕快に飛び出すから、餘計かも知れないが、ツイ「えゝまけとけ!」てんで景品につけてしまうのです。

わたしは戦争當時疎開して木曾にいましたが、家の裏に梅の樹が二本もあつて、たくさんなつた。そこで嬬アめ慾ばつてウント梅

干をこさえて東京へ持つてきたものです。ところが、最近のように食料がよくなると、そう梅干ばかりも食つていられない。そこで嬬アの奴、誰か來るたびに、「梅干は間に合つておいでですか?」なんて、恩に着せて呉れてやろうとするが、聞いていると今まで一人だつて「それはありがたい、頂きましょう!」といつて飛びついたお客はない。大抵、「梅干は私の方も實は斯う斯ういうわけで食べ

れないほどありまして……」なんてなことになるにつて両方で大笑いする事が多い。ところが隣の奴、止せばいいのに、人の顔を見ると梅干梅干と云つて、そのたびに失敗をくりかえしています。——gehen はつまり梅干なんで、日本人のドイツ語に gehen が多すぎるというのは、つまり、わたしの隣と同じような心理からツイ多くなるのだらうと思います。別に悪気があるわけじゃないので、少しおめでたすぎるだけの話です。刑法や文法に引つかかるほどの問題ではありません。

## 2. an の基本的な意味

獨逸語には an という獨特な前置詞があることに注目しましょう。他の前置詞は「の中に」(in) とか「の上に」(auf) とか云つて、譯語だけでもハッキリと意味がつかめますが、an だけは、そうしたハッキリした譯語をあてはめることができません。しかし、譯語がハッキリしないからと云つて、決して意味がアイマイなわけではなく、上下、内外、前後、などと同じような、ハッキリした空間關係を示しているのです。

**Der Kalender hängt an der Wand.**

カレンダーは壁に懸かっている。

日本語では壁「に」かかっていると云いますが、獨逸語では此の「に」を單に名詞の三格で表現することはできません。「私は部屋にいる」(Ich bin *in* der Stube), 「私は椅子にかけている」(Ich sitze *auf* dem Stuhl) など、すべて「空間關係」を指す「に」という日本語は、獨逸語では必ず前置詞を用いるのです。(私はおまえに何かを與える、告げる、怒す、などとは全然別物であることがわかりましょう)

ところで、此の「壁にかかっている」の場合は、壁の上でもなければ下でもなく、中でもなければ外でもありません、單に壁『の表面と接觸して』かかっているわけです。こういう場合には an を使うのです。

**An meinem Rocke fehlt ein Knopf.**

わたしの上着【に】はボタンが一つとれている。

註: der Rock: 上着。fehlen, 缺けている, ない。der Knopf: ボタン。

ボタンというものは、申すまでもなく服『の表面と接觸して』ついているとしたものです。だから、釦が缺けている際も、服『の表面に接したところで』缺けている、ということになるわけです。

**Christus starb am Kreuz.**

キリストは十字架にはりつけられて死んだ。

註: starb: sterben (死ぬ) の過去形。das Kreuz: 十字架。

『はりつけられて』というのはもちろん意譯で、『について』といつてもいいでしょう。これも、十字架の前でもなければうしろでもない。「前」とか「そば」とか云つては、キリストの身體と十字架とが二三尺もはなれていたような感じを与えるでしょう。そうではない、手や足は、釘づけにされて、ビタリと十字架に接していたのです。

以上が、最も嚴密な意味における an の基本的な意味ですが、それほどビタリと接してはいなくても、とにかく物に近く接している場合にはすべて an を用います。たとえば:

Sie horcht an der Tür.

彼女は扉のところで立ち聴きしている。

註: horchen: 英の listen. (耳をすます, 傾聴する)。

かならずしも扉に耳をくつつけているわけではないでしょうが、とにかく、『……にくつついて』いるのも同然だから an です。

以上は、ほんの基本的な、しかも空間關係のみに關する説明ですが、他のいろいろな複雑微妙な用法は、すべてこれから出立しています。

an は語源から云うと英語の on と同一物ですが、英語の on に相當するドイツ語は an ではなくて、むしろ auf です。その auf は語源的には英語の on ではなくて up であるという、妙に交叉した厄介な關係にあります。いずれにせよ、ドイツ語には、英の on に相當する語が二つある、すなわち用法の上で相當する auf と、單に語源の上で相當する an の二つがあることに御注目下さい。

けれども、on と an とは、なにしろ歴史的には同一物なのですから、或種の場合には用法も一致することがないではありません。たとえばさきほどの文例「キリストは磔死した」は、英獨とも次の如く全然一致します。

獨: Christus starb am Kreuz.

英: Christ died on the cross.

### 3. 充溢の表現に就いて

Das Lokal sitzt voll Menschen.

——此の店は満員の盛況だ。——

註: Lokal, *n.* 「店」は、賣店の際には Geschäft, *n.* とか (Blumengeschäft 花屋, Metallwarengeschäft, 金物屋) Laden, *m.* とか (Gemüseladen, 八百屋, Tabakladen, タバ

コ屋) Handlung とか (Buchhandlung 本屋, Möbelhandlung, 道具屋) とか云うが, 飲食店 (Wirtschaft) の際には, 會館などと同じ Lokal という語も用いる。此處の Lokal も, ビヤホール (Bierlokal) か珈琲店 (Kaffeehaus) と思つて頂きたい。

今日の研究は, 此の短文が範例 (Paradigma) になりますから, よく睨んで, 暗記してしまつて下さい。

直譯すると『店は・人間に満ちて・坐つてゐる』ですが, ちよつと變な表現法です。人間に満ちるのはいくら満ちたつて構わないが, 店が坐つてゐるといふのは, これはまた一たいどうした事なのでしよう? 坐つてゐるのは大抵人間の方で, 店の方は普通立つてゐるものですが……

こういう合理的な批評が起るのは勿論當然ですが, ドイツ語ではとにかくこう云う表現法をするのですから, これはとにかく一つの筋路として單純に受け入れるしかありません。もちろん, 合理的に, Das Lokal ist voll Menschen と云うのですが, ist では興がないから, Menschen という語を主語として其の生態を述べるとしたら恐らく用いるであらう様な動詞 (すなわち: die Menschen sitzen だから sitzen) を持つて來て ist の位置に置く, というわけです。理窟はえらい八釜しいが事柄はすこぶる簡単です。

だから, sitzen ばかりとは限らない, たとえば交通地獄時代の汽車の車室 (Wagenabteil, n. または單に Abteil, n.) ならば, 坐れるあり, 立てるあり, しやがめるあり, 臥せるあり, 傾けるあり, 寄りかかれるあり, 反れるあり, 懸れるあり, 浮けるあり (實際あります! 私は中央線で人の間に挿まつたまま足が床につかない事がありました)……ですから:

-----Das Abteil sitzt, liegt, steht und-----  
kauert voller Menschen.  
車室には人間が一杯坐つたり, ねたり,  
-----立つたり, しやがんだりしている。-----

註: (1) kauern: しやがむ。——(2) voller は voll と同じ「……だらけの」という前置詞。

こういう妙な云い方は, 満員の場合ばかりとは限りません。とにかく, 或る場所が何物かで一杯である, という場合にはすべて此の形式が用いられるのです。以下, 同種の文をならべて見ましょう。(すべて voll という前置詞が用いられますが, voll は二格支配ですから, 次に複数が來ると, その形容詞は -er という複數二格の語尾をとります。單數では, -s は普通省かれます: voll Staub 埃だらけ, voll Wasser 水だらけ。——voller という前置詞も同様です。voll von

を用いると次は勿論三格になります)

1. Die Blume hängt voll Tautropfen.

花には一面に露の滴が懸かっている。

2. Der Teich schwimmt voller Fische.

池には魚が一面に泳いでいる。

3. Die Straße läuft voll Regenwasser.

街路は一面に雨水が流れている。

4. Die Stadt ragt voller Schlote.

市街は一面に煙突が聳えている。

5. Mein Kopf steckt voll glänzender Einfälle.

わたしの頭はすばらしい思い付きで充満している。

此の型の構文がわかつたら、次には、ドイツ人ならば期せずして連想するであろう有名な通り言葉を序でに覚えておく必要があります。それは：

Der Himmel hängt voll Geigen.

天を仰げばこはいかに、

見渡す限りのヴァイオリン

『天は一面にヴァイオリンがぶら下つている』というのは、要するに『ポーッと氣が遠くなるような嬉しい氣持』の表現で、いわゆる『手の舞い足の踏むところを知らず』という奴に多少似た通り言葉にすぎないのですが、なぜそんな妙な事を云うかというところに一寸した仔細があります。

諸子は Ekstase [エックスターゼ] (法悦) という言葉を御存じですか？ 英語では ecstasy [エックスタシイ] と云い、佛語では  $x$  で書いて extase [エックスターズ] ですが、これは、基督教の聖者が往々にして陥る「神がかりの状態」のことです。一心不乱に神を念じていると、瞑想が佳境に入るとともに、やがて恍惚たる忘我自失の状態に陥り、心魂が現身を蟬脱すると同時に、身體そのものも亦自然科学の法則を蟬脱して虚空に浮かぶのだそうです。繪に描いてあるのを見ると、足と地面との間が二三寸あいています。そして、有頂天になつて、眼を輝

やかしながら、天の一角を凝視しています。すなわち「見神」の瞬間です。すると、見上ぐる彼方、天の一角には、紫雲たちまち左右に披いて、その間には天國の一部が垣間見えている。その天國は、精霊や、精霊を象徴する白鳩などで示されますが、大抵は小さな可愛い天使がのぞいている。また、よくヴァイオリンを弾きながら、いわゆる妙なる天樂を奏している。佛教の方でも、法悦の舞臺装置と音響効果は大體よく似ていて、まあ何てことはない松竹か寶塚の少女歌劇の大詰よろしく、天樂りゆうろうと響き渡り、天華さんさんと降る、です。

現在では此の Ekstase という語は、單に恍惚奪魂、虛脱的悅樂の異常心理を指しますが、元來は以上のような宗教上の神がかりの法悦の刹那を指したのです。久米の仙人とやらは、神通力を以て虚空を飛んでゆく最中、川端で洗濯している女の太股の白い所をチラと見て、ために安定を失つて錐揉み状態に陥り、何處だつたか不時着してしまつたそうですが（御婦人諸子の反省を望む）、こうした安定喪失の原因は、現代語としての Ekstase には該當しますが、元來の意味に於ける Ekstase とは、むしろ眞向の反對と云えます。如何となれば、Ekstase（『地を離れて立つ』、ギリシャ語）は身が地を離れて飄乎と宙に浮かぶことであつて、久米仙人みたいにドスンとおつこちることではないからです。

以上のような縁起によつて、Der Himmel hängt voll Geigen といへば、誰もがそうした法悦歡喜の状態を考えるので、これが普通『氣も上の空』とか『魂九天の彼方に飛ぶ』とか『手の舞い足の踏む所を知らず』とかいう意味の句になつてしまつたと云うわけです。

ところでマア、Ekstase も結構ですが、健實なる文法の地盤を離れて二寸も三寸も文化史的虚空に浮いてしまうのもどうかと思うから、また文法上の問題に歸りましょう。——此の種の表現において、常識の見地から、いちばん氣にかかるのは、やはり最初に申し上げた「主語と動詞との變則的な關係」だろうと思いますから、此の點を少し別方面から例解して筋路を明らかにして見ます。

英語には、此の通りの型はありませんが、voll や voller の代りに with (=文字通りには mit, 實際としては von に該當) という前置詞を用いると、或種の動詞は斯うした構造をとります。たとえば：

[A] *This pond teems with fish.*

[B] *Fish teem in this pond.*

此の池には魚がうようよいる。

註：御存じの通り、英語では fish という語は集約名詞 (collective noun, Sammelnamen) で、

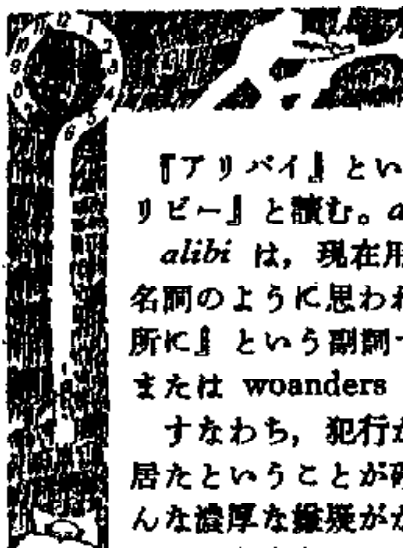
単数のままでもつて多くの魚を意味します。ドイツ語では複数形: Dieser Teich schwimmt voll Fische または Dieser Teich wimmelt von Fischen.——英語では集約名詞を主語にすると動詞は *pl.* になります (*Fish teem*……) が、ドイツ語では単数変化です、たとえば *Das Vieh grast* (家畜が草を喰う)

上例の *teem* は「うようよしている」、「群棲する」の意で、ドイツ語では *wimmeln* と云います。*teem* と同意の *swarm* (群れる), *crawl* (うごめく, うじやうじやする) でもやはり同じで、*The ground is crawling with ants* は *Ants are crawling on the ground* (蟻が地面の上をうじやうじや匍いまわっている) と同じ、*The tree is crawling with caterpillars* は *Caterpillars are crawling on the tree* (樹には毛蟲がうようよしている) と同じです。なお、*alive* (うようよしている) という形容詞までありますが、これも *The tree is alive with caterpillars* です。

いろいろな場合があるにかかわらず、特に此の「うごめく」という場合を取つてクローズアップしたのは「主語と動詞との関係」が此の一角から明瞭になつて来るからです。たとえば英語の *teem* がそうですが、「魚が」うごめくのが論理的かも知れないが、あんまり澤山うごめいていると、おしまいには「池そのものが」うごめいているような感じを与えるので、それで遂に、表現が飛躍して「池が魚でうごめく」ということになるのは極く自然です。また、*alive* というのは、元來は「生きてピクピクしている」ことですが、樹木全體が毛蟲で蔽われていると、どの枝もどの葉も、うじようじよと動いているから、樹そのものが生きて身じろぎして居るのと同じとも變りません。さればこそ *The tree is alive with caterpillars* (樹は毛蟲で生動す) というわけです。ドイツ語なら *with* の代りに *von* を使つて、*Der Baum ist lebendig von Raupen* と云い、あるいは、もつと好いドイツ語でなら、前述の文法によつて *Der Baum kriecht voll von Raupen* (樹は毛蟲だらけに匍う) です。*wimmeln* を使えば *von* になつて *Der Baum wimmelt von Raupen* です。

ドイツ語の場合は、「樹が匍う」という、ほとんど考えられない様な無茶な言い方にまで發展してしまうので、外國人には一寸納得が行かない文型が出来上つてしまうのですが、其の出發點が *wimmeln*……*von*, 即ち「……うごめく」の型にある事を思えば、此の極端な飛躍もあながち不可解な現象ではないのです。

極端な場合の方を先に紹介しましたから、こんどは英語と同様の表現法を取る場合 (即ち、同じ「充溢」、「充満」の表現でも、ややおだやかな方の型) を例示します。度々云つた通り、前置詞は *mit* (*with*) ではなくて *von* です。



『アリバイ』というのは *alibi* の英語読みで、獨逸語の方ではこれを『アーリビー』と読む。*alibi* はラテン語である。

*alibi* は、現在用いられている『現場不在説明』という意味では、ちよつと名詞のように思われるが、實は名詞ではなく、『どこか別な場所に』或いは『他所に』という副詞である。即ち獨逸語の *anderswo* または *irgendwoanders* または *woanders* というやつにあたる。英語なら *elsewhere*。

すなわち、犯行が行われた同時刻に、問題の容疑者がどこか別の遠い場所に居たということが確認されれば、それで *alibi* が確認されたわけで、たとえどんな濃厚な嫌疑がかかつていても、*alibi* が確認された以上はもはや全然問題にならなくなる。だから容疑者の方でも何とかして *alibi* を確認させようとして懸命の努力をする。三鷹事件参照。

けだし人間の身體という奴は、同時に二つの場所に居合わせる事が出来ないという點では頗る不便に出来ているようだが、いざ何か事が起きた時には、とりもなおさず此の不便が善人を守り悪人を罰して呉れるので、神様は決して寝とぼけながら世界をお創り遊ばしたのではないということがこれでもわかる。アーメン。

1. Mein Kopf schwirrt von deutschen Vokabeln.

私の頭の中はドイツ語の單語でうなつている。

2. Ganz Japan brodelte von halbverdauten europäischen Ideen.

日本全國が半消化の歐米思想で煮えくりかえる。

3. Sein Gesicht überströmte von Liebenswürdigkeit.

かれの顔は愛嬌こぼれんばかりである。

4. Sein Ton strotzte von Kraft und Selbstvertrauen,

かれの語調は力と自信にはち切れんばかりだ。

5. Die ganze Ebene wogte und rauschte von grauen Fluten.

見渡す限りの原野が濁流にのたうちざわめいていた。

6. Der ganze Saal widerhallte von Protestrufen.

場内には忽ち喧々囂々たる抗議の嘯號が捲き起つた。

7. Seine Stimme zitterte von verhaltenem Unwillen.

かれの聲は抑さえ切れぬ不満に顫えていた。

8. Ihr Brief phosphoresziert von Ironie und Anspielung.

彼女の手紙は皮肉と厭味で妖しげな磷光を放っている。

9. Der ganze Hafen starrt von Mastbäumen.

港は見港す限り帆船が亂立している。

10. Sie funkelt von Gold, Silber und Diamanten.

彼女は金銀ダイヤで燦然たる光を放っている。

11. Der Platz ist schwarz von Menschen.

廣場は人出で眞黒だ。

#### 4. 何がどうのこうのという mit

神代の昔、いざなぎ、いざなみの兩神が、河原でせきれいが交驢しているのを（現代ならさしずめ街頭でワン公が實演しているのを見たと言ったようなことになるでしょう）御覽になつて、吾等も亦かくなさばやとか何とか仰言つて、世界最初の男女の交りをお結びになつたという話は有名ですが、此の有名な話を相手が知っているかどうか訊ねようとする場合には、日本語でも單に「君、例のせきれいの話を知ってますか？」と云いますが、ドイツ語でも

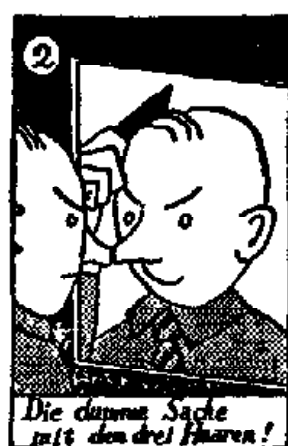
Kennen Sie die Geschichte mit den Bachstelzen?

註: Bachstelze, f. せきれい（いしたたき、にはたたき）

と云います。ちよつと考えると「せきれいの話」だから、二格か von を用いて die Geschichte der Bachstelzen または die Geschichte von den Bachstelzen とでも云いそうな氣がするかも知れませんが、mit と云うところにドイツ語の特癖があります。

mit を用いると、どういう事になるかと云うと、嚴密に云うならば「せきれいの話」とか「せきれいに関する話」とかいうのではなくて、むしろ「せきれいの

出て来る話」あるいは「せきれいがどうの斯うのと云う話」と云つたような意味になるのです。——此の同じ話を、もし「いざなぎ、いざなみ兩神の話」と云つて表現しようとするれば、これは兩神が話の主人公であり主體でありますから Die Geschichte von den beiden Göttern Izanagi und Izanami と云つてさしつかえありますまい。ところが、せきれいの方は、たとえばイソップの動物寓話におけるが如き話の主要人物ではないから、これをせきれい『の』話と云うことはドイツ語では少々大袈裟すぎるのです。ところが、せきれいという奴は此の話の中で一番印象的な部分で、たとえ神様のお名前はお忘れ申し上げても、せきれいだけは強く脳裡に焼きつけられて、人によると夢にまで見るそうですから、此の話總體を呼ぶのに「例のせきれいの話」という語を以てしたくなるのは、洋の東西を問わず、これは自然な人情と申さなくてはなりませんまい。ただ、ドイツ語では、von や二格は用いず、もつばら mit を用いて『……がどうのこうのと云う話』『……が何とか



した話』ということを表示するのです。

また別な例で申すなら、俗に英語讀みでウィリアム・テルと呼んでいる芝居があります。これはドイツの作家 Schiller の作、Wilhelm Tell という瑞西建國の縁起談ですが、中に有名な「林檎の場」(Die Apfelszene) というのがあります。残忍な代官の命によつて Tell がわが兒の頭の上にのせた林檎を數十歩彼方から射落とす場ですが、これはあまり有名なので普通 Apfelszene [アップフェル・スツェーネ] と呼ばれていますから、それをよく知っている人はたとえば今度の藝能祭に「林檎の場だけやろうじやないか」Wir geben nur die Apfelszene!) などと云うでしようが、そんな氣の利いた常用語を知らない人は：

Weißt du was, wir geben nur die Szene mit dem Apfel!

どうだ君、例の林檎の場面だけやろうじやないか!

註：(1) Weißt du was は、「どうだ君」、「時に君」という邦語に相當し、突然何か提議したり、提案したりする時に最初に用いる句。——(2) geben: 芝居の用語で、何か出し物を「出」すこと: Was gibt man jetzt im Kabuki-Theater (只今歌舞伎座では何が掛かっていますか)

Geschichte や Szene ばかりではありません、その他にかく『云々の件』とか『何が云々といういきさつ』とか、要するに『件』や『いきさつ』を意味する語、たとえば die Sache (件), die Angelegenheit (件), der Umstand (事情, いきさつ) などは、すべて此の『がどうのこうのと云う』という mit とともに用いられます。



たとえば、小説を脚色して Theaterstück (脚本) に變えるとします。原作には海洋のまつただなかに投げ出されて鯊の群と闘うところがあるが、舞臺ではそんな所は見せられないから：

Der Umstand mit den Haifischen wird nur mündlich vorgetragen.

鯊がどうのこうのと云ういきさつは單に口上で述べられる。

註：(1) Hai または Haifisch, m. 鯊, 鯊。——(2) mündlich: 口で, 口頭で。——(3) vortragen: 述べる。

殊に、通俗の會話で最も頻繁に用いられるのが die Sache mit…… (……の件) というやつで、die Geschichte mit…… と云いますが、これは特によくおぼえておく必要があります。たとえば、人に何か言われて、しばらく前の話を思い出したとすれば：

Ach so, die Sache mit dem Fahrrad!

あゝそうそう、例の自轉車云々の件がありましたね!

die Geschichte とか die Sache とか云う代りに、普通よく單に das と云います。Das mit dem Fahrschein (乗車券がどうしたとかどうしたとか云う話), Das mit dem Operieren (手術するのどうのと云う件), Das mit der Stromspërre (停電云々の問題) など。

Das mit dem Blutdruck brauchen Sie sich gar nicht so zu Herzen zu nehmen.

血壓云々の件は決してそう御心配なさるほどのことではありません。

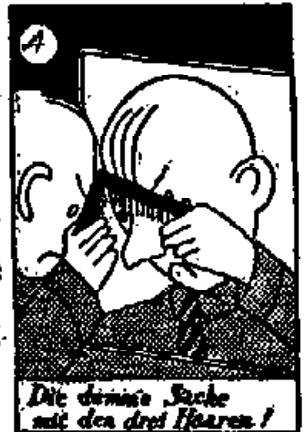
註：(1) Blutdruck, m.: 血壓。——(2) brauchen nicht (と zu): 云々する必要なし。——(3) sich etwas zu Herzen nehmen: ある事を氣にする, 氣に病む。

以上の mit の用法がわかりましたら、ここに改めて挿畫の漫畫の獨文をよく味わつて下さい：

## Die dumme Sache mit den drei Haaren!

此の毛三本がどうにもならぬ!

直譯すると「たつた三本の毛云々の馬鹿げた件」ですが、dumm という語は、たとえば「いやんなつちやつた!」「困つた!」という時に Es ist zu dumm! (人を馬鹿にしてやがる!) というのでもわかる通り、なんでも「困つた」とか「馬鹿にしてやがる」という時に用いる形容詞なのです。だから Die dumme Sache は「困つた問題」といつたような意味になります。



## 文章論

### 1. 「意味形態」ということに就ての押し問答

芳子: 先生ちよつと……

亮子: 先生ちよつと……

先生: エヘヘ、何ですか?

亮子: どうぞお先きに……

芳子: 宜しうございますか? では……先生ちよつと質問なんですが、先生はよく「意味形態」ということを仰言いますね? 意味形態つて、いつたい何の事なんですか?

先生: さあ……そいつはチヨット……一言では片づきませんな……

芳子: いやあ二言でも結構ですわ。

先生: いや、二言でも駄目ですな。

亮子: では失禮して私の方を先にして頂きましょうか。私のは簡単ですから。

芳子: どうぞ。

亮子: 先生の獨作文教程という本の 290 頁に

Wenn die Nase der Kleopatra um einen Witz kürzer gewesen wäre, dann würde die Weltgeschichte einen ganz andern Verlauf genommen haben, dann wäre vielleicht der Weltkrieg nicht ausgebrochen.

という作例が出ていますね？これは何か有名な説なんですか？

先生： 説というほどのものではありませんが、誰もがよく云う奇論として有名ではありますね。クレオパトラ女王の鼻が一ミリでも低かつたら、羅馬の Antonius もひよつとすると女王に惚れなかつたかも知れない。そしたら世界史の歩みもすつかり變つていたろう、という、つまり原因結果の科學的關係を極端に表現した奇論なんです。

亮子： ああ、そうですか。ところで、um einen Witz kürzer (ほんの冗談ばかり短かい) という文句の問題ですが、これがどうもよく納得できませんから、少し詳しく御説明下さいませんか。Witz というのは、英語の wit と同じで、つまり「頓智」、「洒落」のことなんでしょうが、こんな言葉をこんな風に使うのですか？

先生： そういうわけではありませんが、それがつまり一つの Witz なんですよ。

亮子： と申しますと？

先生： それはつまり斯う云うわけです。結局言おうとするところは『ほんのチヨンビリ』短かい、ということに過ぎないのですが、その『チヨンビリ』ということ表現するのに、西洋人は西洋人なりの癖があつて、いろんな面白いことが言えるので、たとえば um ein Haar (髪の毛一筋ばかりも) とか、um einen Schatten (影ほどでも) とか、um eine Idee (一觀念分ほど) とか um ein Atom (一原子ほど) とか um eine Molekel (一分子ほど) とか、遂には um ein Nichts なんてことまで云います。これらは或いは既に辭書に登録されているかも知れません。けれども、更に飛躍して、『ほんの噂ほどでも』とか、『ほんの洒落ばかりでも』とか、『ほんの嫌疑ほどでも』とか、その他とにかく、稀薄な、淡い、頼りない、幽かな、軽い存在を意味する言葉なら、どんな言葉でもよろしい、とにかく、そう云つた線に沿つた言葉を持つて來ればその意味に受け取れるというわけで、ここがつまり言語というものの面白いところでしょうな。



————— ニュースに就いて ——— 16 ———

『ニュース』(news) という英語は、獨逸語の etwas Neues (something new) というのを知っている者には、news と Neues とが妙に一致しているので、文法的に同起源のものではないかという憶測が起りがちであるが、これは全然ちがう。

だいいち、etwas Neues の -es という語尾は、申すまでもなく、勿論英語の s とは全然別物である。また、-es は中性の一格、あるいは四格であるような形に見えるが、歴史的にはむしろ二格だという説の方が有力である。即ち『新しき事の幾分か』という構造なのである。(ただし現在では etwas Neues の二格形はまた別に etwas Neuem と變化するが)

英語の news という奴も、(たとえば例の有名な *Opium-eater* の作者 *Thomas de Quincey* の説によると) new に複数の s をつけて作ったものではなくて、昔、ロンドン市の東西南北に四つの驛場があつて、そこへ毎日驛馬車が着いて國內の消息を持ち込んでくるから、North (北), East (東), West (西), South (南) の頭文字をならべて NEWS という語が出来たのだと云う。

断わつておくが、news にピッタリ該當する獨逸語は Neues ではなく、Neuigkiet, f., Zeitung, f. (雅語は Märe, f.) である。

亮子: するとつまり、これが、先生の仰有る「意味形態」というものの非常に好い例だと思ひますが、ちがいますか?

先生: そうです! 適當な所を指摘して頂いて助かりました! (芳子に) わかりますか。

芳子: まだよくわかりませんが……

先生: つまりですね。たとえば、同じ『ほんの少々』という意味の事を云うにも、日本人なら『ほんのお印ばかり』とか、『ほんの申しわけばかり』とか、蚊の涙とか、蟻のきんたまとか (そんなことは云わないかな?) その他、二階から目薬とか、お砂糖屋の前を鼻をつまんで駈けて通つたほどの甘さしかないとか、その他色んなことを云いますね? しかし、言葉はいろいろとあるけれども、意味は結局『ほんのチョッピリ』というだけの事にすぎないでしょう? 意味というよりは、むしろ「趣旨」はですね。

芳子: それはよくわかります。

先生: その「趣旨」という奴を考えて、そして、その趣旨を表現するために日本語なら日本語、ドイツ語ならドイツ語が自然に展開する「特辭」のことを「意味形態」というのです。

亮子: すると、私がお伺ひした Witz の件で、「意味」と「意味形態」とをハッキリ區別するとすれば、どういう風に説明したらよいでしょう?

先生: それは、先ほど申しあげた Haar や Schatten や Idee や Witz や Scherz を比較しながら「意味」とか「意味形態」とかいう言葉を使つて見るとよくわかります。少し微妙な理窟をこねますから、よく氣をつけて聞いて下さい。すなわち、Haar は「髪」の毛」という『意味』であり、Schatten は「蔭」という『意味』であり、Idee は「理念」という『意味』です。『意味』はそれぞ

れ違います。けれども、『ほんのチョッピリ』という意味で用いる時には、その元來の意味の如何にかかわらず、前後關係の勢でもつて、期せずして同一の型にはまつてしまいます。此の、元來の意味の如何に關せず、前後關係、すなわち「言わんとする趣旨」の方向に向つて凡ての既成の單語を恐ろしい力でもつて是が非でもグイグイと引つ張つて行こうとする「流れ」のことを、私は意味形態と呼びたいのです。

芳子： 單に意味とか、用法とか、その時々を用い方とか、用い癖とか、傾向とか、そう云つた云い方をしては先生の御趣味には合わないんですか？

先生：（禿頭を掻きながら）こいつは一本参りましたなア！

亮子： でも、わたしの感じでは、「用い方」なんかより、「意味形態！」と云つた方が感じが好いと思いますわ。その方が感じが學問的ですよ。意味形態!!! すてきだわ！

先生： エヘヘヘ、どうも畏れ入ります……いや、別にそう云う心算でもないんですがね。もちろん、『言い方』と云つたつて好いんですが……ただどうも……そう云う風に云つたんでは、私が丁度思つている所へ考えが向かないんですよ。

芳子： だつて、それは一寸ヘンじやありませんか？ 平易な言葉で云うのと、堅いむつかしい術語で云うのと、云おうとする事柄が同じ物なら、けつきよくどつちだつて同じことじやありませんか？ むしろ平易に云つた方がよくわかるのじやないでしょうか？

先生： そうでしょうか？

芳子： 私は、そう思いますわ。

先生： 私は、そう思いませんな。

芳子： どうしてですか？

先生： ニュートンの場合と比較するのは少しおこがまし過ぎるかも知れませんが、それが一番よくわかるから、笑われるかも知れませんがニュートンの場合を例に取つて申しませう。ニュートンは、「萬有引力」ということを云い始めました。獨逸語では之れを Allgemeine Gravitation [アルゲマイネ・グラヴィタツィオン]、英語ではこれを universal gravitation と云います。むつかしい言葉です。林檎が樹から落ちるのを見て氣がついたんだそうです。しかし、そんなむつかしい新しい術語を使わなくつたつて、「落ちる」と云えば簡単にわかるじやありませんか？「落ちる」というのと「引力」というのと、どちらがいます？ 物は結局同じ物を指しているのではありませんか？

芳子： では、「用い方」というのと「意味形態」という概念との間には、ちょうど「落ちる」という言葉と「引力」という考え方との間に在るほどの大きな相異があると仰有るのですか？

先生： 私はマアそう思っているのですがね。

亮子： お話がなんだか大變むつかしくなつて來たようですが、一つまた實際問題に歸つてお伺い致します。そうすると、『ほんの少しばかり』と云いたい時に、um einen Schatten（ほんの蔭ばかりでも）とか um eine Idee（ほんの觀念ほどでも）とか、その他色んな奇抜な名詞を持つて來てもかまわない意味形態があると致しますと、そうした Schatten とか Idee とか Scherz とか Witz とか云つたような名詞には、意味形態の點から見て、何かこう、ハッキリした共通の色彩と云つたようなもの……

先生： つまり「形態」ですね……

亮子： そうです、形態と云つたようなものがなくてはならない筈ですね？

先生： そうです、私はつまりそれを云うんです。それがあるから、つまり意味形態というものがある、と云うのです……

亮子： すると、此の場合の意味形態は、どういう風に云つたらわかるでしょう？

先生： わかるのは譯はないが、定義するとなると、なんでもない事がむつかしいものでね。たとえば、こう云う風に考えたらどうです。「蔭」にしろ、「觀念」にしろ「洒落」にしろ、いずれも凡て「吹けば飛ぶような頼りない幽かな」ものだという點で同趣旨の代物です。つまり實在性が薄いと云いますか。Schatten というのは、實は「陰影」という Schattierung の意味なんです。Schattierung というのは、いわゆるニュアンスという奴です……

亮子： ニュアンスというのは、よく聞きますが、詳しく云うといつたいどういう事なんですか。

先生： ニュアンスというのは佛蘭西語で、*nuance* という、元來は畫の方で用いたことばです。『色調』、『色合い』……つまり同じ褐色でも、栗色あり、茶褐あり、焦げ茶色あり、色味に無限の濃淡その他の微妙な差がある。その微妙な差を稱して *nuance* というのです。單に濃淡ばかりではないが、濃淡と云つても同じです。フランスは畫の本場なので、此の *nuance* という術語が有名になり、英語でも、*nuance*、ドイツ語でも *Nüance* といいます。ただドイツ語には、その外に Schattierung（濃淡）という好い語があるので、um eine Schattierung と云い、また影の濃淡を考えて um einen Schatten と云う、という

わけです。

芳子： それから、先程から氣になつていますが、um einen Witz とか um einen Schatten とかいう、此の um という前置詞の用い方……これもやつぱり意味形態というものがあるのでしょうか……只今の場合の意味形態はどういう風なのですか？

先生： こういう、前置詞の用法などになると、どうしても「意味形態」というものがあることに誰だつて當然氣がつくでしょう？ つまり「用い方のタイプ」と申しますか、あるいは「共通な筋路」と申しますか、とにかく一般的な規則として覚えておくと、そうした筋路が思想發表の際に役立つことが度々起つて來ると云つたような現象があれば、それはすべて私の申している「意味形態」というものに關係があると思つて好いでしょう。——では御質問の um の意味形態に就てちよつと述べて見ましょう。此の場合の um は、たとえば「あなたは私より五センチだけ脊が高い」とか云う場合の「だけ」に相當する um で、學習の便宜

「差」を指す um  
(單に四格だけの事もある)  
英語: by

上「差を指す um」とでも呼んでおきましょう。もちろん、現に日本語の方でも、必ずしも「だけ」とか「分」とかいう言葉を使う必要はないので、なんなら「あなたは私より五

センチ脊が高い」と云つていいわけですが、ドイツ語の方も、必ずしも um を用いなければならないというのではなく、單に名詞を四格にして置いただけでも好いのです：

あなたは私よりも五センチだけ脊が高い：

[1] Sie sind um 5 Zentimeter größer als ich.

[2] Sie sind 5 Zentimeter größer als ich.

芳子： すると、こうした um は必ず größer とか kleiner とか、とにかく比較級の形と一緒に用いてあるわけですね？

先生： そうは行きません。そういう風に形式的におぼえてしまうと、たくさん例外が出て來てまどつく事が起つて來ます。それよりも、「差の um」の「意味形態」の方から理解してかかつた方が間違いがなくて宜しい。たとえば：

Ich bin um 5 Zentimeter gewachsen.

私は五センチばかり脊が延びました。

Er hat sich um 10 Jahre verjüngt.

かれは十年ばかり若返つた。

Amerika ist uns um 20 Jahre voraus.

亞米利加は我々より二十年分も進んでいる。

と云つたように、必ずしも形容詞の比較級ばかりではない、「脊が伸びる」とか、「若返る」とか「進歩する」とか云つたような、いやしくも「差」というものが生ずる意味の動詞を用いる場合にはすべて um が用いられるわけです。いつた語學をやる場合には、外國人の心理の中をのぞくという先入観があるために、事毎に自信が持てなくなつて、すぐ何か斯う形式的なことを據り所にして判断し

なにをどう云うか

インテリ——17

我國でインテリということを出したのは、かなり最近のことだと思ふ。これもやはり左翼運動と關係して、思想論壇でマルクス主義者たちが流行させた語の一つだ。

そう云えば西洋でもその通りである。インテリというのは、「インテリゲンツィア」の省略で、インテリゲンツィアというと、「ツィ」という音が混入つてるところから見て、ドイツ語ではないかという想像がすぐ起るが、しかし、根源は或いはそうかも知れないが、直接にはどうも露西亞語ではないかと想像される(すなわち ИНТЕЛЛИГЕНЦИЯ) もちろん、いずれにしても、言葉そのものの本源はラテン語で、intelligentia なのだが、tia を「ツィア」とよませるところが、ドイツ語か、それとも露西亞語かという想像を起させるのだ。

いずれにせよ、『知識階級』というものを、一つの社會階級として、たとえば士農工商とか、ブルジョワとかプロレタリアとか云うのと同じように、はつきりした術語で呼びはじめたのが、此の Intelligentsia (知識階級) という語である。本場のドイツ語ではあまり用いられないが、英語などでは、intelligentsia あるいは intelligentsia と、ハッキリと「ツィ」の發音を移した ia, ize の綴でもつて用いられている。

ことわつて置くが此の -ia という語尾の場合は、原語のラテン語にしろ、そのまゝ用いる獨語露語にしろ、もちろん所謂「集合名詞」あるいは「階級」そのものの意で、一人一人の「インテリ」を指すのではない。

一人一人のインテリを指す場合には、der Intellektuelle「インテレクトゥエルレ」という語が用いられる。文法的には intellektuell という形容詞の名詞化した形である。英語でも the intellectual という。

これはつまり『理智』『知性』という der Intellekt から來ている。

ようとする傾向が生じ勝ちです。たとえば、比較級と共に用いてある時には um は「差」を指す um だ、と云つたようにですね。そういう考え方は手つ取り早くはあるが、ほんとうに徹底した理解には適しません。そこで、そうした傾向を是正して、なる可く表面的なことを其の一段奥に動いている底流の方から出發して

理解するようにすすめたいと思うものですから、それで私は文法の方で意味形態ということをやかましく云うのです。どうです芳子さん、多少わかりましたか?

芳子: なんだかまだよく……もつと度々伺わして頂かないと解りませんわ。

先生: ではもつと度々私のところへ質問にいらつしやい、エヘヘ……

知識人のことをもつばら Intellektueller といいたしたのは、これもごく最近のことで、一時は Intelligenz, f. [インテリゲンツ] という語も流行ったことがある（これは女性だが、階級名ではなくて、一人一人を云う。）Heine などは、まだ der Intellektuelle を用いず、複数形の die Intelligenzen を多く用いている。

しかし、最後に重要なことを附記しておきたい。それは即ち、いつたに此の「インテリ」(der Intellektuelle) という語はあまりにも術語的で、従つて、とかく、批判的な色彩を帯び勝ちになるという點である。好い意味での「知識人」という場合には、der Gebildete (教養人) または ein Mann von Bildung (教養ある人士) が最も普通に用いられるドイツ語である。

## 2. Einfach wie es ist.

次にあげる文章は、ひよつとすると、まるで狐に鼻をつままれたような気がするかも知れません。コトホド左様に簡単すぎてむづかしいのです。（たとえ譯とくらべてみても、急にはわかりますまい）

Bedeutendes gibt sich einfach, einfach wie es ist.

有意義な事柄に限つて單純な形を取つてあらわれる。けだしそれ  
自體が單純なものだからである。

此の稿の研究題目は einfach wie es ist という形式です。英語でもこれは simple as it is で、よく用いられる形式です。

しかし、本問題に入る前に、此の金言をよく理解しておきましょう。むづかしさから云うと正に高級程度かもしれませんが、こうした短かい文章になると高級初級の差別はなくなつて、熟讀味到すれば初級者といえども一足飛びに高級へ飛び込めます。

### Bedeutendes

まず Bedeutendes ですが、これは bedeuten (意味する) と関係があるからと云つて、「意味」という意味にこだわつてはいけません。「意義あるもの」ならやや近い。「有意義なる事柄」ならなお結構、けれども學者や思想家が Bedeutendes という場合には、ごく端的に云つて、要するに「えらいこと」です。藝術家が相當値打ちのある仕事をやつてのければ、批評家は Er hat Bedeutendes geschaffen といつて褒めます。大し

た業績を挙げなければ Er hat nichts Bedeutendes geleistet とか Er hat noch nichts von Bedeutung vollbracht などと云います。

**gibt sich einfach**

次に gibt sich という慣用句です。『自分を與える』  
というと、此の慣用句の具体的な用法に慣れない人には、此の場合勝手に捏造された生硬な概念的な云い廻しのように見えるかも知れませんが、そうではなく、非常に適切な好い慣用句なのです。即ち sich so und so geben (『自分を斯く斯く與える』)という風に、形容詞と一緒に用いると、sich so und so zeigen (『斯く斯くの姿をとつて現れる』、『斯く斯くの様子を示す』)ということになるのです。人間に關して用いるのが元來の用法ですが、たとえば Er gibt sich beleidigt (かれは感情を害したようなふりをする) とか Er gibt sich nur so (かれはただそんな振りをするだけの話だ) とか Er gibt sich so, wie er ist (かれは地金を出す) とか云つたように、とにかく『自分というものを人に見せる』その見せ方を sich geben というのです。つまり「そぶり」、「振舞い」、「たたずまい」を表現する動詞です。sich geben とほとんど同じものに sich stellen というのもありますが、此の方は sich verstellen (佯り装う、猫を被る)に近く、多少芝居をする時でないとは用いません。即ち Er stellt sich beleidigt; Er stellt sich nur so という場合はそれでよろしいが、自分をありのままに見せる、地金をさらけ出す、という場合は、やはりどうも Er gibt sich so, wie er ist の方が適當で、ここにまた sich geben (自分を見せる) という句の、ちよつと譯しがたい面白ろさと適切さがあるわけです。stellen を用いるならば、hin を付け足すと、此の意味になります: Er stellt sich so hin, wie er ist. 此の場合 hinstellen というのは、「さあどうぞ御らんになつて下さい!」と云つて人の眼の前にドカンと置くことです。

**einfach**

これは、全然飾り氣や衒氣のない、という意味に於ける『單純』もしくは『素朴』です。要するに、極く『何でもない』、『無造作な』、『そつけない』、『淡々たる』、『極くあたりまえな』、『アッサリした』恰好をしていることを einfach (簡単な) というわけです。

**einfach wie es ist**

さあ、これがなかなか einfach じゃない。英語でも全然この通りの構造で, *simple as it is* といえ、ば、時とすると『それは簡單なるがゆえに』(即ち *as it is simple*) の意になり、また時とすると、『それは簡單なりといえども』(即ち *simple though it is* と同意) の意になりますが、ドイツ語もほぼ同じです。ただ、後の方の、『……なりとは云え』の意には、ドイツ語の方は、どちらかと云うと *so einfach es ist* と

いう形の方を多く用いるだけの相違です。(though と so とは發音もちよつと似ているから、それで覚えておいて下さい) 詳しいことは後出。

念のために付け加えますが、此の *einfach wie es ist* の *wie es ist* を分解的に譯して、『それが現在そうである通り簡単に』とか、『それが現在ある通りの簡単さをもつて』などと云うと、如何にも原文に忠實なようで、しかも日本語もどことなく理窟張つてアカデミックにきこえ、阿呆が感心して本當にそうかと思うかも知れませんが、それは飛んでもない誤譯です。そうしたバカデミックな誤譯を感心して讀む人が多いから、いつまでたつても翻譯から靴底を距てて足の裏を搔くような感じがぬけないのです。此の *einfach wie es ist* 式の文の今云つたような誤譯は、現在までにどれだけあるかわかりません。

最後に、*einfach, einfach*……と、コンマをへだてて同一單語が對立している鋭どさに注目しましょう。こういふ風に、同一單語をコンマ一つ距てて鉢合せさせる修辭法は、古典語以來有名な修辭法で、西洋人は學校で必ずラテン語のテキストに *Ovidius* の *Metamorphoses* というのを使用しますから、その影響が昔からあり、この同語對立を非常に好むのです。*Ovidius* は到るところでこれを用いています。そのつもりで、この二つの *einfach* を強く發音してよむと、文の力が意識にせまります。そうすると、*einfach wie es ist* が『なにしろ頗る簡単なものであるから!』という意味で、しかもその表現法が非常に強烈なものであるということも、實感でわかつて来るはずですよ——そうした後に『それが現在そうであるがままの單純さをもつて』などという飛んでもない誤譯を想像してごらん下さい! ケッタクソがわるい、という大阪ことばが如何に切實なことばであるかということもついでにわかるでしょう。『阿呆らしいこと言いなはん!』と云いたくなりますからね。

***einfach wie es ist* は  
*einfach* だけでもよい。**

では愈々此の *einfach wie es ist* の文法的説明をします。文法的には、*wie es ist* という部分は、いわば餘計な飾りみたいなものなので、なんなら無くてもよいのです。その代り、*einfach* だけだと、うしろにつけると間が抜けるから、前に持つて來ます：

*Einfach, gibt Bedeutendes sich auch einfach.*

簡單なるが故に、眞價あるものはまた簡單な姿をとる。

英語の *simple as it is* も、單に *simple* とも云えますし、また *being simple* とも云えます。ドイツ語では *Einfach seiend* ということとは云えません。英語の

*being* (佛の *étant*) や *having* (佛の *ayant*) は、ドイツ語では必ず省略することになつています。また *I cannot understand you, sayonara being the only Japanese word I know* (あなたの仰言することはよくわかりません、なにしろ「サヨナラ」が私の知つている唯一の日本語なんですから) とか、*With price controle, there will be a black market, human nature being what it is* (物價統制をすれば、人間が人間である限り、闇市は絶えないだろう) とか云つたような *being* になると、むし歯を抜くように簡単に取つてしまうわけには行きませんから、ドイツ語では接續詞を用いて正規の副文章にするしかありません: *Ich kann Sie nicht verstehen, da „sayonara“ das einzige japanische Wort ist, das ich kenne. Preiskontrolle bringt immer einen Schwarzmarkt mit sich, solange die menschliche Natur das bleibt, was sie ist.*——なぜかという、*„sayonara“ being the only Japanese word* にも *human nature being what it is* にも、おのおの『主語』というものが含まれています。主語の含まれている *being* の句はドイツ語では不可能なのです。

少し脱線しましたが、然し此の脱線によつて *Einfach wie es ist* という句の文法的正體はややハッキリしたことと思います。

こんどは少し文例を変えて、同じ文法をくりかえして見ましょう:

*Gewohnt an seine Art und Weise wie ich war, faßte ich das Ganze als einen Scherz auf.*

なにしろあの男のやり方には慣れ切つていたので、これは多分何か冗談だろうと解釋した。

*Art und Weise* (兩方とも「様式」という意味) は「やり口」、「やり方」という熟語。*gewohnt an*……は「……に慣れている」。*das Ganze* (總體を) というのは *die Geschichte, die Angelegenheit* で、つまり「此の話を」、「此の件を」という時に用いる語。*auffassen* は、解釋する、です。

この *Gewohnt wie ich war* も、英語でなら *Used as I was* で、*an seine Art und Weise* というのをつけるとすれば *Used as I was to his ways* とでも云うことになるでしょう。——この場合も、前に云つた通り、*wie ich war* や *as I was* は、なんなら取つてしまつて、單に *Gewohnt an seine Art und Weise* (*Used to his ways*) と云つても、やはり「かれのやり口には慣れていた

ので」の意になります。ただ『なにしろ……だつたので』という日本語の『なにしろ』に相當する部分を取り去られたわけですから、多少淋しい感じがするのは

やむを得ません。だからまた、wie ich war という贅句が好んで用いられるわけです。

念のためにもう一つ、こんどはゲーテの小説『親和力』(Die Wahlverwandtschaften)の一文を引用します(第十八章)。

Aufgeregt, durchdrungen von den peinlichsten Gefühlen, wie Eduard war, mußten ihm diese Worte hohl und nichtig vorkommen.

なにしろ興奮して、とても不愉快な気持ちで胸が一杯だつたので、こうした言葉がエドゥアルトにとっては空虚な無意味なものとしか思えなかつたのは當然である。

Aufgeregt (*stirred up; excited*) は「興奮して」、durchdrungen von (*penetrated with; imbued with*) は、骨髓に「徹する」とか骨身に「浸みわたる」とか云う durchdringen の過去分詞で、「徹底的に……の浸みわたつた」状態を指します。peinlich は「心苦しい」、「不愉快な」。hohl は「空虚な」、nichtig は「つまらない」、「取るに足らぬ」、hohl und nichtig で二語一想です。vorkommen は erscheinen と同じで「云々と思われる」。

「……なりとは云え」  
の意にも用いられる。

以上は、いずれも原因あるいは理由を表現する場合、すなわち da……あるいは weil……の副文章に相當する場合のみを挙げたのですが、einfach wie es ist 等の形式は、そのほかになお「認容的な意味」、すなわち『云々ではあるが(然し云々)』、または『たとえ云々なりとは云え(それにも拘らず云々)』の意味にも用いることができます。

Bedeutendes, einfach wie es ist, bleibt manchen unzugänglich.

本當に値打ちのある事柄というものは、ごく何でもないのでいて、しかも多くの人には齒がたたぬとしたものだ。

これは一番最初の文例を一寸變えただけです。unzugänglich (*inaccessible; unapproachable*) は『近づき難い』『寄りつきにくい』で、Zugang (接近路、通路) から來た語。

次に Heinrich v. Kleist の一文を引用してみましょう (Die Verlobung in St. Domingo):

und er wünschte sich, hungrig und durstig wie er gekommen war, wieder in die Waldung zu den Seinigen zurück.

そしてかれは、飢渴に堪えきれずして出掛けては來たものの、また元の

森の中の、かれの家族のいる所へ歸りたくなつた。

die Seinigen 或いは die Seinen というと、自分の家族の者、自分の身内、味方、一族等を指します。sich zurückwünschen (または -verlangen, -sehnen) は、歸りたくなる、歸心を催すの意。

こんどは、おなじような英語の例 (*Reader's Digest* より):

*Helpful as they often are, cats cannot be bossed. When a cat makes up its mind what it wants it goes straight at it.*

猫という奴は、役に立つことも度々あるが、しかし頭使するわけには行かない。猫はいつたん斯うと思つたら何が何でも思つた方へ一路直進してしまう。

boss というのは要するに「ボス」すること、すなわち指令で動かすことです。米語のボスは、われわれの云う「ボス」とは大いにちがつて、上官や上役や堂々たる指導者でも親しく云う時には boss と云います。

so einfach es ist  
「たとえ簡単なりとは云え」

斯うした「たとえ……なりとは云え」、「……とは云うものの」という場合のためには, einfach wie es ist 以外に so einfach es ist

という形式が多く用いられます。英語の方もその通りで simple as it is 以外に、特に simple though it is という形式があります。

たとえば、よく用いる句に So fremd es klingt (ちよつと妙には聞こえるが、こう云うと變だが) とか So paradox es klingen mag (こういふと奇論じみて聞こえるかも知れないが) とか So jung er war (年こそ若けれ) とか So arm ich bin (貧乏はしているが) とかいうのが澤山あります。こんなのはすべて So の方の形式が主で、wie の方は普通用いません。英語は Strange as it may sound や Incredible as it may sound などと、as の方も多く用いるようで、必ず though でなければならぬというほどではないようです。こといらが兩語の必ずしも平行しないところです。

Goethe の Götz (第五幕) を引用します:

Er ist unschuldig, so strafbar er scheint.

咎あるごとく見ゆれども、罪なき身とぞ覺え候。

次は Faust (II. 1.) より:

So sehr mich's wundert, muß ich's gelten lassen.

不思議な事とは思えども、そう云う譯なら已むを得ぬ。

Es wundert mich は『不思議だ』という非人称句。etwas gelten lassen (或事を通用せしめる) は、『まあ澁々認めておく』こと。

So wie es ist  
という形式

...wie... の形式には、wie の前に何か形容詞または副詞のようなものが要りますが、時には何等そうしたものを無いで、単に so だけで間に合わせる場合があります。

たとえば：

So wie die meisten Menschen sind, das Einfachste kommt ihnen unbegreiflich vor.

大抵の人間はそうしたもののだが、最も簡単なことが彼等には不可解に思われる。

『そうしたもの』とはどうしたものか、それは別に云わない。だから形容詞の代りに So が置いてあるわけです。

### 3. Nicht wie と wie nicht

颱風は氣象通報で云つたように本土には上陸しなかつた。

これは、どなたもすぐお気づきでしょうが、なんだかわけのわからない變な日本語です。というのは即ち、氣象通報が中つたのか中らなかつたのか、どつちかわけがわからない。中つたのなら「氣象通報で云つたように、颱風ははたして本土に上陸しなかつた」とでも云うべきであり、中らなかつたら「氣象通報では本土に上陸すると云つたが、上陸しなかつた」とでも云つて貰わないと、われわれの様な頭の悪い人間には呑みこめません。

こうした、書いた當人にだけはヨクわかつていて、讀まされる相手には何の事やらわけのわからない文章のことをドイツ人は Sprachdummheit と申します。では。唯今の場合の Sprachdummheit の禍根は何處にあるかと申しますと、それは『氣象通報で云つたように』と云う、此の『ごとく』とか『様に』とか『通り』とか云う比較の言葉に責任の一部があり、それと同時に、『上陸しなかつた』という否定の言葉にも責任の他半があるのです。『比較と否定』という結びつきが、こうしたアイマイを惹き起すのです。

大抵の場合は、常識で考えれば判断のできることが多いので、人はあまり此の現象に注目しないようです。たとえば『アインシュタイン教授は、宇宙は世人が今まで考えていたように無限大ではないと説く』などと云いますが、こんな場合には、『世人が今まで考えていたように』とは、無限大と考えていたのか、それと

も無限大でないと考えていたのか、などと云う疑問は生じません。また『かれは、約束しておいたように、三時には来なかつた』といったような場合も、多少ナイマイではありますが、マア多分「違約」した方の意味だろう云うことは常識でわかります。というのは、まさか「おれは三時に来ない」などと云う否定的な約束をするという事はチョットおかしいからです。——けれども、そういう便利な場合ばかりではない、現に氣象通報と云うやつは、必ず中ると常識で決まっているわけでもなければ、必ず中らないことに決まっているわけでもありませんから、意味と事柄の方から考えて否定か肯定か判断しろと云うのは、ずいぶん無理な話になつて來ます。

日本語の方の問題は、まあ國語學者に任せておいて、さてこんどはドイツ語の文法の問題に移りましょう。實はドイツ語でも（その他の語も同じですが）やはり此の『比較して否定する』という場合には、昔から色々と話が喰ひ違つてゴタゴタした歴史を持つているのですが、むづかしい論議の渦中で煉られて來た國語だけあつて、ただいま問題になつたような場合だけは頗る簡単に裁けるように文法上の法則が出來ています。

#### 〔1〕 氣象通報が中つた場合：

Der Taifun war, wie es im Wetterbericht geheißen hatte,  
颱風は た ごときそれが氣象通報に於て言われてい た  
nicht auf den Hauptinseln gelandet.  
なかつ 主要なる島々の上には 上陸し

#### 〔2〕 氣象通報がはずれた場合：

Der Taifun war nicht, wie es im Wetterbericht geheißen  
颱風は た なかつ ごときそれが氣象通報に於て 言われてい  
hatte, auf den Hauptinseln gelandet.  
た 主要なる島々の上には 上陸し

註：（1）geheißen の次の hatte は省くこともできます。むしろこういう hatte は省かれる方が多くなつて行く傾向すらあります。——（2）Taifun, m. は中國語からドイツ語になつたものです。英語では、發音はやはりタイフーンですが、綴は typhoon と、まるでギリシヤ風にむづかしくなつていますが、これは、希臘神話に同名の怪神の名があるので、英人の船員か何かは颱風という中國語を耳にした時に、すぐそれを連想して、兩者を混同したものらしいのです。——（3）本土というドイツ語はありませんが、英では main islands, 獨では Hauptinseln, pl. と云えばよいわけ。

つまり、法則として申しますと、wie……nicht…… ならば『云々する如く、

はたして……ではない』の意になり、それが逆になつて nicht, wie…… となると、『……する如くではない』の意になるというわけです。

さらに、同じ関係の文例をもう一つ獨譯してみましよう：

かれは、その手紙を、私が頼んでおいたように、速達便では送つてよこさなかつた。

これも、どつちにでも取れる文章です。獨逸語では一目瞭然で：

〔1〕「速達で送るな」と頼んだのなら：

Er schickte mir den Brief, wie ich es ihm aufgetragen  
かれは 送り…た 私に その 手紙を 如く 私がそれをかれに 頼んで置い

hatte, nicht mit Eilpost zu.  
た なかつ 速達便をもつては届け

〔2〕「速達で送れ」と頼んだのなら：

Er schickte mir den Brief nicht, wie ich es ihm  
かれは 送り…た 私に その 手紙を なかつ 如く 私がそれをかれに

aufgetragen hatte, mit Eilpost zu.  
頼んで置い た 速達便をもつて 届け

註：(1) zuschicken：送り届ける。zusenden, zustellen ともいう。——(2) auftragen：頼む、依頼する。

さらにもう一つ、ごく簡単な例——これで決定的に納得が行くはずです：

僕は君が云う様に凡て満足しているわけではない。

〔1〕君の云うのが尤もだ、という時は：

Ich bin, wie du sagst, nicht mit allem zufrieden.  
私は い ごとく 君が 云う ない を以て すべて 満足しては

〔2〕君の云うのはちがつている、という時は：

Ich bin nicht, wie du sagst, mit allem zufrieden.  
私は い ない ごとく 君が 云う を以て 凡て 満足しては

**斯くの如き語順の生ずる理由：  
nicht の位置に関する一般法則**

以上は、理窟をぬきにして、型として覚えていただくのが一番実用的です。以下の理窟は、ほんの参考のためです。

この語順を理解せんがためには、そもそも nicht なる語の位置に関する一般法則を思い出す必要があります。nicht という語は、多少の例外的な場合を除いて、多くの場合は、これを特に打ち消そうと云う其の語の直前に置かれるのが自然なのです。たとえば Er kommt nicht heute といえ、nicht heute という語順そのものによつて、當然、たとえば sondern morgen といつたようなことを聯想させます。morgen とは限りませんが、とにかく heute と對立するような『時期の規定』を考えさせます。だから nicht heute は、『今日ではない』ということで、nicht は特に heute だけを打ち消すことになるのです。

そこで、唯今のべた nicht……, sondern…… という考え方を、たとえば最後の文例『僕は君が云うように凡てに満足しているわけではない』にあてはめて考えて見ましょう。『君の云うのはもつともだ』という場合には、nicht によつて打ち消されるのは『凡てに満足している』という mit allem zufrieden だけでよいわけですから、nicht mit allem zufrieden という句を用います：

[型 A] Ich bin, wie du sagst, nicht mit allem zufrieden.

此の場合は最後の nicht mit allem zufrieden だけが語順の上で型がきまつているので、それより前の方は、順はどうでもよいわけですから、なんなら Ich bin と wie du sagst. とが逆になつてもよいのです：

[型 B] Wie du sagst, bin ich nicht mit allem zufrieden.

ただ、wie du sagst を一番最後に置くことだけは不可ません。そうすると、日本語の原文とほとんど同じ程度のアイマイさが生じます：

[型 C] Ich bin nicht mit allem zufrieden, wie du sagst. (兩意に受け取れる！)

なぜ兩意が生ずるかという、nicht という語は打ち消される句の前に置かれるのが自然の順ですから、上の文では、nicht が mit allem zufrieden という句だけを打ち消しているようにも考えられ、また mit allem zufrieden, wie du sagst 全部を打ち消しているようにも聞こえるからです。どつちがドイツ語の感じとして自然かという、むしろ後者の方です。『おまえの所謂 mit allem

zufrieden ではないぞ』という風にひびくことの方が多いのです。

しかし、いずれにしても、此の最後の語順は、とにかくアイマイである事には變りはありませんから、そのアイマイを避けるために、『おまえの所謂 mit allem zufrieden ではない』という場合のためには、ちゃんと既述の nicht wie …… という語順があるのです：

[型 D] Ich bin nicht, wie du sagst, mit allem zufrieden.

こうすれば、nicht という語は、mit allem zufrieden と結びつくと同時にまた wie du sagst と密接に結びつきますから、『凡てに満足するわけではない』という表現になると同時に、『おまえの言う如くではない』ということも序でにハッキリと表現したことになるのです。

nicht, wie du sagst, mit allem zufrieden という此の句をよく味わつてごらんなさい。wie du sagst は途中にちよつと挿入であるだけの話で、nicht が句全體とシッカリ結びついていることが誰にも感ぜられるはずです。

### 型 C に就て

ですから、上掲の A, B, C, D の四つの型を考えますと、wie…… の部が肯定される場合には A または B の型を用いるべきであり、wie…… の部が否定される時には、なるべく C 型をさせて、D 型を用いたがよいという事になります。また、ドイツ人の書いたものを統計的にしらべて見ますと、少くとも行文の巧みな人の文は凡てそうなつていゝるのを見受けます。

しかし、なる可く避けた方が好いという型 C に就て申すとすれば、これは實際的には多く出て來ます。そして大抵の場合型 D と同意、即ち wie…… の部も否定されてしまう意局のことが多いということが云えます。特に、意味の上から考えて、どういふ言い方だつて結局わかると云つたような際には、D 型の代りに C 型を用いるのは極く普通の現象になつています。たとえば、『日本ではヨーロッパのように右側を通行しない』などと云つたようなとき、或いは『タイフーンは英人が思つてゐるようにギリシャの怪神テュフーンではない』といつたような時には、すでに常識の見地から、日本はヨーロッパの逆らしい、英人はタイフーンが中國語であることを知らないらしい、ということがほぼ推察されますから、必ずしも規定通りの D 型でもつて：

1. In Japan hält man nicht, wie in Europa, rechts.
2. Taifun ist nicht, wie die Engländer anzunehmen scheinen, der

## griechische Titan Typhon.

という必要はないので(もちろん、此の型に越したことはないのですが)、なんなら C 型でもつて:

1. In Japan hält man nicht rechts, wie in Europa.
2. Taifun ist nicht der griechische Titan Typhon, wie die Engländer anzunehmen scheinen.

と云つてもよいのです。(第二の文例の方は、本當を云うと Taifun ist nicht identisch mit dem griechischen Titan Typhon, wie 云々と云つた方が好いドイツ語になります)

しかし、wie…… が否定される場合に、型 A や 型 B を用いることは絶対に禁物です。即ち、たとえば Wie in Europa, hält man in Japan nicht rechts は絶対にいけません。

備考: もつとも、此の法則を犯している有名な例はあります。Victor Hugo といえど佛の大文豪ですが、その *Hernani* という有名な芝居の第四幕の幕になる瞬間、Gomez 老人が *Mais, comme lui, je n'ai point pardonné!* (だが、彼奴のように、俺まで恨を忘れたと思つたら大きな間違いだぞ!) という氣味のわるい傍白をするところがあります。ドイツ語に直譯すると *Doch, wie er, ich habe nicht vergeben!* ですが、これはせめて *Mais je n'ai point pardonné comme lui!* (*Doch hab' ich nicht, wie er, vergeben!*) とでもしないと、*comme lui* が「彼も恕さない」の意になつて拙いのですが、フランス文は詩文になつていたので、*je n'ai point pardonné* という六綴のまとまつた句はどうしてもおしまいに來ないといけなないので、詩文で許されている順序の轉倒を利用して *comme lui* を破格的に前にもつてきたというわけです。破格は破格で、破格はまた問題が別になりますから、此の點は特に含んでいただく必要があります。

それから、マアあんまり佛語の方に深入りすると迷惑する人もあらうとは思いますが、嚴密を期するために附言すると、*Mais, comme lui* 云々が、「彼も恕さぬが俺も恕さぬ」という風に誤解される心配は、英獨とはちがつて、佛語にはあまりないのです。というのは、もしそうならば佛語では大抵 *non plus* (獨の *auch* に當る) を用います。ことに *Mais, moi non plus, je n'ai point pardonné* という風に、同じ綴數で、詩形に影響なく表現できるわけですから、その意味ではないということは充分わかるのです。況んや見物としては、相手のカルロス五世が恕したのを見て來たあとのことゆゑ、意味の取りちがひは絶対にあり得ないのです。

なにをどう云ふか

映画 18

ちかごろのインテリさんは、大抵『映画』を見に行くようだ。わたしなどは、ちよつと半世紀も時代おくれの方で、『活動』を見に行くならまだしも、うつかりすると『活動寫眞』を見に行くことがある。

kein 等の場合には D 型は用いられぬ故、C 型を用いるより仕方がない。

以上は nicht のみについて述べたのですが、その他

ドイツ語でも、此の *Kinematographie* [キネマト・グラフィー] (活動寫眞) という語は、實はこれがいちばん最初用いられた學術用語で、由緒正しい本格的な名稱であるにかかわらず、今ではもう極くたまにしか用いられない。日常用語としては *Kino*, n. [キノー] と省略されてしまつてゐる。つまり *das Kino* である。(自動車の本名 *das Automobil* [アオトモビル] を略して通常 *das Auto* [アオート] というがごとし)

英佛と比べるとおもしろい。英佛は *Kinematograph* のところを *Kinema* まで探つて「シネマ」(佛語: *le cinéma* [ル・スイネマ], 英語: *the cinema* [ザ・スイニマ]) という語を作つてゐるが、ドイツ語はもつと亂暴に鉄を入れてしまつたわけ。

ただし誤解のないように早速ことわつておく必要があるが、獨の *das Kino* は、英の *cinema* 佛の *cinéma* と同様、最初は『映画』の意に用いられたが、すぐ『活動館』の意に轉じてしまつて、ちかごろは *das Kino* といへば、むしろ映画館、すなわち *das Kinotheater* [キノー・テアートル], または *Lichtspieltheater* [リヒトシュピール・テアートル] の意に用いられることの方が多くなつてきた (-*theater* の代りに -*haus* ともいう)

それはなぜかという、『映画』という意味では、すぐに英語の *film* から造つた *der Film* というのが一般的になつてきたからである。殊に一作品を指す場合には、*Kino* と云つてはならない:『その映画は今どこでやつていますか?』(Wo läuft der Film in diesem Augenblick? — Wo wird der Film jetzt gegeben?)

映画劇 (Spiel film) の場合には *das Lichtspiel* という上品な語も使える。なお、*der Film* は、一般的に *der Bildstreifen* とも云う。この方は英語の *film* の元意通り、フィルムの一帯そのものを指す。*Streifen* というのはテープや帯のよになつた長い條のこと。

留意すべき重要な區別:

- [A] Sie geht ins Kino.  
(彼女は映画館へ行く)
- [B] Sie geht zum Film.  
(彼女は映画俳優になる)

わけではありません、なんなら『私は君の思つてゐるような詩人ではない』を *Ich bin kein — wie du glaubst — Dichter* と云うことも出来るには出来ます。しかしそれは單に出来るという程度で、普通のなだらかな文とは云えません。そこで *kein* などの場合だけは、例外として、D 型の代りに C 型を用いるという事になつて來ます。即ち、

*nie* でも *niemand* でも *nirgends* でもすべて同じです。たとえば『私はあなたが主張なさる通り六時に起きることは決してありません』ならば、*Ich stehe, wie Sie behaupten, nie um 6 Uhr auf* と云へば「あなたも私が決して六時に起きないと主張なさる」という意味が暗に含まれたことになり、それに反して *Ich stehe nie, wie Sie behaupten, um 6 Uhr auf* と云へば「あなたは私が六時に起きると仰有るが」の意になります。

ところで、ただ一つ困るのは、*kein* とか *keinerlei* とか云つたような、その次に來る名詞と密接に結びつく形容詞的な否定詞です。こいつは、たとえば *kein Dichter* を二つに分けて *kein, wie……* とするのは、普通ではできないから、D 型は一寸用いにくくなります。絶対に用いないという

Ich bin kein Dichter wie du glaubst.

私は君の思っているように詩人ではない。

では、「君も僕を詩人だとは思っていないが、それがまたほんとうで、僕ははたして詩人ではないのだ」という時にはどう云つて區別するか？ そんな時には、そもそも glauben を用いるのがおかしいので、wie du weißt または wie du es weißt と云えばよろしい。wie du weißt や wie man weiß は決して否定されたり肯定されたりしない、必ず「御存じの通りが正しいのだ」という意味になる句であることは日本語の「御存じの通り」、「衆知の如く」などと同じで、これは今回の文法の中には含まれていません。今回の文法は、どちらとも決定できない場合の區別法のみに関するものとお心得下さい。英語には觸れませんでしたが、英語も大體同じです。

#### 4. Nicht wahr をめぐる諸種の問題

Geldmädchen, ich hab dich lieb.

弗箱入りのお嬢さん、僕はあなたを愛します。

これはドイツ人の誰もが知っているくだらない語呂洒落で、Gelt, Mädchen? (ねえ、お嬢さん?) というのが、發音の上では Geldmädchen と全然同じになるから、そこを狙つたものです。Geldmädchen というのは「資産附きの娘」、すなわち持參金と抱き合せになつてゐる娘さんを云います。それは「お金持の伯父さん」のことを Geldonkel というので、それになぞらえて作つた言葉です。新語というものは、すべて今までにあつたものに「なぞらえて」(angleichen して) 造るとしたもので、たとえば上掲の譯文中の「弗箱入りのお嬢さん」というのも、箱入り娘になぞらえたものだからこそ許されるので、そうでなく突然こんな妙な事を云うとしたら、それは日本語の暴走になつてしまふでしょう。いや、たとえ三鷹の暴走電車といえども、或る點までは普通の軌道を走つたので、また軌道を走つたればこそ、あれだけの無軌道振りを發揮したのです。その意味において此の Geldmädchen という新語の面白ろ味を、ドイツ人と同じ氣持になつてお味わいねがいます。

そうしておいて、その上さらに Gelt, Mädchen? (ねえ、お嬢さん? そうでしょう?) という句を別に考えて、そして最後に此の二つを頭の中で結びつけて見て初めて此の語呂洒落の面白ろさがわかるというのだから、語呂洒落も外國語となると、なかなか樂じやありませんな。

ところで、これからが本問題ですが、gelt? というのは、いつたい何でしょう? これは我が國の「ねえ君?」あるいは、もつと地方色の濃厚な、多少「ひなびた」味のする「なア?」とか「喃?」とか「そうじやろう?」とかいう奴に相當する間投詞です。地方色が濃厚だからと云つて、普通は用いないと思つてはいけません。ドイツ語という奴は、此の點、英佛や日本語とは少し「標準語」というものに對する感じが違つていて、少し奇論の様だが、いわゆる標準語は好い標準語ではない、此の gelt? の程度の野趣を加味した標準語が本當のドイツ語である、といった様な感じがあるのです。だから、たとえどんな上品な紳士でも、Gelt, das schmeckt gut? (どうです、おいしいでしょう?) なんてことは、しよつちゆう言います。

nicht wahr? 佛語  
ニヒト ヴァール

の n'est-ce-pas?  
ネ ス パ

標準語でならば此の gelt? は、皆さん御存じの nicht wahr? です。會話の際には、獨斷的な口調になつては相手に失禮だと云う意識が動く結果、殊にドイツ語に未熟な外國人は事毎に此の nicht

wahr? を振り廻わすことになり勝ちです。Schönes Wetter heute, nicht wahr? (今日は好いお天気ですね) Hier haben Sie viel Sonne, nicht wahr? (こちらはよく日がさすでしょう?) Der Schnee ist dieses Jahr ausgeblieben, nicht wahr? (今年はとうとう雪が降りませんでしたね) Es ist mondhell draußen, nicht wahr? (表は好い月夜でしょうね)……おしまいにはマニーになつて、nicht wahr を附けないと唇の闕が高く一語も表へ出られなくなる傾向すらあります(佛語の會話をする人には現に「ネスパ?」をつけないでは喋舌れない人が相當たくさんいます)。英語には此のネスパに相當する便利なものがなく、その時その時の具合によつて do you? になつたり did you になつたり didn't she? になつたり are there? になつたり shouldn't it? になつたり、要するに改めて作文しなくちやならないという厄介があるので、火急の場合にそんな面倒な苦勞をして失敗するよりは苦勞をしないで成功する方が利口だということで、大抵の人はマア止しておく。ところが獨の nicht wahr? と佛の n'est-ce-pas とは、加工せず其のまま使えるものだから、いや振り廻わすの振り廻わさないの! 在京の獨佛人はみんな悲鳴を擧げているようです。

ただ一つ、發音上の注意だけは心得ておく必要があります。nicht wahr? は、正しく發音すれば nɪçt'va:r (ニヒトヴァール) の筈ですが、これは軽く發音するものですから、最後の r はひびかないのが普通です。また、子音と子音との間に挟まつた t も、此の前、例の Abweichung について申し上げた b の問題と同

じで、ごく軽く、或いは大抵の場合全然發音しません。つまり *niqva:* [ニヒヴァー] といったような程度です。——それから、*nicht wahr?* と書くと、何だか尻上りにアクセントをつけて、日本語の「ね?」と同じように、最後を上げて發音しなくちやならないように見えますが、必ずしもそうではなく、むしろ全然尻を上げないで發音することの方が多いと云うことも知つておく必要があります。

**單に *nicht?*  
とも云う。**

*nicht wahr?* の代りに單に *nicht?* ということがあります。此の方は、アクセントも必ず尻上りになり、ちょうど『そうでしょう? ね?』という『ね?』に、意味も發音もそっくりです。*Sie heißen doch Kellermann, nicht?* (あなたのお名前はケッラーマンでしたね?)

***ja?* とも云う。**

*nicht?* と同じような發音法で *ja?* ということがあります。これは、人にもものを頼んだり、事を決めたり、命じたり、要求したりする時にも用います。たとえば表で遊んでいる子供に向つて *Komm gleich zum Essen herein, ja?* (御飯だからはやくおいで、いいかい?) などと云う、つまり「好いかい?」という念を押すためのことばに當ります。荒つぽく云えば *Verstanden?* (わかつたかい?) という奴と同じ意味に使う場合も多いわけです。(以下はすこし理窟つぽくなる!)

**『決定疑問文』(*Entscheidungsfrage*  
ということについて**

話が少し根本的になりすぎるかも知れませんが、*deutsch sein, heißt gründlich sein* (ドイツ的であるとは、つまり根本的であることだ) と申しまして、現に戦争に負けるのすら根本的にトコトンまで負けないと負けた氣がしないというのがドイツ人の悪い癖ですが、——少し根本的な話をするのを許して頂けるならば、およそ「疑問文」(*Fragesätze*) と一口に云いますが、これには二つの種類があります。„*Was*“ *ist deutsch?* (『何』がドイツ的か?) „*Wo*“ *steckt es?* (『何處に』しまつてあるか?) „*Wann*“ *ist es Ihnen genehm?* (『何時なら』御都合が宜しうございますか?) 等、その他 *wer, wie, warum wozu* 等の、いわゆる疑問詞というやつを先頭に立てた疑問文は、

これを『規定疑問』(*Bestimmungsfrage*) と呼びます。疑問になる點が、*was, wo, wer* 等によつて、はつきりとした一點に規定されていて、問われた方の者は *Das* (これが) とか、*Hier im Kasten* (この箱の中に) とか、*Morgen früh* (明朝) とか云つたように、相手が規定して來た一點にスッポリとはまるような句を用いて答えることになります。ところが、そういう風には行かない疑問文の型がある。たとえば *Sind Sie Kommunist?* (あなたは共產黨員ですか?) *Wird es*

schneien? (雪が降るでしょうか?) Kannst du maschinenschreiben? (君はタイプライタが打てるか?) 等になると, ja もしくは nein を以て答えます。此の種の疑問文を, 前述の規定疑問と區別して『決定疑問』(Entscheidungsfrage) と呼びます。

今日のお話は, つまり, 此の決定疑問にのみ關するお話になるのですが, 此の決定疑問がまた其の色彩の如何によつて:

[A] 本當にどちらか解らなくて問う疑問文 (眞の疑問文)。

Liebst du sie? (おまえは彼女が好きか?)

[B] 肯定の答を期待しつつ問う疑問文。

Du liebst sie doch wohl?

(おまえだつてあの女は好きだろう?)

Du liebst sie, nicht wahr?

(おまえは彼女を愛しているのだろうな?)

[C] 否定の答を期待しつつ問う疑問文。

Du liebst sie doch wohl nicht?

(おまえ, まさかあの女が好きなんじゃないだろうな?)

の三種類にわかれます。このうち, [A] はごくあたりまえで, Liebst du sie? とか Liebst du sie oder liebst du sie nicht? とか Liebst du sie oder nicht? とか云つて, 二つに一つの返事を迫るわけですから, これが本當の「決定疑問文」即ちイエスカノーかの決定を促す疑問文です。この方は別に語學上大した問題はありますまい。注目を要するのは [B] と [C] とです。

備考: ラテン語では此の點に關して誰もが一通り通過する文法上の規則があります。Du liebst sie は *Eam amas* (*eam* は「彼女を」。*amas* は *du liebst* で, *du* に相當する *tu* という代名詞は大抵不要です) ですが, 眞の疑問文に於ては, 即ち答がイエスカノーか不定なものとして問う場合には, どの語かに *-ne* という綴を附して文頭に置きます:

*Eamne amas?*

*Amasne eam?*

次に, 肯定の答を當然のものとして期待する際, 即ち *Du liebst sie doch wohl?* (おまえは無論彼女を愛するだろうね?) の場合には, *Nonne* という (これがドイツ語の *doch*, または *doch wohl* にあたる) 語を頭におきます:

*Nonne eam amas?*

最後に、否定の返事を要求する間には、*Num* という語を先頭におきます：

*Num eam amas?*

けれども、考察の便宜上から云うと、上述の [A] と [B] と [C] との三型は、むしろ二つの型に分けて考えた方が便利です：即ち (1) 然りとも否とも決しない中立的態度をもつて問う場合 ([A]) と、それから (2) 問う者自身の態度が然り或いは否のいずれかに偏っていて、相手からも同趣旨の答を期待しつつ問う場合 ([B] 及び [C])、との二型です。今日の *nicht wahr* 等々のお話は、つまり、此のうちの第二型についてのお話です。

こんな野暮な詮索は、一般の方にはむしろ迷惑千萬なものかも知れませんが、讀者諸賢の中には、専門の語學者の方も非常に多いらしいので、人に外國語を教える際に常に意識していなければならない *methodologischen Kram* を一寸繰干しただけですから何とぞ悪しからず。

**相手に自分の意見を押しつける場合の疑問文の構造**

此の種の疑問文の特徴は、英語やドイツ語の會話に用いられる形式を多少たりとも御存じの方には改めて申し上げるには及びますが、

「疑問文でない形を取る疑問文」と云えばすぐわかりましょう。「わかりますね?」と云つて念を押す場合には *Sie verstehen?* で、もし *Verstehen Sie?* と云えばそれは「わかりますか?」になります。*Heute ist Montag?* あるいは *Es ist heute Montag?* と云つてはじめて「今日はたしか月曜でしたね?」ということになるので、もし *Ist heute Montag?* と云えば「今日は月曜ですか?」ということになります。

念の爲めに断わつておきますが、此處で問題にしているのは本當の「疑問文」すなわち「質疑文」であつて、「感嘆文」ではありませんから混同しないようにして頂きます。感嘆文にあつては、形は疑問文の形となり、肯定の答を期待するときには否定文を用い (たとえば *Ist das nicht empörend?* 「實にけしからんじやありませんか!」)、否定の答を期待する時には肯定文を用います (*Hat er mir je einen Gefallen getan?* 「あいつが一度だつて僕に親切を盡したことがあるか!」)、これらは「反語」と云つて只今述べている質疑文章とは全然別型に属します。

備考：厳密ならんがために、更にもう一つの例外にも言及しておきます。疑問文でない形式を取ると申しましたが、非常に鋭い口調で相手をきめつけるような時には、わざと疑問文形式 (即ち文頭の定形倒置) を用いることがあります、たとえば「どうだ、わかつたか?」 (*Nun, ist dir das klar?* あるいは *Ist dir das helle?*) 「どうだ、面白いだろう?」 (*Ist das eine Lust?*)。これは、*Nun, ist dir das klar oder nicht?* (どうだ、わかつたかわからんのか?)

と同じことで、わざと中立の態度をとつて、相手に二つに一つの返事を強要せんがために前述の [A] の形式を取るわけです。だから、この形式で人に質問するということは、尋常の關係では一寸考えられないことで、此の形式を用いる時には必ず怒っているか皮肉な態度を取っているか、あるいは唯今の *Ist das klar?* のように「どうだ、云々じゃないか!」という感嘆的色彩が加わる際です。英語も同じですから、英語の例を一つ: *It would be a bargain most profitable to management. Management then could and should say to labor: We promote full employment. You promote full workshop efficiency. Is it a deal?* (そうすれば経営者側にとつても話が非常に有利になるだろう。経営者側は、そうなれば、労働者側に向つて「われわれの側では失業の皆無を期する、諸君の方では工場能率を百パーセントに増進してくれるというわけだ。どうだ、よくわかつた話だろう?」と云うことができるわけで、また當然そう云つて然るべきところである)——この *Is it a deal?* は、「どうだ、好い取引か?」という形ではありますが、實は *or not?* というのを後につけるのと同じで、ドイツ語で云つてもこれはやはり *Ist das ein Geschäft?* あるいは *Ist das ein Gewinn?* です。——また、人をどなりつける時にも此の形式を用います。たとえば、「一家の主人に向つて何という口を利くか!」といつて家人をたしなめたりする時の常套文句は、ドイツ語でも *Bin ich der Herr des Hauses?* (おれは此の家の主人か?), 英語でも *Am I master of the house?* です。わかり切つていることを、わざとわからない振りをして訊くという所に、此の變態的疑問文の特徴があります。

相手に自分の意見を押し  
つける場合の疑問文と、  
その場合の助詞:  
wohl; ja wohl,  
doch, doch wohl.

構造は以上の如くですが、さて其の際に挿入される助詞について知つておく必要があります。「あなたも屹度タバコをお吸いになるでしようね?」と云つたような時には、この「屹度」「おそらく」に相當する助辭は wohl か ja wohl かです: *Sie sind wohl auch ein Raucher?*

または *Sie rauchen ja wohl auch?*

もつと強く、「だつてあなたもタバコをお吸いになるでしよう?」となると、こんどは doch または doch wohl となります: *Sie rauchen doch auch?* または *Sie sind doch wohl auch ein Raucher?*

殊に此の doch はドイツ語特有の助辭ですから、此の際の問題と關係してよく覚えて頂きます。*Sie rauchen?* というと、「あなたタバコをめしあがる?」といつたところですが、*Sie rauchen doch?* というと、「もちろんタバコをめしあがるでしよう?」と云つたように、意見の押しつけ方が強くなります。doch の代りに ja doch という形も多く用いられます: *Sie rauchen ja doch?*

備考: 此の doch は正に前述のラテン語の *nonne* です。*Sie rauchen doch?* はラテン語で云えば *Nonne fumas?* となります。もちろん古代ローマ人はまだタバコというやつは知らなかつたのですが、ラテン語はヨーロッパでは、いわば 에스ペラントのような役目を果たしているので、カトリックの坊さんなどは、色んな國籍の人がラテン語を使つてお互いに意を達している位です。タバコを吸うことは、佛語でも *fumer*, 伊語でも *fumare*, 西班牙語でも

*fumar*, 従つてラテン語でも *fumare* を使うのが自然というわけです。

まさか……? は *doch*  
*nicht*; *doch wohl*  
*nicht*? で表現する。

次に、否定の答を想定して答う場合は、ラテン語には特に *num* という文頭辭がありますが、ドイツ語では單に上述の *doch* または *doch wohl* に *nicht* または其の他の否定詞を加えるだけです。

たとえば、「冗談じゃない、まさか本氣じやあるまいね?」と云つたような時には *Mein Gott, das kann doch nicht dein Ernst sein?* 「あいつまさか自殺したのじやないだろうな?」は *Er wird sich doch nicht das Leben genommen haben?* 「まさかそんな意味じやないだろう?」は *So ist es doch wohl nicht gemeint?*

*doch* の代りに *ja* を用いることも度々あります。「まさかそんな意味じやなかろう?」は *So ist es ja wohl nicht gemeint?* と云つても好いのです。

英語には、此の *ja* や *doch* に該當する微妙な助辭がないので、いろんな他の方法を用います。たとえば「君はまさか彼女においてきぼりを喰わせようというのじやあるまいね?」というのを *You surely would not desert her?* [*Thackeray, Vanity Fair*, 32.] などと云つてある。ドイツ語なら *Du willst sie doch nicht im Stich lassen?* というところです。*doch* の代りに *surely* にあたる *gewiß*, *sicherlich* を使うこともできます。

英語の *nicht wahr*?

英語の事を考えると話が當然また例の *nicht wahr* の問題に逆戻りして、それで此の研究もどうやら小じんまりとまとまるわけです。

英語には *doch* という便利なものはないが、その代りに、例の *is he?* とか *isn't he?* とか *do you?* とか *don't you?* とか云つた句を文章の尻につける習慣があつて、これがつまり *doch* あるいは *nicht wahr?* の役目を果たしています。

ただ、この形式は、肯定形 (*is he? do you?* など) を用いるか否定形 (*isn't*

*he? don't you?* など) を用いるかという區別に一寸注意を要します。大雑把に云えば、肯定文の後では否定形を用い、否定文の後では肯定形を用いると簡単に

なにをどう云ふか

好きです -19-

英語には *like* というピッタリした語がある。獨逸語にはない。ある時は *lieben*, ある時は *gern haben*. 「日本人は風呂が好きだ」は *Die Japaner haben das Baden gern* または *Die Japaner baden gern*.

「映画が好きだ」などとなると、Ich gehe gern ins Kino (私は好んで映画館へ行く)——あるいは Ich bin ein großer Kinofreund (僕は大きな映画の友である)ということになる。とにかく Freund という語で『好きだ』を表現するのが欧米各国語の特長である。その他音楽でも書物でも子供でも何でも：Musikfreund, Bücherfreund, Kinderfreund. ただしビールやタバコとなると：Ich bin ein großer Biertrinker: Ich bin ein großer Raucher; Er ist ein leidenschaftlicher Schachspieler (将棋が大好き)等。

leidenschaftlich (熱狂的) となると、いよいよファンの問題になる。「ファン」は Schwärmer で、普通は「癡る」(schwärmen) という動詞を用いる：Ich schwärme für die Zwanzig Türen (僕は二十の扉のファンです)

この für という前置詞をよく覚えること！「特にゲーテが好き」なら：Ich habe eine besondere Vorliebe für Goethe. もし好きで好きでたまらぬ場合には Ich habe eine Schwäche für Goethe という。Schwäche は元來「弱み」、「欠点」で、つまり目がないというやつで：「溺愛」といつてもよからう。英語もこんなときにはすべて for を用いる：liking for ~, affection for ~ など。

殊に Vorliebe という名詞をよく用いる。vor- というのは、爾餘のものを差し置いて、他の凡ゆるものよりも以上に、という意味の vor でもあり、また Vorurteil (先入観) などにあらわれた「先入」の vor でもある。だから Ich habe eine Vorliebe für das Grün (私は特に緑色ですきです) といえ、他の色よりも特に緑を好むということで、これが普通云う「好き」の最も多い場合である。英語もこれと平行している、Vorliebe für は、predilection for で、pre- がすなわち Vor- である。

対象物の方を主にしているときには、Lieblings- あるいは Leib- というをつける：Lieblingsdichter (好きな詩人), Lieblingsthema (お十八番の話題), Leibgericht (好きな料理), Leibfarbe (好きな色)。——bevorzugt という形容詞もドイツ人の耳には親しい。

『好きになる』のは liebgewinnen または schätzen lernen 等。『私はこの歌がすきになつた』Ich habe dieses Liedchen liebgewonnen. 対象の方を主にすると lieb werden: Das Liedchen ist mir lieb geworden.

おぼえておけばよいでしょう。

たとえば「あの人は金持でしょうね?」(Er ist doch sehr reich?) は肯定文ですから He is very rich, isn't he? となりますが、「あの人はそう金持ではないでしょう?」(Er ist doch nicht so reich?) ならば否定文ですから He isn't very rich, is he? となるわけです。

但し、一見此の規則に反するような場合もあります。たとえば Your mother has talked to you about me——has she? [Th.: Vanity Fair 56] という風に。この場合なぜ hasn't she? と云わずにわざわざ has she? といふかといふことは、少し前(小活字の所)の備考のところで云つたことを思い出して頂ければ自然とわかるはずで、これは hasn't she よりも鋭い口調なのです。

## 5. 純形式的誤讀

少しむづかしい文章になると、たとえ一語一語の意味がよくわかり、また語と語の関係が正しく理解されても、全體としての意味がハッキリしないということ

が起つて來ます。そうかと思うと、それとは全然あべこべに、二三わからない單語があるにもかかわらず、また、部分的には、語と語の間の關係がどういう風になつてゐるのかハッキリしないにかかわらず、前後關係から推して、ほぼ斯ういう風な事を云おうとしているのではないかと云うことが、大體推察されるという場合も多いようです。

ごく昔のはなしですが、或る人が次のような文章を、此處に附してある邦譯のように譯しました：

これは正譯なんです。實は出題したのは私で、下線した *aller* をどう云う風に譯するかと思つて、其の點で引っかけようと思つて出したのですが、「萬人の」と譯したから、立派に及第したわけです。——ところが、それからしばらく経つて、その人と話をしている時に、また此の文章のことが話題になりました。すると、豈圖らんや、私はその人が此の *aller* を、私が最初引っかけようとした通り、*Erinnerung* に冠せられた形容詞的用法の *aller* で、語尾の *-er* は勿論女性三格の *-er* 語尾だと思つて居り、しかも此の誤讀にもかかわらず譯語だけは立派に「萬人の」(*aller Leute*, 複數二格!) と適當にゴマ化したのだという事實を發見して、吃驚もしたが、同時に人間の常識という奴は謂わば酔いどれの本性たがわずという奴で、いざとなると割合たしかなものだと思つて感心しました。

此の人のやつた誤讀は、謂わば「純形式的誤讀」です。*in aller Erinnerung* は、*in aller Menschen Erinnerung* あるいは *in der Erinnerung aller* で、*aller* は、複數二格を名詞として用いたものです。これは *aller Augen* (萬人の目、衆目) とか *aller Hoffnuug* (萬人の望み) とかいう結合でしきりに出て來ますから、そういうものとしておかなくてはなりません。

「純形式的誤讀」というやつは、問題が形の上でハッキリしているだけに、いわば仲々御愛嬌なところがあります。ドイツ人自身ですらも時とするとそうした誤讀(または誤聽)をやることもないではありません。次のは、ある新聞に出ていた笑話ですが、どこが落ちか、わかりますか？

Der Lehrling trat seinen Dienst an. „Da bin ich, Herr Chef!“ sagte er. Der alte Lennemann lächelte freundlich: „Nennen Sie mich nicht Chef, junger Mann! Sagen Sie lieber Herr Lennemann zu mir!“ Der Lehrling nickte: „Jawohl, lieber Herr Lennemann!“

問題が純文法形式的誤解ですから、日本語に譯したつて何のことやらわかりませんが、大意を傳えると斯うです。見習生が初めて職場に顔を出した。そして、Chef とあるから、工場長か課長か店主か何かそんなものでしょうが、「工場長、

まいりました!」と云つた。すると Chef は、即ち老レンネマンは、愛想よく笑つて、「工場長なんて云わないで、むしろ (lieber) レンネマンさんと云つてもらいたいね」というと、見習生君畏まつて、「畏りました、親愛なるレンネマン君!」

つまり lieber (むしろ) という副詞を、lieber (親愛なる) と誤聴したわけです。日本語では「親愛なる」というと、そう面白ろくないが、ドイツ語では、lieber という形容詞は、非常になれなれしい仲か、それとも自分よりも眼下の者に向つてしか云わないことばで、そいつを上役に向つて云つたところが御愛嬌なんです。

只今のような誤解は、形式的にあまりにもよくまとまつていて、一箇所を誤解したために他に矛盾がおこるということはありませんが、われわれが純形式的誤讀をやると、その前後に大抵無理が生じて、その無理をなんとかこじつけて譯すということになります:

Das war sogar mit einer der Gründe, der mich davontrieb.

[Schnitzler: *Der einsame Weg*]

それが即ち、わたしを其處から追い出した理由の一つをもつてですらあつた。

さあ大變! こうなるとモウてんで何の事やらわけがわからない! こう云う飛んでもない無茶苦茶な譯文を平氣で綴る人が相當います。

これはつまり mit を普通の前置詞だと思つたために生じた誤讀です。(しかし、それにしても、Gründe の單數 Grund が男性だということを知つていたら、mit einer とは云わないはずだ……という所へ注目が行きそうなものですが、混亂して來ると其處までは考えなくなるのです。考えてもアイマイにしてしまうということもあります)

此の mit は [これ亦] で、Das was mit ein Grund と云えば、「これまた一つの理由であつた」です。従つて正譯は『これ亦私を其の地に居たたまらなくさせた理由の一つと云つても過言ではない』となります。sogar は『……と云うも過言に非ず』という副詞。

只今の例は、一箇所を誤讀すると、そのために其の近所に文法的矛盾が生ずる例でした。これはよく心得ておく可きことで、文法的矛盾が生ずるということは、いわば誤讀の徴候と云つてもいいでしょう。もし mit einer とつづけて讀むとすれば Grund という語は女性でなくてはならぬ! Grund が男性であれば mit einem の筈で、mit einer とあるのはおかしい! ところが本には現に mit einer とある! ——それじゃあ結論は明瞭で、mit は einer を支配する前置詞ではない、

と断言して好い筈です。すると mit は前置詞ではない、という結論も生じます。生じたら、そのつもりで辭書を引いて、前置詞でない mit があるかどうか調べれば、意味はすぐにわかるわけです。

だから、他の箇所に矛盾の生ずるような誤讀は、そう云つてもマア割合用心し易いと云つて好いでしょう。危険なのは、むしろその反對の場合、即ち、一箇所を誤讀しても、そのために近所に文法的には何の矛盾も生じない場合の方です。たとえば：

Diese Stelle wollte er festhalten, an ihr wollte er sein und seiner Frau unstetes Leben festbinden. [*Emil Strauss: Das Grab zu Heidelberg.*]

此の地位にかれはすがり附こうとした、かれは此の地位に身を置き、そして自分の妻の不安定な生活を固定させようとしたのである。

「此の地位に身を置き、そして……」と譯してあるところを見ると、sein を不定法だと思つたにちがいありません。全體の誤譯がつまりその點から發しているのです。ところが、純形式的には、そう讀んでも讀めないことはありません。それが間違ひであることを認めるためには、ちよつと高級の知識を必要とします。というのは、an ihr wollte er sein の an です。此の Stelle というのは Stellung と同じで、ある職、あるいは地位ですが、『其の地位にある』ならば an は誤で、in ihr でなければならぬ筈なのです。それに、sein はちよつとまずいので、本當は in ihr wollte er bleiben とあるべき所でしょう。ところが、an とある以上、これはどうしても festbinden と關係していると考えなければなりません。——けれども、要するにこんな事は「語法」に關する高級な微妙な問題で、ごく荒つぱい純形式的な見地からは、sein を不定法だと思つたのは無理もない話です。また、純形式的には、何の矛盾もなく、そういう風にも讀めないことはないと言えましょう。

正解は、sein は物主形容詞だ、と云えば一口でわかりましょう。即ち、『此の地位だけは、彼は何としても囓りついてたかつた。自分自身と自分の妻の今までの浮草のような生活を、なんとかして此の地位につなぎ留めてしまいたかつたのである』

次は、文法的矛盾を生ずる（但し、よつぱど初歩知識がしつかりしていないとまどつく）場合：

Wir wollen *nicht den Papst anklagen*, weil er zu so großer Bedeutung

gelaugt ist; ebensowenig aber verdient der Lob, der sich ihm unterwerfen wollte. [Leopold Ranke: Ueber die Epochen der neueren Geschichte]

吾人は、かくも重要な地位を獲得するに至つたからと云つて法王を非難せんとするものではない、けれども、其の法王に屈服せんとした稱讃も亦何等の功績を有するものではないのである。

後半部は何のことやらサッパリ意味がわかりません。問題は der Lob の純形式的誤讀にあります。Lob (稱讃) は中性です！

すると der は derjenige Mann です。Lob verdienen (稱讃に値する) という句に注目すれば、der が指示代名詞であつて冠詞ではないことぐらい直ぐわかる筈なのです。der Lob を verdienen の主語と考えたら、verdienen に對する四格目的語がなくつてしまつて、何のことやら意味を成さなくなるはずです。

後半部の正譯は：『けれども、その法王に腰を屈せんとした者にも亦あんまり感服はできないと思う』です。

この邊でだいぶんハッキリして來たでしょうが、『文總體の大意』というやつは、ごくアイマイな常識上の問題で、文法や理窟では反駁することも立證することもできない漠然たるものの様でいて、その實、本當はいちばんハッキリした確かな目安だということがわかります。人間の漠然たる『感じ』というやつは實に正直なもので、どこかチョットでも變なところがあれば『これは何處となくおかしい！』と思う。頭の好い人というのは、つまり、此の胡麻化しの利かない『漠然たる感じ』に對して、自己の良心の前に於て、あくまで正直であり得る人のことです。『これはどこかチョットおかしいぞ……』と思つたら、たとえ理窟の上ではどんなに正しい筈であろうとも、そんな「理窟」や「筈」には絶対に屈服せず、その漠然たる、何の根據もない「感じ」のためには三千世界を向うに廻わしても勝算がある！と云つたような自信を持つことができ、また其の自信に従つて強力強引に行動するだけの勇氣のある人のことです。——現在の世は、もはや神も佛も信仰の對象とはなり得ません。孔子様の仰言ることも、お釋迦様の仰言ることも、はたまたイエス様の仰言ることも、マア半分ぐらいに値切つて承わつておいた方がよろしい。いわゆる科學的眞理という奴だつて、四五年たつとまた其の反對が本當になることもある……ただ一つ、絶対に信じて間違いないのは『自分自身のお臍のへんに低迷する漠然たる直観』です。人生諸般の問題すべて然り、語學も亦その御多分に洩れないのです。

非常に脱線しましたが、此の最も専門的な純形式誤讀という奴が、實はそうし

た人腦本來の特有性と直結しているところが面白いではありませんか。

その意味で、さらにもう一例を研究して見ましょう：

„Aber Base,“ sagte Vreneli, „Wie kommt ihr mir auch! Wir reden von einem Mann, und Ihr kommt mir mit Gott: da ist doch ja gar keine Aehnlichkeit. Wie einem Gott in Sinn kommen kann, wenn man von einem Manne redet, begreife ich nicht. [Gotthelf: Uli der Pächter]

『あら伯母さん』とフレーネリーは云つた、『なんてことを仰言るの？ 男の人の話をしてる時に、神様を持ち出すなんて！ それじやあ比べ物にも何にもなりやしないじやありませんか。男の人の話をしている時に神様のことを考えるなんて、わたしにはわかりませんわ。』

einem Gott は「一人の神に」ではなくて、Gott は無冠詞で一格、einem は man の三格です。つまり、前文と同じことを云つていたので、『男の人の話をしている時に、神様なんてところへ考えが飛ぶのはチョットおかしい』ということです。

常識があればこんな譯をするわけがありません。——翻譯は、奇論ではないが、なまじつか外國語に自信のある人がやるよりは、むしろ自信のない人がやる方が正しくなる傾向すらあります。その筈です。なまじつか横文字の方に自信があると、横文字の云うことばかり聞いて、自分の常識常感の云うことに耳を傾けなくなります。横文字の方に自信がないと、ただ一つの頼りが自分自身の漠然たる感じになつて来るから、そこで「總體的文章」が常識常感で納得できたか出来なかつたかという問題に對して、外國語のわかる人以上に感じが鋭くなつて来るので

す。——以上はマア多少奇論ですが、奇論ぬきで言つても、とにかく 10 の語學力をもつた人と 100 の語學力を持つた人とは、翻譯に關する限り、充分太刀打ちができる。できるどころか、10 の學力の人の方がずつと正しい譯をするということとは決して珍らしい現象ではありません。

それとは逆に、『翻譯できるということは何等語學ができるということを證するものではない』とも云えます。ごく手つ取り速いところを云えば、辭書なしで試験して見ればすぐわかるでしょう。翻譯ができるというのは、辭書を引くのが上手だということで、語學が出来るといふのは、大抵の事は辭書を引かなくても知つていふということなのですから。

常識常感とか、頭の好さとか、そう云う方面のことをひどく讚美しましたから、その反面の眞理として、此の最後に申し上げたわかり切つた理窟もついでにチヨット御一考ねがつておきます。語學に限らず、人生諸般の活動もまた凡て然り：頭ばかりでは駄目、具體的知識が豊富でなければだいいち折角の好い頭が半分にも働かないから、結局頭が悪いのと大差なくなつてしまうというわけです。

## 分綴のばなし

印刷屋 先生、月刊ドイツ語の初校刷りを四五日前にお届けしましたが、まだお出来になりませんか？ はやくやつて頂かないと、活字が寝てしまつて、次の仕事ができないんですが……

わたし 月刊ドイツ語の初校？ そんなものは受け取りませんよ。

印刷屋 はてな……四五日前にうちの者がお宅へ持つて行つた筈ですが……

わたし あゝ、月刊オランダ語の初校ですか……月刊オランダ語の初校ならこれです。

印刷屋 (頭を掻いて) 御皮肉は畏れ入りました……そんなにヒドかつたですか？ なるほど、眞赤になつてますな。

わたし ひどいッたッて、それはドイツ語として見ての話で、オランダ語として見れば別に訂正する必要のない所も澤山ありました。「青年」という Jüngling が Jongeling になつていたり、「立場」という Standpunkt の k が落ちて standpunt になつていたりするのは、これはモウ、オランダ語としては立派なもので、校正するのは惜しいような氣がしました。しかし、只今のところは月刊ドイツ語しか出していないので、やむを得ず訂正しましたから、どうぞ悪しからず。

印刷屋 先生は口が悪いですな。そう云えば丁度好い機會だから伺いたいことがあります、いつたいドイツ語の『切りどころ』という奴は、どういう風なことになるんですか？ われわれ共の一番困るのは、此の、『切りどころ』という奴なんで、殊に雑誌という奴になると、挿畫が這入つたり、細かく段が分れたりなんかして、ほんの一寸か一寸五分ぐらいの長さの所へ歐文を組み入れるでしょう？ 和文なら何處で切つても好いが、歐文という奴はそうは行きませんからねえ。

わたし ははあ、つまり分綴法 (Silbentrennung [ジルベン・トレンヌング]) のことですね？

印刷屋　そうです。たとえば、ちよつと之れを見て下さい。これは今組んでいる教科書ですが、Du lernst Deutsch という文句が此の一寸五分しかない行の中へおさまることになるんです。活字を数えると十五字ありますね。十五字とも入れようとすると DulerntDeutsch と續ければどうにかおさまるが、それじやあ勿論いけないでしょう？

わたし　そんな無茶なことをされては困りますな。

印刷屋　そうでしょう？ では Du だけ前の行へ繰り込んでしまえば好いかも知れないが、Du は二字ですけれども、これを行の終りに入れるとなると、その前にスペースをあけなければならないから、けつきよく三字分のスペースを作ることになつて、それは駄目なんです。そうかと云つて、Du lernst だけを此の行におさめるとなると、Du と lernst との間がひどく空いてしまつて非常に不體裁なことになる。そこで、結論として、どうしても Deutsch という長い語を何處かで切らなければならない。七字もある長い語だから、もちろん何處かで切つたつて差しつかえないんだらうとは思いますが、悲しいことにはドイツ語の知識が足りないから、何處で切つたら好いのかわからない……

わたし　ちよつと待つて下さい。Deutsch というのは一綴だから何處でも切れませんよ。

印刷屋　そんな事は無い筈ですよ。英語なんかだと、どんどん切つてますよ。

わたし　お冗談でしょう！いくら英語だつて一つの綴を途中で切るという話は聞いたことがない。

印刷屋　だつて、七字もある長い語なら何處かで切れるでしょうに。

わたし　いや、たとえ何字あつても單綴の語は切るわけに行きません。切れる切れないという事は、綴と関係しているんで、長さとは別に何の関係もないんです。英語だつてそうですよ。たとえば splash! (ドブソ!) というのは、感嘆符も合せて、やはり七字になるが、これは何處でも切れないはずですよ。

印刷屋　いや、私の所では、構うことアない、そんなのはドンドン切つちまいます。

わたし　直されるでしょう。

印刷屋　直されることもあり、直されないこともあります。直されなきやアそれを通してしまいます。

わたし　亂暴だなア！

印刷屋　それでなきやア能率があがりませんよ。先生みたいな五月蠅いお客さんばかりだつたら、われわれ共の商賣は成り立ちませんからね。

わたし こりやア飛んでもない印刷屋さんだ! じやあ一寸分緩の説明をするから、よく聞いといて下さい。系統的な講義をしていちやア間に合わんから二三「かんどころ」を云いましょう。——まず此の、單細胞動物を胴體の真中の所でチヨン切つちやアいかんと云う事は、これはモウ分綴法の劈頭第一の鐵則ですぜ。

印刷屋 單細胞動物というのは、どういふ所でわかりますか?

わたし それは母音と子音との關係でわかります。splash なら、a というおツ



母さんが真中にいて、その前に子供が三人、あとからも二人ついて行くわけで……

印刷屋 おまけにお腹にも一人いるらしい

ような恰好に見えますが……

わたし お腹の子まで勘定しなくつたつて好いんですよ。要するに、こんなのが表を歩いていたら、別に顔見知りでなくても……何と思います?

印刷屋 ゾッとしますね。

わたし とにかく『一家族』だという事がわかるでしょう? もしあんたがバスの車掌で、こんなのがソロソロ乗つて來たら、満員だからと云つて前の二三人だけ乗せて發車オーライというわけには行かん。

乗せるならみんな乗せる。乗せないならみんな乗せない。どちらかです。Deutsch だ



つてそうです。この方はお母さんらしいのが二人も並んで行くが、これは前のが一號さんで後のが二號さんだと思えば好いでしょう。——それに反して Deutschland となると、これは一見して母性二重奏 だということがわかる。こんなのが



ソロソロ乗つて來たら、とにかく母性群と母性群との中間のどの邊かで「ハイ、此處までにして下さい。おあとは直ぐ参ります!」と云

つて發車してしまえば好いわけです。

印刷屋 ところがサア、その中間というのが、何處でも好いというわけじやアないんでしょう? たとえば Deuts と chland に切つちやアいけますまい? 永年やつてるから chland なんぞになつちやアおかしいと云う感じはあるんですが、schland ならドイツ語らしい恰好になるから Deut と schland に分けても構わないような気がします、いけませんか?

わたし そりや困る。こりやア矢張り意味を知つていないと分けられないという事になりますな。

印刷屋 話が別になりますが、英語とドイツ語とは分け方がだいぶ違います

か？

**英語と獨逸語と  
の主な相違點**

わたし だいぶ違いますね。いちばん肝腎なところを云うと、たとえば英語の *dwelling* とドイツ語の *Wohnung* です。兩方とも『住居』という意味で、分解すれば *dwell* (住む) が *wohnen* (住む) にあたり、*-ing* という語尾がちょうどドイツ語の *-ung* にあたりますから、結局全然同じ構造のわけです。ところが、英語の方は *dwell-* で切つて *ing* を次の行へ持つて行く。ドイツ語の *Wohnung* は *Wohn-* と *ung* とに切るわけに行かない。*Woh-* と *nung* とに切ります。換言するならば、一語(『一語』ですよ！二語以上から成る、たとえば *Deutschland* みたいな『複合詞』ではありませんよ！)を途中で切るときには、英語の方では『原形』を尊重して『發音』を蹂躪する。ドイツ語の方では其の反對に『發音』を尊重して『原形』を蹂躪する、というわけです。

印刷屋 すると *dwell-ing* では發音が蹂躪されていますか？

わたし されているじやありませんか。ドゥエル！イング！なんて發音しはしないでしょう？！と *ing* とは一緒になつてドゥエル！リング！と實際は發音するでしょう？ところが、分綴の際はそれを無視して *dwell* と *ing* とに分けるのです。その他 *wait-ed* だつて *nat-ure* や *stat-ion* だつて、みんなおなじことです。

印刷屋 ところが、原形がどうのこうのという詮議になると、われわれ共は少苦手なんです、——そんな場合は、簡単に、母音のところで次行へ移す、と覚えておいてはいませんか？

わたし それでも好いでしょう。しかし *kindness* を *kindn-* と *ess* に切つたりなどされちや困りますがね。——それよりも、ドイツ語の分綴の方をよく覚えてください。ドイツ語の方は、ただいま云つた *Wohnung* のように、元の幹語と語尾とに分けたりなんぞしないで、とにかく發音する通りに切るんです。*Wohnung* は『ヴォーン・ング』ではなくて『ヴォー・ヌング』だから *Woh-nung* と切る。*Silbentrennung* は『ジルブ・エント・レン・ウング』ではなくて『ジル・ベン・トレン・ヌング』だから *Sil-ben-tren-nung* と切る、というわけです。

**st は切るべからず！**

印刷屋 『北』という *Norden* なら *Nor-den* と切つて好い譯ですね？

わたし そうです。

印刷屋 *No-rden* とは切れませんか？

わたし 切れません。*rden* なんて獨立發音はないからです。

印刷屋 では Osten (東) や Westen (西) も, Os-ten, Wes-ten と切るわけですね?

わたし オットドッコイ, そいつは例外です! st. は絶対に切つちや不可せん!

印刷屋 それはいつたいどうしてですか?

わたし どうしてもヘッタクレもない, 習慣だから仕方ありません。

印刷屋 すると O-sten, We-sten ですか?

わたし そうです。

印刷屋 なんだか, 間が抜けていて, おかしいみたいじゃありませんか。

わたし それは恐らく英語か佛蘭西語の感じで見えるからでしょう。ちつともおかしくない。——これには活字の方のわけがあるんです。あんたは活版屋さんだから, ちよつと考えたらわかるでしょう。あんたの所は「ジャーマン」活字はありませんか?

印刷屋 deuff みたいな奴でしょう? あることはありますが。

わたし では, ジャーマンには | と | とがくつついた 𐀀 という活字があることを知つてるでしょう?

印刷屋 ありますね。

わたし ドイツでは 𐀀 は 𐀁 や 𐀂 や 𐀃 と同じように, 單なる一箇の活字となつて居るのです。一個の活字となつて居るというのは, 單に便宜上そうとなつて居るのではなく, 發音の上でも多少 𐀁 や 𐀂 などと同じように單なる一つの發音として感ぜられる傾向があるからで, 従つて分綴の場合にも Bücher を Büc-her とは切らず, 發音を尊重して Bü-cher と切らねばならないように, Osten も O-ſten と切るといふわけです。たゞもだけは例外です。これはたとえば Rake なら Rat-ke と切ります。

**ck は k-k となる**

印刷屋 それから ck (ck) という奴がありますね?

わたし そうだ! そいつも例外です。たとえば Brücke (橋) なら Brück-e ではなく Brül-le と切ります。これはよく覚えておいて下さい。c が k に變るのです。英語は元の形を尊重して切るがドイツ語は『發音』を尊重して切る, という事實が, 此の場合に露骨にあらわれているでしょう? 發音を尊重するの餘り, ついに原形を無視するに至つたわけですからね。

印刷屋 どうもありがとうございました。では, 急ぎますから, これで失禮いたします。

わたし どうも御苦勞でした。

印刷屋 オット肝腎の用事を忘れていた、……その月刊……オランダ語の初校をいただいて歸ります。

語學をやる心構え

文豪 Schiller の曰く：『大望を遂げんとする者は、徹するに深く、辨ずるに鋭く、獵るに廣く、持するに剛なるを要す』(Wer etwas Großes leisten will, muß tief eindringen, scharf unterscheiden, vielseitig verbinden, und standhaft beharren. 或る一つの語を『本當に』物にするというのは大望です。語學その者は小望ですが、『本當に』物にするのは大望です。如何となれば、本當に物にせんがためには、たとえ語學の如きものと雖も、もはや單なる語學ではなくなつて來るからです。いつたん始めた以上は好い加減な所で止しては何にもなりません：徹するに深く！——まづ語學を契機として人間界の事柄をハッキリと考える癖をつけ、ゴマカシの利かない頭を造り上げましょう：辨ずるに鋭く！——然し、鋭いと云つても、日本人のお得意の、鋭くて細くて弱々しい、或る種の小さな名人、小さな天才、小さな偉人、小さな大家になること、要するに小さく大成することは止しましょう、多少まとまらないでも、ちつと慾の深い人間になろうではありませんか：獵るに廣く！——しかし、たとえどんなに店先の間口を擴げてもたとえどんなに奥行きを構えても、間口負けしたり奥行き倒れしたりするようなダラシの無い結果にならないように、此の間口、此の奥行を枕に討死する覺悟で頑張らしましょう：持するに剛なるを要す！

## 部 の 本 の 讀

# Das Denken

Du denkst zu<sup>1</sup> viel, lieber<sup>2</sup> Freund! Das ist dein Unglück.<sup>3</sup> Denn<sup>4</sup> wer<sup>5</sup> zu viel denkt, handelt wenig.<sup>6</sup> Und wer wenig handelt, verpaßt<sup>7</sup> den Bus.<sup>8</sup>

Ich verpasse den Bus nie.<sup>9</sup> Der Lebensbus<sup>10</sup> hat immer einen Platz

題語譯: lieber Freund! 親愛なる友よ! Du 君は zu viel あまりに多く denkst 考へ [すぎ]る。Das それは dein Unglück 君の不幸 ist である。Denn なぜなれば zu viel あまりに多く denkt 考へる wer 者は wenig 少なく handelt 行動(實行)する。Und そして wer wenig handelt 少なく行動する者は den Bus バスを verpaßt 逸する。

Ich 僕は den Bus バスを nie 決して verpasse 逸さ[ない]。Der Lebensbus 人生のバ

註: 【1】 zu viel: この zu は、英語の to に相當する普通の zu ではなくて、too に相當する zu です。すなわち『餘りにも……(云々過ぎる)』の意。zu viel は too much。——【2】 lieber Freund: lieber は、lieben (愛する) という動詞ではなく、lieb (親愛なる、好ましい、英の dear) という形容詞です。用例: Das ist mir lieb それは私にとつて喜ばしい、それはうれしい。——【3】 Unglück: 「不幸」、「禍」(反對は Glück, n. 「幸福」——この語は英の luck と同語源で、それに前綴 Ge- がついて Geluck となつたのがつづまつたもの)。——【4】 denn: 英の for (何故というに) と同じ。理由をあげる時には denn (for) を用いたり weil (because) を用いたりします。——【5】 wer: これは元來は『誰?』という疑問詞です (Wer bist du? おまえは誰か?), しかし wer zu viel denkt (餘り多く考へる者は) といつたように、動詞をおしまいに置いて用いると『およそ誰でも……する者は』という文ができます。『誰があまりに多く考へるか?』という疑問文ならば動詞は英語の場合と同じ位置に来て Wer denkt zu viel? となります。——【6】 wenig: これは「少く」

準否定詞  
wenig

(英: little) という語ですが、用法の上から云うと一種の否定詞です。handelt wenig は「少く行動する」と云つても間違いではありませんが、しかしびつたりとした譯をつけるとすれば「大して行動しない」と云つた方が徹底します。

肯定の方の、即ち「少しばかり」の意には ein wenig (英: a little) を用います。此の關係は英獨佛三語に共通です: 『かれは少しばかり實行する』は英: He acts a little; 獨: Er handelt ein wenig; 佛: Il agit un peu。——『かれは大して實行する所がない』は英: He acts little; 獨: Er handelt wenig; 佛: Il agit peu。——【7】 verpaßt: 不定法は verpassen ですが、-t という語尾の前では ss は ß に書きかえます。ß という活字が無いときには ss でもかまいません。verpassen は英語の miss で、要するに『取り逃がし』たり、『つかまへ損なつ』たり、狙いを『外し』たり、長蛇を『逃し』たりするのがすべて verpassen です。我國でもハイカラな人はよく英語を使つて「ミスする」ということを云います。ミス

ミス取りのがすからでしょうか？ オールドミスというのも、好い縁談があつたのを悉くミスしちやつたからそれでミス……と云うのかどうか、それはまあ英語の先生に訊いて下さい。要するに *verpassen* はちやうど英語の *miss* です。——【8】 *Bus, m*: これは英語の *bus*

意譯：親愛なる友よ、君はあまり考えすぎる。それは君の爲めにならない。なぜというに、考えすぎる者にかぎつて實行が足りないからだ。そして實行の足りない者はバスに乗りおくれる。

僕は決してバスに乗りおくれぬ。人生のバスは何時も僕のために席を取つて

*für mich bereit.*<sup>11</sup> *Und*<sup>12</sup> *warum?* *Weil*<sup>13</sup> *ich wenig denke und viel handle.*<sup>14</sup> *Ich bin kein Träumer.*<sup>15</sup> *Ich bin ein Realist.*<sup>16</sup>

*Träumer, dein Denken ist kein Denken, sondern*<sup>17</sup>  
*nur ein Grübeln.*<sup>18</sup>



スは *immer* 常に(何時も) *einen Platz* 一つの場所を(座席を) *für mich* 僕の爲めに *bereit* 用意して *hat* 持つている。Und そして *warum* なぜか? *ich* 僕が *wenig denke* 少なく考え *und* そして *viel handle* 多く行動する *Weil* からだ。Ich bin kein Träumer 僕は夢想家ではない。Ich bin ein Realist 僕は現實主義者だ。

*Träumer* 夢想家よ *dein Denken* 汝の思索は *ist kein Denken* 思索ではない、*sondern* むしろ *nur* ただ *ein Grübeln* 思案 [であるにすぎない]。

(バス)と同じ。Autobus [アオトブス] (乗合自動車)の省略形です。——それから重要な注意：この「バスをミスする」「バスに乗りおくれる」という通り言葉は、まさか御存じない人はなかろうと思いますが、これは最近しきりに使われた用語で、つまり「時勢に便乗しそこねる」ことです。——【9】 *nie*: 「決して」で、これを使うと *nicht* という否定詞は不要です。英は *never*。獨は *nie, nimmer, niemals* の三つとも同意に用いられます。——【10】 *Lebensbus, m*: 人生バス。即ち *Der Bus Leben* (人生というバス)というに同じ。こういう語は辭書になくても勝手に造ることが出来ます。——【11】 *bereit*: 英の *ready* です。Ich bin bereit (私は仕度ができています)。——【12】 *und warum?*: なぜ *und* が導入しているかという、『してそのわけは?』だからです。——【13】 *weil*: 前述の如く英の *because* です。英の *for* と *because* との差はちやうど獨の *denn* と *weil* との差です。この場合の如く、前に *warum?* と問うてある直ぐ後では必ず *weil* を用い、*denn* は決して用いません。それから *weil* を用いると、その次の文の動詞は一番うしろに置かれます (*weil ich denke wenig* ではなく、*weil ich wenig denke* です)。——【14】 *handle*: *handeln* は *ich handle* の *e* を一つ省いて *handle* とします (口調上そうなるのです)。——【15】 *Träumer, m*: *Traum, m* (夢)と關係して *träumen* (夢想する)という動詞があり、それから造つたのが *Träumer* です。——【16】 *Realist, m*: この反對は *Idealist* (理想家、觀念論者)「現實主義」は *der Realismus* [レアリスムス]と云います。——【17】 *sondern*:

これは英なら *but* です。此の語は、まず否定の文が先にあつて、その次に、それと同じ内容の事を肯定で云いなおす時に、間に挿んで用いる接續詞です。「そうではなくて」、「然らずし

て」或いは全然譯語は用いなくてもよろしい。逐語譯の所に「むしろ」とあるのは、この場合だけに通用する方便上の譯語と思つて下さい。——【18】 ein Grübeln: grübeln (くよくよ考える、深く考えこむ、同じことをいつまでもしつこく考える) という動詞を名詞に用いたもの。こういう風に、動詞の不定形をそのまま名詞として用いることが非常に多いのです。そうすると性はすべて中性として扱います: das Denken (考えること), das Grübeln (苦思案、思いめぐみ), das Leben (生きること、人生、一生、命) など。

おいてくれる。それは何故か? それは僕が思案を少なくし、實行を多くするからだ。僕は夢想家ではない。僕は現實主義者なんだ。

夢想家よ、君の考えるというのは、それは考えるのじやない、單に考え込むにすぎないのだ。

## Das Leben ist ein Sport

Der Pessimist<sup>1</sup> sagt: Das Leben ist ein Traum. Der Optimist sagt: Das Leben ist ein Spiel.<sup>2</sup> Der Realist sagt: Das Leben ist ein Kampf.<sup>3</sup> Der Idealist sagt: Das Leben ist eine Schule.<sup>4</sup>

Ich bin kein Pessimist, sondern Optimist, Realist und Idealist

逐語譯: Der Pessimist 悲觀論者は sagt 云う: Das Leben ist ein Traum: 人生は夢であると。Der Optimist sagt: 樂觀論者は云う: Das Leben ist ein Spiel 人生は遊戲であると。Der Realist sagt: 現實主義者は云う: Das Leben ist ein Kampf: 人生は闘いであると。Der Idealist sagt: 理想家はいふ: Das Leben ist eine Schule 人生は道場なりと。

Ich bin kein Pessimist わたしは悲觀論者ではなく sondern て zugleich 同時に Optimist, Realist und Idealist 樂觀論者と現實主義者と理想家と【である】。Für mich 私にとつては das Leben 人生は ein Sport 一つのスポーツ ist である。

Was ist Sport? スポーツとは何か? Sport ist ein Spiel スポーツは遊びである。Sport

註: 【1】 Pessimist (悲觀家): 發音のアクセントは最後の -ist のところにあります。何々主義者、何々「家」を意味する此の -ist という語尾は必ずそうです、次に出てくる Optimist, Realist 等すべて同じ。——【2】 Spiel, n: 動詞は spielen (遊ぶ)、英の play。——【3】 Kampf, m: 動詞は kämpfen (闘う)——【4】 Schule, f: 「學校」ですが、一般に「道場」即ち修行するところ、力を鍛える所を Schule といいます。——【5】 zugleich (同時に): 此の語は、列挙される語のうしろに置くことが多いので、こんな變な位置にきています。たとえば Ich bin alt und jung zugleich. (僕は年寄であつて同時に若い) こういう時には英語は both を用い、ドイツ語の zugleich とは逆に前に置きます: I am both old

and young.—【6】 für mich: für は「……にとっては」(英: for) という前置詞。für mich は、僕にとっては、即ち「僕の見る所を以てすれば」です。—【7】 ist: 此の ist の位置に注意。正順は Das Leben ist ein Sport für mich ですが、für mich を先に出すと、主語と動詞とが逆になります。これは一般にそうです。ドイツ語では、主語以外の語句が先頭に置かれると、その次には動詞をおくのです。—【8】 Ja und nein: 然りでもあり否でもある、という時に用いる句です。—【9】 Selbstzweck, m (自己目的): 哲學用語で、「自己目的」というのは、「それ自身の目的がそれ自身にあるもの」ということです。すなわち、スポーツならば、スポーツは別に健

Selbstzweck  
自己目的

意譯: 悲觀家は曰く: 人生は夢だ。樂天家は曰く: 人生は遊戲だ。現實主義者は曰く: 人生は闘争だ。理想主義者は曰く: 人生は道場だ。

私は悲觀論者ではない。樂天主義者であり現實主義者であり同時に理想主義者である。私の意見を以てするならば、人生は一つのスポーツなのである。

スポーツとは何ぞや? スポーツとは即ち一場の遊戲である。スポーツとは即



zugleich.<sup>5</sup> Für<sup>6</sup> mich ist das<sup>7</sup> Leben ein Sport.

Was ist Sport? Sport ist ein Spiel. Sport ist ein Kampf. Sport ist eine Schule.

Hat das Leben einen Sinn, einen Zweck? Ja und nein.<sup>8</sup> Warum? Weil es ein Sport ist. Der Sport hat keinen Zweck; er ist ein Selbstzweck.<sup>9</sup> Der Sport hat keinen Sinn, er

ist ein Kampf スポーツは闘いである。Sport ist eine Schule スポーツは道場である。

das Leben 人生は einen Sinn 一つの意味を, einen Zweck 一つの目的を Hat? 持っているか? Ja und nein 然り, 而して否! Warum? 何故か? Weil いかんとなれば es (=Leben) それは ein Sport 一つのスポーツ ist である [からだ]。Der Sport hat keinen Zweck; スポーツは目的を持たない。er ist ein Selbstzweck かれは自己目的である。Der Sport hat keinen Sinn スポーツは意味を持たない, er macht nur Spaß それはただ娛樂をなすのみ。

Auch das Leben 人生もまた ist ein Selbstzweck 一つの自己目的である。Man 人は

康のためにやるのでもない, 名譽のためにやるのでもない, 營利が目的でもない, 要するに「スポーツの目的はスポーツそのものにある」(即ち単におもしろいからやる)ということが出来るでしょう, これを自己目的と云います。萬引などもそうで, お金持の婦人が單に萬引きするのが面白くて萬引きをするのがある, あれは萬引きを自己目的としてやつているの

です。人生もそれで、別に生きてどうと云うことは何もない、人生の目的は人生そのものにある、即ち自己目的です。——【10】 *macht nur Spaß* : 此の *Spaß machen* (娛しみをなす) というのは「面白い」「興味がある」という熟語です。 *Spaß, m* は「冗談」「洒落」あるいは「娯楽」です。——【11】 *man* : 「人は」「世人は」あるいは「吾人は」と譯しても好い場合があります、茲がその好例。——【12】 *um zu* : これは英の *in order to* にあたり、「……せんがために」という意の形式です。次に不定形を置きます。 *um zu handeln* (行動せんがために)、 *um zu gehen* (行かんがために)、 *um zu sehen* (見んがために) など。——【13】 *weiter* : 「それ以上にわたつては」「それ以外には」という副詞。(次の *hat es* という逆順に注意。正順ならば *Es hat weiter keinen Sinn.*)——【14】 *Unsinn* : *Un-* というのは「非」「無」「不」等の意の前綴です。 *Unsinn* はいわゆるナンセンス、即ち英の *nonsense* です。「意味を成さないこと」「馬鹿々々しいこと」「無意味なこと」等。つまり

---

ち一場の闘争である。スポーツとは即ち一つの道場なのである。

人生には何か意義のようなものがあるか？ 目的のようなものがあるか？ あるようでもあり、無いようでもある。それは何故か？ それは即ち人生は一種のスポーツだからである。スポーツに目的はない、スポーツはそれ自身が目的である。スポーツに意味はない、それはただ面白いというきりなのである。

---

*macht nur Spaß.*<sup>10</sup>

Auch das Leben ist ein Selbstzweck : Man<sup>11</sup> lebt nur, um zu<sup>12</sup> leben. Weiter<sup>13</sup> hat es keinen Sinn. Es ist ein Unsinn,<sup>14</sup> wenn man will,<sup>15</sup> aber ein Unsinn, der<sup>16</sup> furchtbar<sup>17</sup> Spaß macht. Es ist nur ein Spiel, wenn man will, aber dieses<sup>18</sup> Spiel ist gerade<sup>19</sup> so<sup>20</sup> spannend<sup>21</sup> und ernst wie<sup>22</sup> der Sport!

---

nur ただ *um zu leben* 生きるために *lebt* 生きている[きりのはなしである]。Weiter それ以上 *es* それは *keinen Sinn* 何の意味も *hat* 持たぬ。Es [=Leben] それは *wenn man will* もし人が欲するなら (=なんなら) *ist ein Unsinn* 一つの無意味である。aber 然しながら *furchtbar* おそろしく (=非常に) *Spaß macht* 娛みをなす *der* ところの *ein Unsinn* 無意味 *ist* である。Es [=Leben] それは *wenn man will* なんなら *ist nur ein Spiel* ただ遊戯である [にすぎない]、aber けれども *dieses Spiel* 此の遊戯は *der Sport* スポーツ *wie* と *gerade* ちょうど *so* 同様に *spannend* 緊張した *und* そして *ernst* 真剣 (深刻) な [もの] *ist* であるのだ。

「本氣に取ると飛んだバカを見ること」を *Unsinn* というのです。たとえば「一日に二度あつて一年に一度しかないものは何？」という謎があります。本氣に考えると、そんな論理に

合わないことはないといしか考えられない。それはあんまり眞面目に考えるからで、答は、「それはチという假名だ」というナンセンスなのです。人生も然り。人生も一つのナンセンスなので、機智を以て之れを解決するを要す。——【15】 *wenn man will* (もし人が欲するならば)：というのは、「もし人がそう云う風に言うことを欲するならば」という意味の常用句で、つまり「なんならそう云つてもよかろう」という時に用います。——【16】 *der*：これは冠詞の *der* ではなくて、関係代名詞です (逐語譯を研究すること)。英の *which* または *that*。関係代名詞があると、その次に来る文は、動詞が一番最後に來ます (*macht*)。——【17】 *furchtbar* (おそろしく)：これは「非常に」という語。——【18】 *dieses Spiel*：*Spiel* は中性ですから *dies-* に *-es* という語尾がつきます——【19】 *gerade*：ちょうど (英：*just*)——【20】 *so*：この *so* は *als* と對立して *so.....wie.....* が英の *as.....as.....* にあたります。『云々と同じ程云々である』『云々と同程度に云々である』——【21】 *spannend*：緊張した、張り切つた、片唾をのませるような、息もつまるほどの、手に汗をにぎるような。——【22】 *wie*：此の説明は註 19 にある通り。 *wie* の代りに *als* とも云います。

人生も亦、それ自身が目的である。吾人はただ生きんがために生きているにすぎない。それ以上別に何の意味もないのだ。なんならナンセンスと云つてもよかろう。ただし、すこぶる面白いナンセンスなのである。なんなら一場の戯れにすぎぬと云つてもよかろう。しかしその戯れたるや、その迫力、その眞剣味は實にスポーツのそれに髣髴たるものがあるのだ！

## Das Suchen

Ich suche<sup>1</sup> nach<sup>2</sup> meiner Pfeife. Wo mag<sup>3</sup> sie<sup>4</sup> nur<sup>5</sup> stecken<sup>6</sup>?  
Sie ist nirgends<sup>7</sup> zu<sup>8</sup> finden. Ich muß sie aber<sup>9</sup> unbedingt<sup>10</sup> wieder  
haben, sonst<sup>11</sup> kann ich nicht rauchen. Zigaretten<sup>12</sup> habe ich keine.<sup>13</sup>  
Ich habe nur Pfeifentabak.

逐語譯：Ich 私は nach meiner Pfeife 私のパイプを suche 探す。Wo 何處に sie 彼女 (パイプ) は nur いたてい stecken 隠れている mag のだろう? Sie 彼女 (パイプ) は nirgends 何處にも zu finden 見出すべく ist ない。aber しかし Ich 私は sie 彼女 (パイプ) を unbedingt 絶對的に wieder ふたたび haben 持た muß ねばならぬ。sonst でないと ich 私は rauchen 煙草を吸う kann nicht ことができない。Zigaretten 巻煙草というやつは ich 私は habe keine 持たない。Ich 私は nur ただ Pfeifentabak パイプ煙草を habe 持つ (のみである)。

註：【1】 *suche*：不定形：*suchen* (探す)。發音に注意：ズッヘンではなく「ズーヘン」。——【2】 *nach*：これは「.....の後」、「.....を追つて」「.....を求めて」の意の前置詞。「私は私のパイプを探す」ならば、單に Ich suche meine Pfeife でもよさそうなところを、わざわざ *nach* という前置詞を用いるのは、*suchen* という動詞の用法から來ています。即

ち suchen は大抵 nach という前置詞と共に用いるのです。直譯して「私は私のパイプを求めて探す」といえばわかりましょう。nach は三格支配ゆえ meine Pfeife が三格の形になって meiner Pfeife となつています。——【3】 mag (英: may): 不定形 mögen, 『……だろう』という、推測を意味する助動詞。(ich mag, du magst, er mag, wir mögen, ihr mögt, sie mögen)——【4】 sie: Pfeife が女性ゆえ、それを指すときには sie というわけ。英訳なら は というところ。——【5】 nur: これは「ただ」という助詞ですが、ここではその意ではなく、とにかく「いつたい……なのかしら?」「いつたい ……なのだろう?」と云つたような「不審る」意味の疑問文には nur を用いることが多いのです。つまり「いつたい」「そもそも」等にあたります。例: Was hast du nur? (おまえはいつたい何を持っているのだ) Wo geht er nur hin? (あの男はいつたい何處へ行くんだらう?)——【6】 stecken: 元來は「挟まつている」「ささつている」ですが、なんでも目に見えない所にひそんでいることを stecken といいます。Was steckt in deiner Tasche? (おまえのポケットの中に何が這入つているんだい?) 従つて、探してもみつからない物ならば、おもしろく「何處にはさまり込んでいるんだらう?」というわけです。——【7】 nirgends (英: nowhere) 『何處にも(……しない)』という否定詞。否定詞ですから、これを使えば、他に nicht を要せずして文章全體が否定になります。——【8】 zu finden: これだけでは「見出すべく」ですが、前の

ist……zu finden  
という形について

ist と結びついて「見出すべくある」すなわち「見つかる」という意味になります。(英語では斯ういう時には受働形を用いて is not to be found (見出されるべくない)といいますが、ドイツ語は受動形を用い

意譯: 私は私のパイプを探している。いつたい何處へまぎれこんでしまつたんだらう? 何處を探しても見つからない。ところが、どうしても探し出さないと困るんだ。出てこないと煙草を吸うわけに行かないのだ。巻煙草というやつは御相憎なんぞね。パイプタバコしか無いんだ。



So geht<sup>14</sup> es, wenn man sich aufs Suchen verlegt<sup>15</sup>: man findet alles, nur nicht das.<sup>16</sup> wonach<sup>17</sup> man sucht. Man findet eine alte Brille, die<sup>18</sup> man nicht mehr braucht<sup>19</sup>; man findet eine alte Uhr, die nicht mehr geht<sup>20</sup>; man findet eine

man 吾人が sich 吾人自身を aufs Suchen (=auf das Suchen) 探索の上に verlegt 投ずる wenn と So geht es 斯くの如くそれは行く(こんな事になつて来る): man findet alles 吾人は凡てを見出す, nur ただ wonach man sucht 吾人が探しているところの das その物は nicht 見出さない。Man 吾人は man 吾人が mehr もはや braucht 要し nicht ない die ところの eine alte Brille 古い眼鏡を findet 見出す。man 吾人は mehr もはや geht 動か nicht ない die ところの eine alte Uhr 古い時計を findet 見出す。man 吾人は mehr もはや gilt 通用し nicht ない die ところの eine alte Banknote 古紙幣を

ません。「それは期待すべくある」「それは期待できる」: Es ist zu hoffen (英: It is to be hoped), 「それは否定すべくない」「それは否定できない」: Es ist nicht zu leugnen (英: It

is not to be denied)——【9】 aber: Aber ich muß sie .....とおなじ。——【10】 unbedingt: 元來は「無條件の」,「絶對的」という形容詞, または副詞。従つて「何とあつても」,「何が何でも」,「是が非でも」の意になる。——【11】 sonst: 「然らずんば」,「さなくんば」,「そうでなければ」(英: *else, otherwise*) 即ち「見つけないと」という意になる。——【12】 Zigaretten: eine Zigarette (シガレット) の複數。——【13】 keine: この文は本當なら Ich habe keine Zigaretten となるところです。ところが, 特に Zigaretten を強めて「シガレットなんてものは一つも持つていない」と云おうとすると, 本文のような語順になります。——【14】 So geht es: 正順では Es geht so.『それが斯く行く』ですが, これはつまり『だいたい斯う云つた調子だ』ということ。會話でも『どんな調子ですか?』は Wie geht es? (*How do you do? How are you?*) と云います。——【15】 wenn man sich aufs Suchen verlegt: „sich verlegen“ は分解すると「自己を置き移す」, aufs Suchen は「探索の上へ」です。しかし, この sich auf.....verlegen というのは熟語で, 「.....に身を投ずる」すなわち, なんでも「急に氣が向いて何かに熱中しはじめる」ことを云います。たとえば「あいつは何と思つたか急にドイツ語に凝り出した」は Er verlegt sich auf die deutsche Sprache です。Suchen は, suchen から作つた名詞で, 「物を探すこと」, 「探し物」です。aufs は auf das の略形。——【16】 das: これは冠詞ではなく, 「その物」の意。この語に特に力が通入りますから, 「ダース」と長く發音すること。念を入れると das-ienige(ダースィエーニゲ)ということもあります。——【17】 wonach: 「探しつつあるところの」ならば單に was man sucht でもよさそうなわけですが, 註 2 で述べた通り, suchen は nach と共に用いるので, was の代りに wonach (それを求めて) という關係代名詞が用いてあるのです。(was は前置詞と合する時には wo という形になります。)——【18】 die:

いつたいどうも, 物を探しはじめると必ずこういうことになつて来る。ありとあらゆる物が出て来るが, 探している物だけは絶對に出て来ない。もう用のなくなつた眼鏡が出て来る。動かなくなつた時計が出て来る。もう通用していない札が出て来る。要するに, 探してもいない有りと有らゆるものが全部出て来る。た

alte Banknote,<sup>21</sup> die nicht mehr gilt<sup>22</sup>——kurz,<sup>23</sup> man findet da alles, wonach man nicht sucht, nur nicht das, wonach man gerade<sup>24</sup> sucht.

Vielleicht<sup>25</sup> ist es besser,<sup>26</sup> daß ich nicht mehr suche? Vielleicht kann ich meine Pfeife gerade deshalb<sup>27</sup> nicht finden, weil ich danach<sup>28</sup>

findet 見出す。——kurz 要するに man 吾人は da 其處に wonach man nicht sucht 吾人が探してもいないところの alles すべてを findet 見出す, nur ただ man 吾人が gerade ちょうど sucht 探しつつある wonach ところの das その物 nur だけは nicht (見出さない)。

Vielleicht ひよつとすると ich 私が mehr もはや suche 探さ nich ない daß ということ es そのことが ist besser より良いか? Vielleicht ひよつとすると ich 私は ich わたしが danach それを suche 探す weil から gerade ちょうど deshalb そのため meine Pfeife 私のパイプを finden 見出す kann nicht ことができない (のだろうか?) Vielleicht

これは関係代名詞。(女性四格)——【19】 *braucht*: *brauchen* (英: *need*) 「……を必要とする」——【20】 *geht*: 時計が動くことを *gehen* と云います。時計のみならず、何でも廻轉していることを *gehen* というのです: *Die Mühle geht* 水車が動いている, *der Fahrstuhl geht* エレベーターは動いている。——【21】 *Banknote*: 紙幣。——*Bank, f.* (銀行), *Note, f.* (券)——【22】 *gilt*: 不定形は *gelten* (通用する, 有効である)——【23】 *kurz*: 形容詞としては「短かい」の意の語ですが、それが「短かく」(言えば)の意に用いられ、遂に「簡単に云えば」という意の接続詞にも用いられるのです。——【24】 *gerade*: 「ちょうど」(英: *just, precisely*)——【25】 *vielleicht*: 「多分」, 「おそらく」(*perhaps*)の意から、「事によると……」「ひよつとすると……?」の意になります。(英: *maybe*)。發音は「フィール」のところを少し短かく「フィル」と發音する方がよろしい。——【26】 *besser* (英: *better*)。——【27】 *deshalb* は *weil* と結びついて、「……なるが故に其の爲めに」すなわち「……である故にこそ」, 「……であるばかりに」となります。それにおまけに *gerade* (ちょうど, 正に) がついて、「……であると云う正に其の原因のために」, となつてゐるわけです。——【28】 *danach*: これは *das* (それ) という語と *nach* との結合した形。(was と *nach* との結合が *wonach* となるのと同じ關係) ここでは、やはり *suchen* という動詞が *nach* と共に用いられるから、「それを」の代りに *danach* (それを求めて) を用いたわけ。——【29】 *findet sich*: 直譯すると「自分を見出す」であるが、意味は「見つかる」。こういう風に「自分を」という *sich* と結合した形の動詞を再歸動詞と云います。再歸動詞は大概「見つける」が「見つかる」になるように、自動詞に變るものが多い。たとえば *verbreiten* は「ひろげる」, *sich verbreiten* は「ひろがる」; *biegen* は「曲げる」, *sich biegen* は「曲がる」; *schließen* は「閉める」, *sich schließen* は「閉まる」。——【30】 *von selbst*: 「おのずと」, 「自然に」——【31】 *an sie*: *suchen* を *nach* と共に用いるように、*denken* (考える) も *an* と共に用います。(英: *think of*……)——【32】 *heißt*: *heißen* には色々な

だ、今ちょうど探している物だけは絶対に出て来ない。

ことによると、むしろ探さない方が好いのじゃないかしら? パイプパイプと云つて探すもんだから、それで出て来ないんじゃないかしら? むしろしばらく考えないでいた方が、ひよつとひとりとひとりで出て来るのじゃないかしら? 聖

*suche? Vielleicht findet sie sich<sup>29</sup> von selbst<sup>30</sup> wenn ich nicht mehr an<sup>31</sup> sie denke?*

In der Bibel heißt<sup>32</sup> es zwar<sup>33</sup>: Suchet, so werdet ihr finden.<sup>34</sup>  
Das war<sup>35</sup> so in der guten alten Zeit. Heutzutage<sup>36</sup> müßte<sup>37</sup> der<sup>38</sup>  
Spruch so heißen<sup>39</sup>: Suchet, so werdet ihr nicht finden.

ひよつとすると ich 私が mehr もはや an sie 彼女 (パイプ) のことを nicht denke 考えない wenn ならば sie 彼女 (パイプ) は von selbst おのづから findet sich 見つかる (のだろうか?)

In der Bibel 聖書の中には zwar なるほど heißt es (次の如く) 言われている: Suchet 求めよ! so 然らば ihr 汝等は finden 見出す werdet であろう(と)。Das それは in der guten alten Zeit 良き古き時代に於て so 左様で war あつた。Heutzutage 現今では der Spruch 此の金言は so 斯く (次の如く) heißen 云われ müßte ねばなるまい: Suchet 求めよ, so 然らば ihr 汝等は finden 見出す werdet nicht ざるべし。

意味がありますが、ここでは *es heißt* (……と云つてある、……と云う文句がある、……に曰く) という熟語と思つてよろしい。*heißen* には、つまり「……と云われる、……と云われている」という意味もあるわけです。また、『Zigarette の複数 *Zigaretten* と云う』(*Die Mehrzahl von Zigarette heißt Zigaretten*) といつたような時にも用いることは既に御存じでしょう。——【33】 *zwar* : という語は『なるほど云々ではあるが、しかし……』という風に、假に譲歩して或る事實を認めてかかる時の『なるほど』という日本語にあたります。だから、一度この *zwar* を用いると、その次には大抵 *aber* (しかし……) と来るのが普通です。本文の中にはそれは見えていませんが、入れるとすれば *Heutzutage aber* (現今では併し……) と補つて考えてみるとわかりましょう。——【34】 *Suchet, so werdet ihr finden* : これは聖書マタイ傳 (7, 7) の中の有名な文句『求めよ、さらば與えられん、尋ねよ、さらば見出さん、門を叩け、さらば開かれん』(*Bittet, so wird euch gegeben; Suchet, so werdet ihr finden; klopfet an, so wird euch aufgetan*) です。*Suchet* というのは命令形という形で、「汝等」という意味で命ずる時には *-et!* または *-t!* の語尾をつけます。現代文でなら *Sucht!* でいいのですが、聖書では少し古い形が用いてあるので *Suchet!* となつてゐるわけです。——*werdet* は *werden* (……するであろう) という助動詞。——【35】 *war* : 英: *was*。——【36】 *Heutzutage* : 英の *nowadays* (現在では、當今の世では)、分解すると *heute, zu, Tage* の三語から成つてゐます。——【37】 *müßte* : これは *muß* (……せねばならぬ) と大體同じような意味の語ですが、『……せねばなるまい』という風に、やや婉曲に禮便に云う場合には *muß* よりも *müßte* の方を用いた方が適當です。文法的に云うと、

*müßte* という形は *müssen* (……せねばならぬ) という助動詞の「接續法」という形です。——【38】 *der Spruch* : 「此の金言は」ですから *dieser Spruch* と云いそうなところですが定冠詞が用いてあるところに御注意。定冠詞を用いる場合でも最も多いのが、*dieser* と同意の『此の』という用法です。——【39】 *heißen* : 『……という文句である』という時に用いる *heißen* です。こういう場合には他に *lauten* という動詞も用います。

書にはなるほど『尋ねよ、さらば見出さん』と云つてある。大昔はまあ、そうだったのかも知れない。しかし當今の世では、此の文句はむしろ『尋ねよ、さらば見出さざらん』と云つた方が本當じやないだろうか。

## Professor Meier

Hier ist ein Mann. Das<sup>1</sup> ist unser<sup>2</sup> Lehrer. Er lehrt<sup>3</sup> uns<sup>4</sup> Deutsch.

Sein<sup>5</sup> Kopf<sup>6</sup> hat nur hinten Haar.<sup>7</sup> Er heißt<sup>8</sup> Professor Meier.

逐語譯: Hier ここに ein Mann 一人の男が ist います。Das それは unser われわれの Lehrer 先生 ist であります。Er かれは uns 我々に (但し格は四格) Deutsch ドイツ語を lehrt 教えます。Sein かれの Kopf 頭は hinten 後方に nur のみ Haar 髪の毛を hat 持ちます。Er かれは Professor Meier マイエル教授 heißt という名です。

Pr. Meier マイエル教授は sehr 非常に pünktlich (時間が) 正確 ist です。Klinglingling! ガランガランガラン! (と鐘が鳴る) und すると schon もう er かれは ist da 其

處にいます。Darum それ故 wir われわれは ihn かれを „Leiterwagen“ 「消防自動車」と nennen 名づけます。Ihr 諸君は doch もちろん ein Leiterwagen 消防車とは was 何で

註：【1】 Das: 中性冠詞の das ではなく、「それ」(英: *it* または *that*) という代名詞。こんな時には er (英 *he*) というよりは das の方がよろしい。——【2】 unser=our.——【3】 lehrt: 不定形は lehren (*teach*).——【4】 uns=us. (uns は「我々を」という時にも「我々に」という時にも用いるから、形だけ見ると三格か四格かわからないわけですが、ここは實は四格なのです。これは lehren (教える) という動詞の用法からそうなるので、日本語では「かれは私にドイツ語を教える」と云いますが、ドイツ語は妙で「かれは私をドイツ語を教える」というのです。初歩の時にはこんな事を正確におぼえておく必要があります。——【5】 sein=*his*.——【5】 Kopf, m: 「頭」です。pf の發音は p と f との中間を發音するというむづかしい音です。假名ではフとやつておきます。——【5】 Haar, n (髪) 英 *hair*.——【6】 heißt: 不定形 heißen (……と呼ばれる, ……と云う名である)——【7】 pünktlich: 英 *punctual*. 几帳面な、主として時間を厳守することを pünktlich という。——【8】 da=*there*.——【9】 Leiterwagen, m: die Leiter (梯子) と der Wagen (車) との合成語で、すなわち消防自動車の畳み梯子をつけているやつ。あれを延ばすと五階にでも六階にでも届くのです。日本では高層建築が少ないのでまだあまり澤山みかけません。——【10】 wißt: 不定形は wissen (知る) で、此の動詞は人称變化が不規則: ich weiß, du weißt, er weiß, wir wissen, ihr wißt, sie wissen.——【11】 doch: これは「きつと斯う斯うでしようね?」、「もちろん云々でしようね?」というときの「きつと」や「もちろん」にあたる語です。——【12】 auch ist er: 正規の順では Er ist auch です。Auch を前に持つてくると ist と er が逆になります。——【13】 so lang wie: は英の *as long as* にあたりま

意譯: ここに一人の男がいます。それは僕たちの先生です。かれは僕たちにドイツ語を教えます。かれの頭は後方にのみ毛があります。かれはマイエル教授と云います。

マイエル教授は非常に時間が正確です。ガランガランと鐘が鳴るともう來ています、だから僕たちは此の人のことを消防自動車と云つています。諸君は消防自

Professor Meier ist sehr pünktlich.<sup>7</sup> Klinglingling!

——und schon ist er da.<sup>8</sup> Darum nennen wir ihn „Leiterwagen.“<sup>9</sup> Ihr wißt<sup>10</sup> doch,<sup>11</sup> was ein Leiterwagen ist? Auch ist er<sup>12</sup> so lang wie<sup>13</sup> eine mechanische<sup>14</sup> Leiter.

ist あるかを wißt? 知つていでしょうね? Auch また er かれは eine mechanische Leiter 機械仕掛けの梯子 wie のごとく so そんなに lang 長く ist あります。

Ich 私は mein Deutsch 私のドイツ語を ganz 極く fleißig 勤勉



に lerne 學びます。Ich 私 は schon すでに richtig 正しく de-  
klinieren 格變化すること kann できます der Mann, 男が, des  
Mannes, 男の, dem Manne, 男に, den Mann, 男を, と。Prof. M. マ教授が mich 私  
を fragt 試問する wenn ならば ich 私は immer いつも richtig 正しく antworte 答えま

す。分解は返語譯で！例：Ich bin so alt wie er (私は彼と同年配です)；——【14】 mecha-  
nisch：英の mechanical で、「機械の」「機械仕掛けの」という形容詞。うしろに -e とい  
う語尾がついているのは、eine の次では形容詞に必ず -e をつけることになっているからで  
す。mechanische Leiter (機械仕掛けの梯子)。——【15】 ganz：「全く」という意の語で  
すが、こういう時には sehr を使うのと同じ。——【16】 deklinieren：「格變化する」とい  
う動詞の不定形です。同じく變化するのでも、動詞の場合、すなわち「人稱變化する」の方  
はちがつた語を使つて konjugieren [コンユギーレン] するといひます。——【17】 antworte：  
「答える」という antworten の發音に注意！すなわちアクセントは wor の方ではなく、  
ant の方にあります。「答」という名詞は die Antwort [アントヴォルト]。——【18】 wenn：  
英の when. (wenn は英の when にも if にもあたります)——【19】 mich：英 me. 此  
の mich fragt (私を問う) という使い方にも注意して下さい。これも前の lehren と同じく  
「或人に問う」と云わないで、「或人を問う」というのがドイツ語の習慣です。(mich, 私  
を, と mir, 私に, とを區別しておぼえること。——【20】 dann：英 then.——【21】 Meiers：  
此の -s の語尾は英と同じで、「... の」の意。——【22】 Kameraden：これは複數形で、單  
數は der Kamerad [カメラート] 即ち英の comrade [カムレイドまたはカムリッド] です。  
同輩、仲間、の意。Meine は mein の複數です。英語の my は、後に單數がきても複數が  
來ても my ですが、ドイツ語はそうは行きません。——【23】 meinerseits (私の側では)：  
これは ich meinerseits とつづけて、これを「私は私で」の意とおぼえるのが實用的です。  
(muß という助動詞の位置が ich のすぐ次に來ていないのでも ich meinerseits が密接に結

動車というのを御存じでしょう？ それに此の人は消防自動車の救命梯子のよう  
に背が高いのです。

僕は一生懸命にドイツ語を勉強します。僕は、デルマン、デスマンネス、デム  
マンネ、デンマンといつたように、もう間違いなく格變化ができるのです。マ教  
授が僕に質問をしても僕はいつも正しい答をします。すると教授は「非常によろ

Ich lerne mein Deutsch ganz<sup>15</sup> fleißig. Ich kann schon richtig  
deklinieren:<sup>16</sup> der Mann, des Mannes, dem Manne, den Mann. Ich  
antworte<sup>17</sup> immer richtig, wenn<sup>18</sup> Professor Meier mich<sup>19</sup> fragt. Er  
sagt dann:<sup>20</sup> „Sehr gut!“ und lobt mich. Ich bin Professor Meiers<sup>21</sup>  
Liebling.

Meine Kameraden<sup>22</sup> beneiden mich, weil ich Professor Meiers  
す。dann すると er かれは „Sehr gut!“ 非常によろしい！ sagt と云つて und そして  
mich 私を lobt 褒めます。Ich 私は Pr. Meiers マ教授の Liebling 寵兒 bin であります。  
ich 私が Pr. Meiers Liebling マ教授の寵兒 bin である weil から Meine Kameraden

私の同輩たちは mich 私を beneiden 羨みます。Aber しかし ich 私は meinerseits 私の側として daß sie nicht Pr. Meiers Lieblinge sind はかれらがマ教授の寵児でないということ（に就て）sie かれらを beneiden 羨ま muß ざるを得ません。Ihr 諸氏は warum 何故と fragt? お問い合わせですか? Nun, さて das それは eine 一つの delikate デリケートな Frage 問題 ist であります。

びついていることがわかりましょう。——【24】 muß: 英 must.——【25】 sie: sie には色々ありますが、これは them にあたる sie.——【26】 daß: 英 that (.....ということ)を。——【27】 nicht: 字と字との間があいています。これは特に強調するためです。これを隔字 (Sperrschrift) といいます。特に強調するためには、日本語では點を打つたり「」でかこつたりします、英語ではイタリックといつて斜體活字 (not など) を用い、ドイツ語では此の隔字を用いるのが普通なのです。——【28】 Lieblinge: -e という複数語尾に注目。——【29】 sind: ist でないのは、この主語は sie (かれら) だからです。またこの動詞がいちばん最後に來ていることに注目して下さい。ドイツ語では、daß..... とか weil とかではじまつている文は、動詞を日本語と同じようにいちばん最後にもつてくるのです。——【30】 Nun は英の well に相當する間投詞です。なにかむつかしい問題に面して、急になんと云つていいかわからない時には、日本人なら「ええと.....」とか「そうですねえ.....」とか云いますが、英米人は well....., ドイツ人は nun..... というのです。(nun は英の noon ではありません、now に當ることばです)——【31】 delikate: 元の形は delikat [デリカート] で、-e は女性語尾。英の delicate (デリケート) です。日本語ではデリケートなどと普通云つています。「一寸一口では云われない」、「微妙な」、つまり何でも荒つぽく取り扱われてはこまる、よほど慎重にソーツと取扱わないと困る事柄のことを「デリケート」といいます。——【32】 Seht: sehen (見る) の命令法 (複数) です。Seht auf で英の look at にあたります。英語でも、單に look this book! といえよさそうな時に at をつけて look at this book! といいますが、ドイツ語も同じです。auf は文字としては英語の upon にあたります。

しい!」と云つて褒めます。僕はマ教授のお気に入りなんです。

僕の同輩たちは、僕がマ教授のお気に入りだということで、羨ましがります。けれども、僕にしてみると、かれらがマ教授のお気に入りで「ない」ということが羨ましくてたまらないのです。何故ですつて? そうですね、それはちよつとデリケートな問題なんですがね。

Liebling bin. Aber ich meinerseits<sup>33</sup> muß<sup>34</sup> sie<sup>35</sup> beneiden, daß<sup>36</sup> sie nicht<sup>37</sup> Professor Meiers Lieblinge<sup>38</sup> sind.<sup>39</sup> Ihr fragt, warum? Nun,<sup>40</sup> das ist eine delikate<sup>41</sup> Frage.

Seht<sup>42</sup> doch<sup>43</sup> auf meinen<sup>44</sup> Nebenmann! Er nickt<sup>45</sup> verständig.<sup>46</sup> Er nickt in einem fort.<sup>47</sup> Nickt er aber zu dem,<sup>48</sup> was der Professor sagt? Mit nichten!<sup>49</sup>

doch まあ auf meinen Nebenmann 私の隣の男を Seht だらんなさい! Er かれは verständig 理解的に nickt うなづきます。Er かれは in einem fort たてつづけに nickt

うなづきます。aber けれども er かれは der Professor 教授が sagt 云う was ところの dem そのこと zu に対して Nickt うなづくのでしょうか? Mit nichten! どう致しまして!

Ganz hinten ずつとうしろの方では einer 誰か一人の者が die Aussprache des „ch“ ツェーハーの發音を übt 練習しています。Er macht ch! ch! ch! かれは ch! ch! ch! とやっています。er かれは etwa ひよつと des Professors 教授の die Aussprache 發音を nachahmen 真似ようと Will しているのでしょうか? er かれは etwa ひよつと an

——【33】 doch は、命令法を強めるために入れる助詞にすぎません。ドイツ語では命令文には、弱い時には mal (ちよつと) とか nur (まあ) とかを入れますが、強いときには doch を入れるのです。Komm mal! (ちよつとおいで!) Komm nur! (まあいらつしやい) Komm doch! (來給えよ! 來給えってば!)——【34】 meinen: mein (my) の男性四格形。——【35】 nicken: 英の nod (うなづく)——【36】 verständig: 「理解的に」(すなわち、いかにも萬事承知したといつたように、です。正にその通り、よくわかりました、なるほど御もつとも、といつたようにうなづいているわけです)——【37】 in einem fort: これは熟語ですから、三語いつしよにして「たてつづけに」という意味だと覚えること。——【38】 zu dem, was...: この dem は das (そのこと) という、すなわち das ist (that is) の das に対する三格の形です。(従つて冠詞ではありません) なぜ三格形を用いるかという、その前の zu という前置詞 (英の to または at) が、三格支配の前置詞だからです。das, was..... は「.....するところのその事」で、英語の that which..... です。このへんは逐語譯の所を見てよく研究すること。——【39】 Mit nichten! これは「決して!」「どう仕りまして!」という熟語ですから、このままの形をそういうものとしておぼえること。——【40】 Ganz hinten: 文字通りに譯すれば「ごくうしろに」、意譯すれば「ずつとうしろの方で」——【41】 übt: [ユーブト] と發音します。なぜユーを長く發音するかというと、それは不定形が üben 「ユーベン」(練習する) だからです。——【42】 einer: 「ひとりの人間」、「ある人」、「誰かが」で、英の someone にあたります。不定冠詞にあらず。——【43】 des „ch“: ch といつたような、その時々勝手なものを名詞として用いる時にはすべて

ちよつと僕の横にいる男をごらんなさい。かれは、えらいわかつたように、うなづいています。たてつづけにコクリコクリとうなづいています。しかしそれはたしてマ教授の云っていることに對してうなづいているのでしょうか! どう致しまして!

ずつとうしろの方で、誰かしきりに ch の發音を練習しています。フー、フー、

Ganz hinten<sup>40</sup> übt<sup>41</sup> einer<sup>42</sup> die Aussprache des „ch.“<sup>43</sup> Er macht<sup>44</sup> ch! ch! ch! Will er etwa<sup>45</sup> die Aussprache des Professors nachahmen?<sup>46</sup> Hat er etwa ein so großes<sup>47</sup> Interesse an<sup>48</sup> der deutschen Aussprache?<sup>49</sup> Mit nichten!

Am Ende<sup>50</sup> schnarcht er ganz laut.<sup>51</sup> Mir<sup>52</sup> steht das Herz still.<sup>53</sup>

Die ganze Klasse lacht. Der Peter<sup>54</sup> wiehert wie ein Pferd. Auch der deutschen Aussprache ドイツ語の發音について ein so großes Interesse 一つの左

様に大なる關心を Hat 持つているのでしょうか? Mit nichten! 減相もない!

Am Ende 最後には er かれは ganz laut 極く高聲に schnarcht 鼾をかきます。Mir 私には das Herz 心臓が steht still 停ります。Die ganze Klasse 全クラスが lacht 笑います。Der Peter ベーテルの奴と來たら wie ein Pferd まるで馬のように wiehert いななきます。Auch Pr. Meier マ教授も lacht mit いつしよに笑います。Er かれは mein Witz おれの洒落が gut 良 war かつた (のだと) denkt 考えます。

Ach ああ der süße Schlaf 甘き眠り! Er (=Schlaf) それは aber しかし wenn Pr.

中性として扱います。従つて一格なら das „ch” となるところです。こんなものは、二格では des chs と s をつけないで、大抵無語尾のままにしておくのが習慣です。——【44】macht: 英の make に相當する machen ですが、ここは別に「作る」などという意味はなく、なんでも「……という聲を發する」ということを macht というのです。Die Katze macht miau! (猫はニャーゴという)——【45】etwa: 「ひよつと ……でもあろうか」というときに入れる助詞です。etwa ich といえ「私でも」、etwa mir といえ「私にでも」となります。つまり日本語の「でも」にあたる軽い語です。(etwas, 英 something と混同しないこと)——【46】nachahmen (真似る), ナハアーメンに非ず、ナーハアーメン。nach は大抵長く發音します。(ただ Nachbar, ナハバル, 隣人, だけは例外)——【47】großes: groß (大きな) に -es という中性語尾がついているのは、次の Interesse (關心, 興味) という名詞が中性だからです。——【48】Interesse an...: これも「……に關する關心」とおぼえること。an は前置詞ですが、前置詞の用法はこうした具體例をよく覚えるのがいちばん早道です。——【49】der deutschen Aussprache は三格(女性)。——【50】Am Ende (最後に): das Ende は「終」で、それに an がつくと am Ende となります。これも熟語として分解しないでおぼえること。——【51】laut: 英の loud です。ここでは loudly にあたります。——英語は形容詞に -ly をつけて副詞を造りますが、ドイツ語は形容詞に何の語尾もつけないで、そのままの形が副詞としても用いられます。——【52】Mir steht das Herz still (私には心臓が停止する)とは Mein Herz steht still (私の心臓が停止する)というのと同じことです。——【53】still: 語としては「しずかに」の意(英の「まだ」という still

フーとやつています。マ教授の發音をその通り真似しようと云うのでしょうか? ドイツ語の發音に對してそんなに興味があるのでしょうか? 飛んでもないこと! お仕舞にはとうとう大きな聲で鼾をかきました。僕はドキッとして心臓がとまるかと思ひました。全クラスがドッと笑います。ベーテルの奴, まるで馬の嘶くような聲を發して笑うじやありませんか。マ教授もいつしよになつて笑いました。自分の云つた駄洒落が上出来だつたと思つたんでしよう。

Professor Meier lacht mit.<sup>55</sup> Er denkt: „Mein Witz war<sup>56</sup> gut!“

Ach, der süße<sup>57</sup> Schlaf! Er ist aber ganz besonders<sup>58</sup> süß, wenn Professor Meier spricht.<sup>59</sup> Und es ist so angenehm, mit<sup>60</sup> dem süßen Schlaf zu kämpfen.<sup>61</sup> Angenehmer<sup>62</sup> noch,<sup>63</sup> ihm zu erliegen!<sup>64</sup>

Aber ich darf<sup>65</sup> es nicht, weil ich Professor Meiers Lieblingsschüler bin. Ich muß meine Kameraden beneiden, daß sie es nicht sind.<sup>66</sup>

M. spricht マ教授が語りつつある時に ganz besonders 全く特に süß 甘く ist あります。Undそして mit dem süßen Schlaf 甘き眠りと zu kämpfen 闘うということは es それは so とても angenehm 快く ist あります。ihm (=dem süßen Schlaf) それに zu erliegen 打ち負けることは noch 更に一層 angenehmer より快くあります。

Aber ところが ich わたしは Prof. Meiers Lieblingsschüler マ教授の寵児 bin である weil ために es それを darf nicht (しては) なりません。Ich 私は sie かれらが es それで nicht sind ない daß ということ (に就て) meine Kameraden 私の同輩たちを muß beneiden 羨まざるをえません。

ではありません) ですが, steht still (しずかに立つ) の二語で「停止する」という熟語です。不定形は stillstehen と一語をなします。——【54】 Der Peter: Peter は名前です。英辭では人名に定冠詞はつけませんが, ドイツ語では「例の誰それ」とか, 「誰そのの奴」とか, 少しなれなれしく人名を引用するときには定冠詞をつけます。——【55】 mit (いつしよに) は, 普通は前置詞ですが, ここはそうではなく, 副詞のようなものです。lacht mit で「いつしよに笑う」です。不定形は mitlachen (共笑いする)——【56】 war: 英 was. (ist に對する過去形)——【57】 süß: 英 sweet.——【58】 besonders: 特に, 殊に, 特別に。——【59】 spricht: 不定形は sprechen. (これは er spricht とはならず er spricht となります)——【60】 mit: 英 with. これは前置詞です。——【61】 zu kämpfen: 「闘うということ」(「……ということ」というときには動詞の不定形に zu をつけることがあります。英語でも to fight です。ただし文章中にこれを置く位置が, 英語ではずつと前になり, ドイツ語はいちばんあとというわけです。)——【62】 angenehmer: これは angenehm に -er という比較級語尾 (より云々) がついた形です。——【63】 noch (なお, 更に, 一層) は angenehmer の前に置いても後に置いても同じことです。——【64】 erliegen: 「敗ける」という動詞。ihm erliegen で「かれに負ける」です。——【65】 darf は不定形 dürfen (英 may) で, 云々して宜しい, という助動詞。ただし此處では動詞の方は省いてあります。入れるとすれば Ich darf es nicht tun (I may not do it すなわち I must not do it の意) です。——【66】 daß sie es nicht sind (かれらがそれでないことを): 日本語でも英語でも「そう」でないことを, といいます, ドイツ語はこういう時には es (それ, it) を使います。

いや, 眠くなるとたまらなく好い氣持なものです。マ教授の講義を聞きながら眠ると殊に好い氣持です。その好い氣持の眠氣と闘うのが, これまた何とも云えません。闘つて利あらざれば尙さら好い氣持になつてしまうのです!

ところが, 僕はマ教授のお氣に入りであるために, それができないんです。だから僕は, 僕の同輩たちがマ教授のお氣に入りでないことを羨ましく思うのです。

## *Es ist ein Gott*

Paul ist ein armer<sup>1</sup> Tagelöhner.<sup>2</sup> Seit<sup>3</sup> ein paar<sup>4</sup> Wochen<sup>5</sup> ist er krank. Er kann nicht arbeiten.<sup>6</sup> Er kann nicht einmal<sup>7</sup> zum<sup>8</sup> Arzte<sup>9</sup> gehen. Dazu<sup>10</sup> braucht man Geld. Und Geld ist ohne<sup>11</sup> Arbeit nicht zu<sup>12</sup> haben.

Auch<sup>13</sup> seine Frau ist in Verzweiflung.<sup>14</sup> Sie weint den ganzen Tag.<sup>15</sup> Sie betet nicht mehr<sup>16</sup> zu Gott.<sup>17</sup> Sie glaubt nicht mehr an<sup>18</sup>

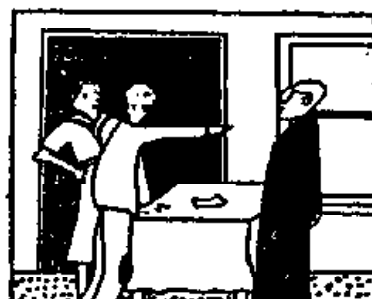
經語譯： Paulバオルは ein armer Tagelöhner 一人の貧しい日傭人足 ist である。Seit ein paar Wochen 數週以來 er かれは krank 病氣 ist である。Er かれは arbeiten 働くことが kann でき nicht ない。Er かれは zum Arzte 醫者の所へ gehen 行くこと einmalすら kann でき nicht ない。Dazu そのためには man 人は Geld 金を braucht 必要とする。Und ところが Geld 金は ohne Arbeit 労働なくしては zu haben 持つべく ist nicht ない。

seine Frau かれの妻 Auch も亦 in Verzweiflung 絶望に於て ist ある。Sie 彼女は den ganzen Tag 全一日を weint 泣いている。Sie 彼女は mehr もはや zu Gott 神にむかつて betet 祈ら nicht ない。Sie 彼女は mehr もはや an seine Existenz かれ(=神)の存在を glaubt 信じ nicht ない。Sie sagt 彼女は云う： Es ist kein Gott 神は存在し

註：【1】 arm：英の poor と同じく、「貧乏な」の意と「哀れな」の意とがある。ここは前者。——【2】 Tagelöhner：Tag (日), Lohn(賃銀)。——【3】 seit：は前置詞で、この前置詞の次におく名詞は必ず三格形。これを三格支配の前置詞という。意味は英の since (……以來, ……このかた)——【4】 ein paar：は「二三の」、「いくらかの」という熟語。——【5】 Wochen：die Woche (週)の複數形で、前に seit があるから文法上では三格というわけ。——【6】 arbeiten：アクセントに注意！アルバイテン！(アルバイテンではない)「労働」という名詞も die Arbeit [アルバイト] です。ちかごろいうアルバイトは、學生の金儲け仕事のことですが、ドイツ語では單に「労働」、「仕事」の意味しかありません。——【7】 nicht einmal は熟語で、『……すら……しない』の意。例：Er hat nicht einmal Geld (あいつはお金すら持たぬ), Er ist nicht einmal krank (あいつは病氣ですらないんだ), Ich kann nicht einmal Englisch (僕は英語すらできないのです)。——【8】 zum は zu と dem とがいつしよになつた形。(in dem=im, an dem=am, von dem=vom, zu der=zur, in das=ins, an das=ans)——【9】 Arzt, m. (醫者)發音に注意！A は長發ゆえアルツトではなくアールツト。——e がついて Arzte となつてゐるのは三格だから。(もちろん e はなくてもいいことになつてゐます)——【10】 dazu：(そのために、そのためには)同じようなものの例：davon (それについて、その、それから), damit (それをもつて),

意譯：バオルは貧しい日やとい人足です。數週前からかれは病氣をしています。かれは働くことができません。醫者の所へ行くことすらできません。醫者の所へ行くには金が要ります。ところが金というやつは働かないと貰入らないのです。

かれの妻君も困つてゐます。一日泣き通しです。彼女はもうお祈りなんかしません。もう神の存在なんか信じなくなつたのです。彼女は『神なんてありやしな



seine Existenz.<sup>19</sup> Sie sagt: „Es ist<sup>20</sup> kein Gott.“<sup>21</sup>

„Doch!<sup>22</sup>“ sagt Paul, „Es ist ein Gott. Unser Pfarrer<sup>23</sup> ist ein gelehrter<sup>24</sup> Mann, er kann<sup>25</sup> nicht lügen.“



„Wenn es einen Gott gibt“,<sup>28</sup> eifert<sup>27</sup> sie. „warum

hilft<sup>26</sup> er uns<sup>25</sup> nicht in unserer<sup>20</sup> Not? Beten wir nicht Tag und  
 ない。[と]。

„Doch!“ [存在] する [と] sagt Paul バオルは云う。Es ist ein Gott 神は存在する。  
 Unser Pfarrer 我々の牧師は ein gelehrter Mann 一人の學識ある人で ist ある。Er か  
 れは lügen 嘘を吐く kann nicht 答がない。[と]。

„Wenn もし es それが einen Gott 一人の神を gibt,“ 與える [ならば], sie [と] 彼女  
 は eifert むきになる, „warum 何が故に er かれは uns 我々に in unserer Not われわ  
 れの困窮に於て hilft 助け nicht ないのか? wir 我々は Tag und Nacht 日も夜も zu  
 ihm かれにむかつて beten 祈つている [ではないか]? Er かれは allmächtig 全能で ist  
 あつて und そして [しかも] uns 我々に helfen 助けることが kann でき nicht ない [の  
 か]? das それは daß es keinen Gott gibt それが何等の神をも與えないという事の Be-

darin (その中に), darauf その上に, darunter (その下に) dazwischen (そのあいだに。)——  
 —[11] ohne: 英の without. (ohne Arbeit, 勞働なしには, 働かねば,)——[12] ist  
 nicht zu haben: 「持つべくない」というのは, 手に通入らない, ということ。haben は  
 不定形です。haben は「持つ」ですが, 詳しくいうと「手に入れる」ということを haben  
 というのです。——[13] auch: 「も」, 「も亦」(即ち英の too)——Auch seine Frau=His  
 wife, too, ——[14] Verzweiflung, f. =絶望 (英: despair) in Verzweiflung は英 in  
 despair と同じく「絶望の状態に」(ある, 陥入る, など)という熟語。——[15] den gan-

zen Tag: 「全一日を」即ち「朝から晩まで」。——[16] nicht mehr: 英: no more, no  
 longer, (または not.....any more)——これは「もはや.....せぬ」という熟語としておぼえ  
 ること。——[17] zu Gott: 冠詞をつけて zum Gott とは云わない。キリスト教の神を指  
 す Gott には冠詞をつけないのがヨーロッパ各國語の習慣です。特に冠詞をつけるときには  
 何か別に意味があります。たとえば Es ist ein Gott (神さま「というもの」がある) など。  
 ——[18] an という前置詞がついているのは glauben (信ずる) という動詞の使い方から  
 来ています。「神を信ずる」は an Gott glauben というのです。——[19] die Existenz は  
 「存在」。英: existence. ——[20-21] Es ist kein Gott=There is no God. (ここで特に  
 御注意ねがいたいのは, 「存在する」という英語の There is, There are をドイツ語では Es

いわよ』と申します。

『あるさ!』とバオルは云います, 『神というものはある。おれたちの牧師さま  
 は學問のあるお方だ。あの方が嘘をおつしやるわけがない』。

『神さまというものがあるなら,』彼女はむきになりました, 『わたしたちがこ  
 んなに困つているときに, どうして助けて下さらないの? わたしたちはこれで  
 明けても暮れても神さまにお祈りのし通しでしょう? 全能だというのに, いつ

Nacht zu ihm? Er ist allmächtig<sup>31</sup> und<sup>32</sup> kann uns nicht helfen? Ist  
 das nicht Beweis genug,<sup>33</sup> daß es keinen Gott gibt?“

Paul weiß<sup>34</sup> nicht mehr, was er dazu sagen soll.<sup>35</sup> Hat seine Frau

etwa<sup>36</sup> recht<sup>37</sup>? Nein, das kann nicht sein.<sup>38</sup> Aber was<sup>39</sup> sie sagt, hat Hand und Fuß.<sup>40</sup> Was soll er davon halten?<sup>41</sup>

Er geht schließlich<sup>42</sup> mit seiner Frau zum Pfarrer und klagt<sup>43</sup> ihm

---

weis genug 充分の證明 ist nicht ではないか?

Paul パウルは er かれが dazu それに對して was 何を sagen 云う soll べきである [かを] mehr もはや weiß 知ら nicht ない。etwa ひよつと seine Frau かれの妻が recht 理を hat 持つ [のでもあろうか]? Nein, 否, das そんなことは sein あり kann 得 nicht ない。Aber しかし sie 彼女が sagt 云う was ところの事は Hand 手 und と Fuß 足を hat 持つている。Was 何を er かれは davon これについて halten 考える soll べき[か]? (halten=denken)

Er かれは schließlich 結局 mit seiner Frau かれの妻と共に zum Pfarrer 牧師のところへ geht 行く und そして ihm かれに (=牧師に) seine Not かれの苦境を klagt 嘆く。„Ich わたしは wissen 知ら muß ねばなりません er [と] かれは sagt 云う。„es so

---

ist, Es sind ということもあるという點です。英の *There is God* は「神というものが世にはある」で、別に其處に神がいるとか其處は神であるとかいうのでありません。ドイツ語の *Es ist ein Gott* (此のテキストの標題) も、うつつかりすると「それは神である」などと読み誤りそうです。とにかく英語の或種の *there* は、ドイツ語では *es* となることに御注目下さい。*There came a storm* (嵐がやつてきた) は、文字通り *Da kam ein Sturm* とも云いますが、また *Es kam ein Sturm* ともいうのです。(此の、英語の *there* にあたる *es* を、文法では「非人稱主語の *es*」といいます)——【22】 *doch!* 日本語では肯定するときにも「いや」を使つて、「いや、ある」、「いや、行く」、「いや、わかる」などと云いますが、その「いや」がドイツ語では *doch* です。(否定の方のいやは、もちろん *nein* です:「いや、私は行かぬ」は *Nein, ich gehe nicht*)——例:「いや、神はある!」=*Doch, es ist ein Gott!* 「いや、私は働く!」=*Doch, ich arbeite!* 「いや、おれはお祈りしよう」=*Doch! ich will beten!* —— こういう *doch* は、副詞として文の中へ入れると「やつぱり」と譯することが出来ます: *Es ist doch ein Gott* (神はやつぱり存在する); *Ich arbeite doch* (おれはやつぱり働くぞ.); *Ich will doch beten!* (わたしはやはりお祈りをするとしよう。)—【23】 *Pfarrer, m.* (牧師) は *Pastor* (パストル) ともいう。——【24】 *gelehrt: lehren* (教える) という動詞の過去分詞も *gelehrt* (教えられた) ですが、此處の *gelehrt* はそれとは別

---

こう助けるだけの腕がないじゃありませんか。これが神さまなんてものは無いと云う何よりの證據でしょう?』

これにはパウルもグウの音も出なかつた。すると彼女のいうことが本當かしら? いや、まさかそんなことのある筈がない。しかし、それにしても云うことが立派に筋路が通つている。こりやあいつたいどう考えたらいいかしら?

かれは、とどのつまり、妻君をつれて牧師さんのところへでかけ、自分たちの

seine Not. „Ich muß wissen,“ sagt er, „ob“ es wirklich Gott gibt oder nicht. Gibt<sup>44</sup> es Gott, dann gut. Gibt es keinen,<sup>45</sup> dann will ich

stehlen! Sagen Sie<sup>4</sup> uns also<sup>5</sup> klipp und klar<sup>6</sup>: Gibt es einen Gott oder nicht?<sup>7</sup>“

„Ja, antworten Sie<sup>8</sup> uns nur ganz kurz, mit Ja oder Nein,“ schreit seine Frau, „Gibt es einen Gott oder nicht?“

それが wirklich 本當に Gott 神を gibt 與える [か] oder それとも nicht [與え] ない ob か [ということ]。es それが Gott 神を gibt 與えるか? (與えるならば、と同じ) dann 然らば gut よろしい。es それが keinen 何等の [神] をも Gibt 與え [ない] か? (與えないとすれば、と同じ) dann 然らば ich 私は stehlen 盗もうと will おもう。also では uns 我々に klipp und klar はつきりと Sagen Sie 云つてください: es それが einen Gott 一人の神を gibt 與える [か] oder それとも nicht [與え] ない [か]?

Ja, そうです。uns 我々に nur ただ ganz 極く kurz 短かく, Ja 然り oder と Nein 否 mit をもつて antworten Sie 答えてください: seine Frau [と] かれの妻は schreit 叫ぶ。es それが einen Gott 一人の神を gibt 與える [か] oder それとも nicht [與え] ない [か]?

の「學問のある」、「博識な」という形容詞です。——【25】 kann: 「喰を吐くことができない」ではなく、「喰を吐くはずがない」の意。können (できる) という助動詞はそういう用法があるのです。「そんなことが可能だ」、「不可能だ」という時にも使うのです。——【26】 Wenn es einen Gott gibt は Wenn ein Gott da ist (もし神があるとすれば) というに同じ。此の「それが云々を與える」というドイツ語特有の云い廻しに注意しましょう。Es gibt と、名詞の四格を用います。例: Es gibt keine Arbeit (仕事が無い); Es gibt Geld (金がある), Gibt es einen Streik? (争議があるのですか?)——【27】 eifern: 「やつきになる」、「やいやい云う」、「がみがみいう」という動詞。——【28】 hilft の不定形は helfen. (助ける) (三人稱單は er hilft でなく er hilft となるとところに注意。つまり geben, 與える, が es gibt と變化するのと同じ型に属します。こんな動詞がドイツ語には相當あります。二人稱單も hilfst や gibst となり, ich, wir, ihr, sie のところは e です。)——【29】 uns: これは三格の uns です。helfen (助ける) の用法は「或人を助ける」ではなく、「或人に助ける」だからです。こんな所が日本語とはだいぶちがつています。——【30】 unser-er: 英 our にあたる部分は unser までで、そのあとの -er は、女性三格の語尾です。(次の Not, 困窮, は女性)——【31】 allmächtig=英 almighty. 英獨の似ている點は兩方とも二級目にアクセントが来る點。ちがうのは英語では all (すべて) が al- となる點です。(英の wel-

苦境を訴えました。「實はですね、」と彼は云いました、『神というものは本當にあるのだかどうか、それを伺いたいんですよ。ありあやうがす。けれども、もし無いというのなら、いつそう泥坊でも働こうかと思うんです。だから一つ、ハッキリしたところを伺わして下さい、神さまというものは有るんですかそれとも無いんですか。』

『えい、そうです』と彼女は大きな聲でどなりました、『有るなら有る、無いな

Da<sup>51</sup> blickt<sup>52</sup> der gute Mann zum Himmel hinauf,<sup>53</sup> schlägt<sup>54</sup> die Hände<sup>55</sup> vor<sup>56</sup> der Brust<sup>57</sup> zusammen<sup>58</sup> und sagt:

„Ja freilich<sup>59</sup> gibt es einen Gott! Und hier auf dem Tische seht ihr sogar<sup>60</sup> den Beweis dazu.“<sup>61</sup> Der fromme Mann deutet<sup>62</sup> auf<sup>63</sup> eine Banknote,<sup>64</sup> die<sup>65</sup> vor ihnen auf dem Tische liegt.

„Wie meinen<sup>66</sup> Sie das, Ehrwürden<sup>67</sup>?“

Da すると der gute Mann その良き人は zum Himmel 天に向つて blickt hinauf 見上げ (眼をあげ) die Hände 手を vor der Brust 胸の前で schlägt zusammen 打ちあわせ und そして sagt 云う:

Ja freilich 然り勿論 es それは einen Gott 一人の神を gibt 與える。Und そして [しかも] hier 此處に auf dem Tische 机の上に ihr あなたがたは dazu その事への den Beweis 證明を sogar すら seht ごらんになる。Der fromme Mann その敬虔な人は vor ihnen かれらの前に auf dem Tische 机の上に liegt 横たわる die ところの auf eine Banknote 一枚の紙幣を deutet 指さす。

Wie 如何に Sie あなたは das それを meinen 意味する [か], Ehrwürden 先生よ?

Ich 私は ein armer 一人の貧しい Pfarrer 牧師 bin である und そして den Leuten

come もドイツ語では willkommen, これもドイツ語の方は l を省きません)——【32】 und には「しかも」、「それに」、「そのくせ」(und doch, 英: and yet) という用法あり。——【33】 Beweis genug: Beweis が「證明」で genug が「充分」ですが、「充分な證明」を Beweis genug というのです。逆のようですが、これが普通なのです。英の enough と同様, genug [ゲヌーク] はよくうしろに来るということを記憶して下さい。たとえば「われわれは充分な時間をもっている」は Wir haben genug Zeit でも Wir haben Zeit genug でもよろしい (英も We have enough time; We have time enough)——【34】 weiß (知っている) の不定形は wissen.——【35】 soll: 英 shall (云々す可きである, などという「可き」です)——【36】 etwa: 「ひよつと (……でもあろうか)」——【37】 recht: これは recht haben (英 be right) という熟語動詞で、『云い分が正しい』、『理がある』、『正しい』、『もつともである』の意。たとえば、會話で「それはごもつともです」、「あなたの仰せの通りです」という時に、英語では You are right といいますが、ドイツ語では You have right すなわち Sie haben recht というのです。(此の recht は「正しき」という recht ではなくて、「正しさ」即ち大文字の Recht だつたのが、いつの間にか小文字になつたものです)——【38】 Das kann nicht sein (それは有り得べからざることだ) は成句としてよく出てきますから此のままをおぼえること, sein は英の his ではなく be にあたる方の sein です。sein には

らない, と, ごく簡単なところをおねがいします。神様はいつたい有るのですか無いのですか。』

すると牧師さんは、まず眼を天に向け、胸の前で両手をパチと打ち合せたのち、かく申しました:

『いや、たしかに神さまというかたはいらつしやる! しかも、いらつしやるという現の證據がチャンと此の机の上にあるじやないか』こう云つて牧師さまは兩

„Ich bin ein armer Pfarrer und helfe den Leuten<sup>68</sup> gewöhnlich nur mit Worten.“<sup>69</sup> Aber diesmal kann ich euch mit Geld helfen. Denn

heute habe ich zufällig Geld. Gott hat es mir gegeben,<sup>70</sup> damit<sup>71</sup> ich euch helfen kann. Es ist mein Extra-Verdienst<sup>72</sup> und ich kann ihn gut<sup>73</sup> entbehren.<sup>74</sup> Nun,<sup>75</sup> gibt es einen Gott oder nicht?<sup>76</sup>

Das Ehepaar ist ganz verwirrt. Sie stammeln einige<sup>78</sup> unverständ-

人々に gewöhnlich 普通は nur ただ mit Worten 言葉をもつて helfe 助ける。aber しかし diesmal このたびは ich 私は euch あなたがたに mit Geld お金をもつて helfen 助けることが kann できる。Denn 何故というに heute 今日 ich 私は zufällig 偶然 Geld お金を habe 持っている。ich 私が euch あなたがたに helfen 助ける kann ことができる damit ように [と] Gott 神が es それを mir 私に gegeben (gehen の過去分詞) 與え hat た。Es それは mein わたしの Extra-Verdienst 特別所得 ist である。und そして ich 私は ihn それを gut よく (大丈夫) entbehren 缺く (無しにすませる) ことができる。Nun さて (どうだ), es それが einen Gott 一人の神を gibt 與える [か] oder それとも nicht [與え] ない [か]?

Das Ehepaar その夫婦は ganz すつかり verwirrt 混亂して ist いる。Sie かれらは

二つちがつた場合があるから注意。——[39] was sie sagt=*what she says*. ——[40] hat Hand und Fuß (手と足とを持っている) というのは「辻褄が合っている」という熟語。つまり手足を具えている、間然するところなしということです。——[41] was soll er davon halten? (彼はそれに就て何を考えるべきか) とは、「さて之れを何と考えたらいいか」、「こいつは一寸問題だ」ということ。——[42] schließlich: 「けつきよく」、「あげくのはては」、「とどのつまりは」、「とうとう」(am Ende ともいう) ——[43] klagt: 不定形は klagen (うつたえる、なげく、こぼす) ——[44] ob は英の *whether* で、「……かどうか」、「はたして……なりや」という文に用いる接續詞です (語源は英の *if* と同一物、現に *if* もそういう時に使います)。——[45] Gibt es Gott: (もし神ありとせば): これは Gibt es Gott? という疑問文から来ています。ドイツ語では此のように質問の形を wenn (もしも……) と同意に使うことが非常に多いのです。Wenn es Gott gibt というのと全然同じです。邦語でも、「神ありとせんか、然らば……」などと現に「か」という質問形を用いることがあります。——[46] Gibt es keinen: 次に Gott を省いたもの。——[47] Sagen Sie という形には「云いますか?」という場合と、「云え!」という場合とがあります。このは後者。(Gehen Sie? あなたは行きますか? Gehen Sie! 行きなさい!) ——[48] also は英の *also* (オールソウ) と形は同じですが意味がちがいますから御注意。「では行つてまいります!

人の前の机の上においてあつた一枚の紙幣を指しました。

『それは先生いつだいどういう意味ですか?』

『わたしは御存じの通り貧乏牧師で、普通はただ口だけ動かして人助けをしているが、こんどだけは金を出しておまえさんがたを助けてあげることができるんだ、というのは、今日に限つて不思議にお金が入ってきたんだ。これはおそらく、おまえさんがたを助けてあげろと云つて神さまが下さつたものに相違ない。

liche Dankesworte und tragen<sup>77</sup> die Banknote nach Hause, den sicht-

und greifbaren<sup>78</sup> Beweis von der Existenz Gottes.

Am andern<sup>79</sup> Morgen kommt ein Arbeiter zum Pfarrer. Es ist Pauls Nachbar.<sup>80</sup> Auch er klagt dem frommen Manne seine Not und sagt: „Ich kann nicht mehr an Gott glauben, denn es gibt keinen Gott. Oder können Sie mir einen Beweis geben, daß es einen Gott

---

einige 若干の unverständliche わけのわからない Dankesworte 感謝の言葉を stammeln どもる undそして die Banknote その紙幣 [すなわち] Gottes 神の von der Existenz 存在についての den sicht-[baren] 眼に見える undそして greifbaren 掴むことのできる Beweis 証明を nach Hause 家へ tragen 運ぶ。

Am andern Morgen 他の (次の) 朝に於て ein Arbeiter 一人の労働者が zum Pfarrer 牧師のところへ kommt 来る。Es それは Pauls パウルの Nachbar 隣人 ist である。Auch er かれも亦 dem frommen Manne この敬虔な人に seine Not かれの苦境を klagt なげく undそして sagt 云う: Ich 私は mehr もはや an Gott 神を glauben 信ずることが kann nicht できない, denn なぜなれば es gibt keinen Gott 神というものは存在しない [から]。Oder それとも Sie あなたは mir 私に daß es einen Gott gibt 神が存

---

などという「では」です。——【49】 klipp und klar: これは熟語で、「きつぱりと」、「はっきりと」、「明瞭に」——【50】 antworten Sie: 前出の Sagen Sie と同じく、命令の形です。「答えて下さい!」——【51】 da は、(英の there) 「其處で」ですが、ここは場所をいう「其處で」ではなく、時の意の「そこで」、「すると」です。——【52】 blickt: 不定形 blicken (見る、にらむ)——【53】 hinauf は、分解すると hin (彼方の方へ) auf (上方へ) です。blickt hinauf の二つで「眼をあげる」、「上眼を使う」、「上を見る」です。blickt zum Himmel hinauf で「天を仰ぐ」。——【54】 schlägt: 不定形 schlagen. (a が ʒ にかわるところに注意。) schlagen だけの意味は「打つ」。——【55】 die Hände は die Hand (手) の複数形。——【56】 vor は「前」という前置詞。——【57】 die Brust: 胸。(der とあるのは三格。——【58】 zusammen: 英の together. schlägt zusammen は「打ち合わす」。

「天を仰いで手を打ち合す」という動作

——さてここでちよつと、此處で牧師のやつている西洋人獨特の科について説明を加えておきます。これは決して神さまを拜んでかしわ手を打っているわけではありません。西洋人はかしわ手を打ったりしません。これは單に「なアーるほど!」といつて感心しているだけのことなのです。西洋人は、何かに呆れたり、びっくりしたり、感服したりすると、思わず上目を使つて白眼をひき出し (同時に頭をチヨット横へかしげます)、そして大袈裟に兩手をパチンと打ちあわせ

---

これはあてにしていなかつた収入なんで、あげたつて一向困りはしない。どうだ、神さまという方があると思うか、それとも無いと思うか?」

夫婦はドギマギしてしまいました。お禮のことばもシドロモドロに、何だかわけのわからないことを云いながら、神の存在に對する眼にも見え手にも握れる證明であるところのその札を頂いてかえりました。

その翌朝、また一人の労働者が牧師さんのところへやつて來ました。それはパ

gibt? Einen Beweis, den man mit Augen sehen und mit Händen greifen kann?“

„Nein, das kann ich leider<sup>53</sup> nicht,“ antwortet ihm der fromme Mann, „Dafür habe ich hier auf dem Tische einen Beweis, den man weder<sup>54</sup> mit Augen sehen noch mit Händen greifen kann. Oder sehen Sie hier auf dem Tische etwa eine Banknote?“

---

在するといふ einen Beweis 一つの証明を geben 與えることが können できます [か]? man 人が mit Augen 眼をもつて sehen 見ることが und そして mit Händen 手をもつて greifen つかむことが kann できる den ところの Einen Beweis 一つの証明を?

Nein, 否, das その事を ich 私は leider 残念ながら kann nicht できない, [と] ihm かれに der fromme Mann その敬虔な人は antwortet 答える, Dafür その代りに ich わたしは hier 此處に auf dem Tische 机の上に man 人が mit Augen 眼をもつて sehen 見ること weder も [出来] ず mit Händen 手をもつて greifen つかむことも kann できない den ところの einen Beweis 一つの証明を habe 持っています。Oder それとも Sie あなたは hier 此處に auf dem Tische 机の上に eine Banknote 一つの紙幣を etwa でも sehen 見ます [か]?

---

ます。日本人なら、兩手を組んで「ふふーん!」というところです。ここで牧師がこんな動作をしておどろくのは何故かという、不時の収入があつた日に、ちやうどそれを恵むのに都合の好い人が來たからです。「ちやうど巧い具合になるものだ!」と思つて感心したわけです。——【59】ja freilich (そうですとも) はよく使ひ熟語。——【60】sogar は「おまけに」(……まで)、「あまつさえ」。——【61】Beweis dazu (それへの証明) とは「それに対する証明, その証明」。——【62】deuten (指す, 示す, 指し示す) は zeigen と同じ。——【63】auf はここでは英の at. (示す, 見る, 等の動作には auf を使うことが多いのは英の look at~ などと同じです)。——【64】Banknote, f, Bank は「銀行」, Note は「券」です。——【65】die は關係代名詞, (前の Banknote を指すから女性) 關係代名詞は大體定冠詞と同じものを用います。——【66】meinen は、「私の」などという mein の變化したものではなく、英 mean にあたる動詞です。——【67】Ehrwürden (先生) は特に牧師神父に對して用いる語です。——【68】Leuten Leute (英 people) の三格, 此の語は「人々」の意で、單數形はありません。——【69】Worten: 單數: Wort, 複數は Worte, (それが三格になつて Worten)。——【70】hat.....gegeben=has given. (英なら單に gave というところ) gegeben は geben (與える) の過去分詞。——【71】damit: 「……せんがために」の意の接續詞。——【72】Extra-Verdienst: Extra は英の extra と同じで、「臨時の」, 「不時の」,

---

オルの近所に住んでいる男です。この男も牧師さんにむかつて色々と愚痴をこぼしたのち、こう申します:『わたしはもう神さまなんてものは信じられなくなりました。だつてそんなものは無いと思うんです。それとも何か、神というものがあるという証明がございますか? 此の眼に見え、此の手につかめるような具體的な証明がございますか?』

『いや、そんなのはお相憎とないんだがね、』牧師さんは答えました、『その代

„Eine Banknote? Nein.“

„Nein. Sie sehen hier keine Banknote. Auch ich sehe keine. Und wenn wir beide<sup>83</sup> keine sehen, dann ist es keine Augentäuschung.<sup>84</sup> Nun sagen Sie mir selbst: Gibt es einen Gott oder nicht?“

Der arme Sünder<sup>85</sup> wird<sup>86</sup> rot wie eine Tomate und sagt: „Es gibt einen Gott, Ehrwürden.“

Eine Banknote? 紙幣を? Nein いいえ。

Nein いいえ。Sie あなたは hier ここに keine Banknote 何等の紙幣をも sehen 見 [ない]。Auch ich 私も sehe 見 keine ません。Und そして wir われわれが beide 兩人とも sehen 見 keine ない wenn ならば, dann 然らば es それは keine Augentäuschung 眼の錯覚では ist ありません。Nun では mir 私に selbst 御自身で sagen Sie おつしやつて下さい: Gibt es einen Gott oder nicht? 神は存在しますかしませんか?

Der arme Sünder 哀れなる罪びとは eine Tomate トマト wie の如く rot 赤く wird なる, und そして sagt 云う: Es gibt einen Gott 神は存在します, Ehrwürden 先生。

「特別の」(特配などの特です)。Verdienst は「儲け」。——【73】gut (よく) とは「結構」, 「大丈夫」(……してさしつかえない)。——【74】entbehren は「……を無しに間に合わせる」, 「……を必要としないですます」, 「……なしにすます」という, ちよつと日本語にはない動詞です。——【75】Nun は英の well, 「どうだ」(ときめつける場合), 「いかがでござる」というやつ。——【76】einige=ein paar。——【77】tragen: これは「持つて行く」「運ぶ」という tragen。——【78】sicht- und greifbaren: 完全にいうと sichtbaren und greifbaren です。共通の語尾を省くときには - の印を用います。-bar という語尾は「……することの出来る」「……可能な」を意味します。「可視」の可です。sicht は英の sight ですが, sichtbar は visible にあたります。-bar は, つまり英の ible, able などです。greifbar の greif- は greifen (掴む) から来ています。——【79】ändern=英 other。——【80】Nachbar=英 neighbor. 近所の人, 同じ町内の人。——【81】leider: 「遺憾ながら」という副詞。——【82】weder……noch. . . は英の neither……nor…… (『も……も……』と打ち消す時に用います。これを使うと否定詞は他に不要)。——【83】beide, 英: both。——【84】Augen (眼), Täuschung (錯覚)。——【85】Sünder (罪人), 英 sinner. (罪は die Sünde, 英 sin) ——【86】wird: 不定形 werden (成る, 英 become). この動詞は人称變化がすこぶる不規則で, du wirst, er wird となります。

り, 眼にも見えず, 手にも握めぬという證明が現に此の机の上にある。それとも此の机の上にお札でも見えるかね?』

『お札ですか? 見えませんな。』

『見えん。お札なんてものは一向見えん。わしにも見えん。おまえさんにも見えん。わしにも見えんというのだから, まさか眼の加減ではなからう。ではわしの

方からおまえさんに問うが、どうだ、神さまというものは有ると思うか、無いとおもうか？」

哀れなる罪びとは、まるでトマトのように眞赤になつて、申しました：『あると思います。』

# Frei

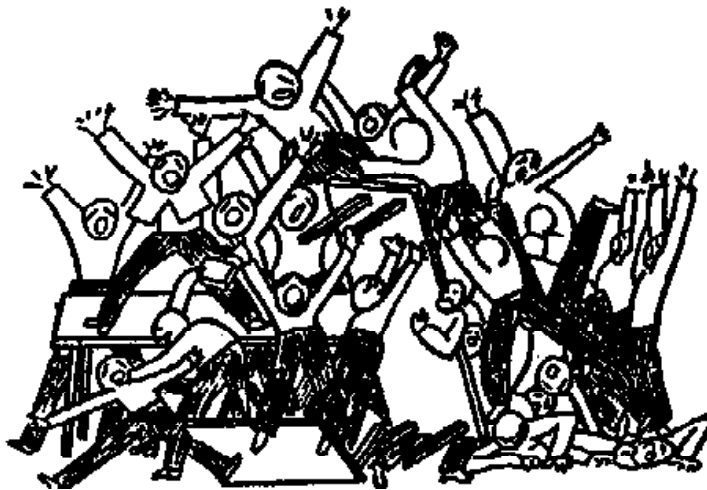
„Große Neuigkeit,<sup>1</sup> Kinder<sup>2</sup>!“

verkündete<sup>3</sup> Franz. Er war der

Primus.<sup>4</sup> „Große Neuigkeit,

Kinder! Nachmittags<sup>5</sup> gibt es

keinen Unterricht<sup>7</sup>!“



逐語譯：Große 大 Neuigkeit ニュースだよ Kinder 諸君（と）Franz フランツは

註：【1】Neuigkeit：これが丁度 *news* に該当するドイツ語です。Zeitung ということもあります。（Zeitung には「新聞」以外に「報道」、「ニュース」の意もあるのです）——【2】Kinder! 「子供たち」という語ですが、日常用語として、大勢の人にむかつて親しく呼びかける時には、たとえ相手が大人でも Kinder! (諸君!) といいます。英語でも *boys* といいます。だから Kinder とか *boys* とか云われて、人を小兒扱いにしやがる、なんて怒つてはいけなわけです、それが習慣なんですから。——【3】verkünden (告げる、告知する、報道する) の過去形。——【4】Primus (首席)：これは元來ラテン語で、der Erste (第一位のもの) の意です。生徒の首席ばかりではありませんが、普通單に Primus という大抵首席、すなわち我國の組長のことを云います。同時に *primus inter pares* [プリームス・インテル・パーレス] という、獨逸語でも英語でもよく用いられるラテン語を序でに記憶しておきましょう。これは『同輩中の第一位者』すなわち首席ということです。pares は「互いに等しき者」、inter はドイツ語の unter, 英の among にあたる前置詞。つまり、長とか親方とかいつたような封建的、隷屬的關係ではなくて、權利も地位も同等であるが、古参とか長老とか或いは單に高等小使とか云つた意味の代表者だという時に用いる語です。たとへば、總理大臣なんてのもそれで、他の大臣は決して總理の手下ではない、總理は單に *primus inter pares* なのだ、などと云います。der Primus というのはこれから起つたのです。——【5】Nachmittags (午後) は副詞で、am Nachmittag というのと同じです。反對は vormittags, 「晝に」は mittags です。ただし Montag Nachmittags (または Montagnachmittags) などと、他の語と結合すると近頃は大概 s を省きます。——【6】gibt es (正順ならば es gibt, となる) は英の *there is* (.....がある) と同意の熟語です。但し、分解する

と「それが……を興える」という構造ですから、次に来る名詞は勿論四格にならなければなりません (keinen Unterricht がそれ)——【7】 Unterricht, m. (授業): 「授業する」という動詞はアクセントが動詞の方あつて unterrichten [ウンテル・リヒテン] ですが、名詞

意譯: 「諸君一大ニュースだ!」とフ란ツは發表した。フ란ツは首席學生だつた。『諸君, 一大ニュースだ! 午後は授業なし!』

„Wir haben<sup>8</sup> also<sup>9</sup> frei?“ fragte<sup>10</sup> Willi.<sup>11</sup> Alle<sup>12</sup> sahen<sup>13</sup> einander<sup>14</sup> an<sup>15</sup> und trauten<sup>16</sup> ihren<sup>17</sup> Ohren<sup>18</sup> kaum.<sup>19</sup>

Der Primus lachte: „Man hat ja<sup>20</sup> frei, wenn man keinen Unterricht hat!“

verkündete 告げた。Er かれは der Primus 首席 war であつた。Große Neuigkeit, Kinder 大變なニュースだぞ諸君! Nachmittags 午後には es それは keinen Unterricht 何等の授業をも gibt 興え [ない]。

also それでは Wir おれ達は frei 自由に haben 持つか? [と] Willi ヴィルリーが fragte たずねた。Alle みんなは einander おたがいを sahen an 眺め [合つ] た und そして ihren Ohren かれらの耳に kaum ほとんど trauten 信じ [なかつ] た。

の方は前綴の方にアクセントがあります。——【8】 haben frei 「自由に持つ」は熟語で、別に何を自由に持つという四格を入れなくても、此のままで「学校がお休み」という意味になります。不定形でいうと frei haben です。——【9】 also: では、それでは、じゃあ。——【10】 fragte は fragen (問う) の過去。此の動詞は三要形は普通規則的ですが、過去には frug という別形もあつて、ドイツ人の中には百人中二人や三人は、斯ういうときに fragte と云わないで frug という人があることを記憶しておいて下さい。過去分詞は勿論必ず gefragt です。——【11】 Willi: これは Wilhelm という人名の通稱です。英語でも ッ 或いは -ie の語尾をよく用いるように、ドイツもよく -i をつけます。その他 Heinrich を Heini というなど。——【12】 alle (みんなが): こういう語は、元來は形容詞的に名詞にかぶせて用いるのですが (alle Jungen すべての少年たちが、など)、また名詞を省いて、それ自身を名詞として用いることも多いのです: viele (多くの者が), wenige (少數のものが), beide (兩人が), einzelne (個々の者が) など。みな小文字で好いのです (その點が普通の形容詞とちがつています) が、此處は文頭のため大文字になつています。——【13】 sahen (見た): これは sehen (見る) の過去形 (-en 語尾は複數三人稱ゆえ) です。sehen の三要形は sehen, sah, gesehen. ——【14】 einander (お互いを) は英の each other. ——einer den andern (一人が他を) と云つても同じ。——【15】 an: これは, sahen と合して一つの意味をなすものです。すなわち ansehen (眺める, 顔をながめる) という分離動詞なのです。——『或人の顔を眺める』ことを ansehen というのですが、その時には相手の人間を四格にします。『かれは私の顔を見る』なら, Er sieht mich an です。——それから an の用法について

一す。英語で *look at.....*, *smile at.....* (或人に嘲笑みかける), *bark at.....* (或人に吠えつく), *shout at.....* (或人をどなりつける), などと、とにかく或人に向つて眞向から云々するといふ場合にすべて *at* をつけますが、そういう時にはドイツ語では凡て動詞に *an-* をつけるのです。そして相手を四格にします。 *He looks at me: Er sieht mich an. He smiles*

---

『じやお休みかい?』とヴィルリーが問うた。みんなお互いに顔を見合つたままで、ほとんど自分の耳を信ずることができなかつたのである。

*Jetzt<sup>17</sup> brach<sup>18</sup> der Sturm los.<sup>19</sup> Die ganze Klasse geriet<sup>20</sup> außer<sup>21</sup> Rand und Band.<sup>22</sup> Der eine piff. Der andere jubelte.<sup>23</sup> Der dritte<sup>24</sup> hieb<sup>25</sup> auf das Pult.<sup>26</sup> Der vierte sprang auf die Bank und wieherte. Der fünfte tanzte im Klassenzimmer herum.<sup>27</sup> Der sechste stand*

---

*Der Primus* 首席は *lachte* 笑つ [て言つ] た: *man* 吾人が *keinen Unterricht* 何等の授業をも *hat* 持た [ない] *wenn* とすれば *Man* 吾人は *ja* 申すまでもなく *frei* 自由に *hat* 持つ。

*Jetzt* 今や *der Sturm* 嵐が *brach los* 勃發した。 *Die ganze Klasse* 全クラスが *Rand und Band* 縁 (ふち) と轡 (たが) *außer* の外に *geriet* 陥入つた。 *Der eine* 一人は *piff* (三翼形: *pfeifen, piff, gepiffen*) 口笛を吹いた。 *Der andere* 他の者は *jubelte* 歡呼し

---

*at me: Er lächelt mich an. He shouted at me: Er schrie mich an. The dog barks at the moon: Der Hund bellt den Mond an.*—【16】 *trauten*: *trauen* (信ずる) の過去。—【17】 *Ihr=their*.—【18】 *Ohr, n.* (耳) の複数は *Ohren* (詳しい知識になりますが、こんなドイツ固有の簡単な「中性名詞」が複数で *-en* という語尾をとるなどということは極く珍らしい現象で、普通は、*Ohr* 以外には、*Bett*, 床, *Auge*, 眼, *Ende*, 終, *Herz*, 心, *Hemd*, シャツ, の五つで合せて大體だけと思つて下さい。男性だつてそう澤山はありません (弱變化以外には)。 *-en* という複数語尾は主として女性です。—【19】 *kaum* は「ほとんど (云々しない)」という否定詞です。英: *scarcely, hardly*.—【20】 *ja*: これは *yes* の意の *ja* ではなく、文の途中にあるときには、助勢詞と云つて、文全體にはずみをつけるためのことばにすぎません。『だつて.....じやないか』とか、女なら『.....だわ』、『.....じやないの』、『.....だわよ』とかいつたような、特に強く云う際にドイツ語では *ja* を挿入するのです。『そりや間違つてゐるわよ!』なら *Das ist ja falsch!* 『あいつの云うことが本當だよ』 *Er hat ja recht.* 『あいつが來たぜ』 *Da kommt er ja.*—『わたしどうして好いかわかんないわ』 *Ich weiß ja nicht, was ich tun soll.*—『だつて私あなたが好きなんですもの』 *Aber ich liebe Sie ja so!*—日本語には『よ』や『ぜ』や『な』や『わ』や『だわ』や『もの』と、いろいろありますがドイツ語には *ja* (うんと強い時には *doch*) だけしかありません。—【21】 *jetzt* (今) という語は、強く用いると、かういふように『サア』、『いよいよ』の意になります。或る一瞬間を鋭く浮かび上らせるための副詞です。同じ『今』の意に

nun という語もありますが、此の方は jetzt にくらべると、少し「のんき」な、「ぐずぐず」した語で、長く間の延びた現在の瞬間を意味します。たとえば、『さて斯うなると、ちよつとどうしていいかわからんな』(Nun weiß ich nicht, was ich anfangen soll) の「さて斯うなると」が nun です。また、人に何か問われて急に返事ができず、『そうですねえ……』という時には nun…… と云います。それに反して、ワンツースリーで『それッ!』と掛け聲を

首席學生は笑つて云つた：『授業がないと云うんだから、もちろんお休みにき

まつてるじやないか!』

Kopf.<sup>53</sup> Der siebente riß seinem Nebenmann<sup>53</sup> das Heft aus der Hand und schmiß es zum Fenster hinaus.<sup>54</sup> Der achte kletterte dem

neunten<sup>55</sup> auf die Schultern.<sup>56</sup> Der zehnte gab dem elften eine derbe<sup>57</sup>

た。Der dritte 三人目は auf das Pult 机の上を hieb (三要形：hauen, hieb, gehauen) はたいた。Der vierte 四人目は auf die Bank ベンチの上へ sprang (三要形：springen, sprang, gesprungen) 躍[り上]つた、undそして wieherte 嘶いた。Der fünfte 五人目は im Klassenzimmer 教室の中を tanzte herum 踊り廻つた。Der sechste 六人目は stand Kopf 逆立ちした。Der siebente 七人目は seinem Nebenmann かれの隣の男に das Heft 手帳を aus der Hand 手から riß (三要形：reißen, riß, gerissen) ひつたくつ

かける『ソレツ!』という奴は Jetzt! です。これで區別がわかつたでしょう……という時の「これで」は、のんきに云えば Nun kennt ihr den Unterschied で、少し鋭く劇的に云えば Jetzt kennt ihr den Unterschied となります。——【22】brach: brechen (破れる)の三要形は brechen, brach, gebrochen. ——ただし此の動詞は、前出の sahen an と同じく、分離動詞 losbrechen (爆發する、英: burst) です。——【23】los: これは何でも勢よく「おつ初まる」ことを意味する前綴です。lossingen なら『勢よく歌い出す』, losgehen なら『勢よくスタートを切る』あるいは『ズドンと發射する』等の意になります。會話調では、『さあ始めた!』という時に Los! los! と云います。——【24】geriet は geraten (陷入る)の過去形 (三要形: geraten, geriet, geraten). ——【25】außer は『……の外へ』で、はずれることを意味する前置詞。『の外で』の意のこともありますが、此處のように『の外へ』という用法の際は aus と殆んど同じ。——【26】Rand und Band: Rand は縁、Band は籜(たが)ですが、これは熟語で außer Rand und Band で『籜をはずす』即ち『亂調子』になることを意味します。——【27】jubeln: 「歡呼する」、即ちワーツということ。——【28】drift: 英: third. ——人は、他はという時には der eine, der andere というか、或いは einer, ein anderer ともいいます。すべて -e という語尾をつける點に注目。1 から 12 までは eins, zwei, drei, vier, fünf, sechs, sieben, acht, neun, zehn, elf, zwölf ですが、本文中に出て来るのはすべて序数、(第何番目という際の數詞)です。第一は erst, 第二は、

zweit, 第三は dreit ではなくて dritt, 以下はすべて zweit と同じように t をつけて行きます。——【29】 hauen は「打つ」「たたく」(schlagen, schlug, geschlagen と同じ)——【30】 Pult, 机 教室にあるような, 簡単な机のことを Pult と云います。食卓やデスクは Tisch です。——【31】 herum (あちこち) は umher (あちこち) と同じ。herumtanzen (躍りまわる) は分離動詞。——【32】 Kopf stehen (または分離動詞として kopfstehen) は『逆立ちする』という熟語。Handstand machen と同じ。——【33】 seinem Nebenmann (横の

さあ大變。全クラスは底ぬけ騒ぎだ。ある者は口笛を吹く。ある者は歡呼する。ある者は机を引つぱたく。ある者はベンチの上に躍り上つて馬のように嘶く。ある者はダンスしながら教室の中をひとわたり浮れ廻る。ある者は逆立ちす Ohrfeige,<sup>38</sup> daß<sup>39</sup> es klatschte.<sup>40</sup> Der zwölfte gab dem dreizehnten<sup>41</sup> einen Fußtritt.<sup>42</sup>

„Ruhe<sup>43</sup>!“ erschallte<sup>44</sup> die Donnerstimme<sup>45</sup> des gefürchteten<sup>46</sup> Lehrers

た und そして es それを zum Fenster hinaus 窓から外へ schmiß (三変化: schmeißen, schmiß, geschmissen) 投げた。Der achte 八人目は dem neunten 九人目に auf die Schultern 肩の上へ kletterte. 攀じのぼつた。Der zehnte 十人目は dem elften 十一人目に es それが klatschte パチンと鳴つた daß ほど eine derbe Ohrfeige 猛烈なびんたを gab (三変化: geben, gab, gegeben) 與えた。Der zwölfte 十二人目は dem dreizehnten 十三人目に einen Fußtritt 足蹴を gab 與えた。

男に) とは「横の男から」の意。——【34】 zum Fenster hinaus: 直譯すると『窓の方へ・外へ』ですが、これはドイツ語特有の辭で hinaus (表へ, 外へ [出る]) を用いる時には形式的に zu を用いることになつてゐるのです。たとえば『國を出てゆく』というときには, Ich gehe aus dem Land ですが, gehen の代りに hinausgehen (出てゆく) という分離動詞を用いると, aus の代りに zu を用いて Ich gehe zum Lande hinaus となります。『かれは女中を家から追い出した』は Er jagte das Mädchen aus dem Haus というか或いは Er jagte das Mädchen zum Hause hinaus です。zu.....hinaus, zu.....heraus という形式としておぼえておく必要があります。——【35】 dem neunten: これも「九人目のに」と三格になつてゐますが、日本語でなら「九人目の奴の」という時に三格を用いるのがドイツ語特有のくせです。——【36】 Schultern. (肩) 單数は Schulter. 複數語尾が n ですから、此の語は女性です。——【37】 derb という形容詞は、『猛烈な』、『こつぱどい』、『ひどい』。【38】 Ohrfeige, f. は平手打ち, 即ちぶん殴ること。——【39】 daß: 『いやというほど』とか『ビシヤというほど』とかいう時の『ほど』に daß を用います。so daß (.....ことほど左様) と同じ daß です。——【40】 klatschen という動詞は klatsch! (ビシヤリ!) から造つたもの。——【41】 12 までの數は紹介しましたが、13 から 19 まではすべて -zehn をつけます: 13=dreizehn, 14=vierzehn, 15=fünfzehn 等。『.....番目』はそれに t を加

えるわけ。——【42】 Fußtritt, m. 「蹴ること」です。tritt は treten (踏みつける) より。  
——【43】 Ruhe, f. は「静寂」という名詞ですが、「やかましい!」「静かにしろ!」という時には普通 Ruhe! と云います。發音も、ほんとうは「ルーエ」ですが、大きな聲でどなる時には大抵 h をひびかせて「ル——へ——」と云います。だから、ドイツ人が「ルーへー」と發音するのを聞くこともあるでしょうが、發音がまちがつている、などと思つてはいけません。發音しない h は、決して如何なる場合にも絶対に發音しないというのではなくて、力を入れて發音するときには、ハッキリ聞かせることがあるのです。——【44】 erschallen (ひびきわ

る。ある者は他の者の手から手帳を引つたくつて窓から外へ投げ出す。ある者は傍にいた奴の肩に攀じ登る。ある者は隣の男をとつつかまえていきなりビシヤッと頬ぺたを張り飛ばす。ある者は横の奴を蹴つ飛ばす。

in den Tumult<sup>47</sup> hinein.<sup>48</sup> Er stand in der Tür und hatte<sup>49</sup> dem Spektakel<sup>50</sup> zugeschaut.<sup>51</sup> Allgemeine<sup>52</sup> Stille.

„Nachmittags gibt<sup>53</sup> es Unterricht.“

„Ruhe!“ 「静寂!」(と) des gefürchteten 恐れられたる Lehrers 先生の die Donnerstimme 雷のような聲が in den Tumult 此の混亂の中へと erschallte hinein 響き込んだ。Er かれは in der Tür 扉の中に stand 立っていた und そして dem Spektakel この大騒ぎに hatte.....zugeschaut 見物していたのであつた。Allgemeine 一般の(一同の) Stille 沈黙。

Nachmittags 午後には es それが Unterricht 授業を gibt 與える。

たる)——er- という前綴は、『.....わたる』の意ですが、schallen の三変形は強弱二種があります: schallen, scholl, geschollen, または schallen, schallte, geschallt.——【45】 Donnerstimme は Donner (雷) と Stimme (聲) との合成語。——【46】 gefürchtet は fürchten (恐れる) の過去分詞で『恐れられた』(即ち恐怖の的となつてゐる)。こわい先生のことを gefürchteter Lehrer と云います。——【47】 Tumult, m. 混亂, 騒ぎ。——【48】 hinein (中へ) は hineinschallen (ひびき込む) という分離動詞と解してもよろしい、あるいは in den Tumult hinein (騒ぎのまつただなかへ) というのが一つの形式だと思つてもよろしい。in だけでもわかるのですが、なお更に念を入れてよく hinein という副詞を追加します。——【49】 hatte zugeschaut (見物していたのであつた) は zuschauen (見物する) という動詞を「過去完了」という形に用いたものです(英語の「大過去」)。過去完了とは、hatte 等, haben (動詞によつては sein) の過去形と過去分詞とをもつて構成し、『.....したのであつた』、『.....しておいた』、『.....してしまつていた』の意を表します。——【50】 Spektakel, n. 前出の Tumult とまあ同じような意の語。——【51】 zugeschaut: zuschauen (見物する) は分離動詞ですから zu-schauen と切つて、切つたところに ge をつけて過去分詞を造

ります。schauen は sehen と同義語。見物人は Zuschauer です。——【52】 allgemeine Stille: allgemein という形容詞は「一般的」ですが、(たとえば allgemeine Regel 一般的規則、通則)「一般的」ということは、人間について云うときには「一同の」意になります。此處も、「みんなが黙る」(alle verstummen) とでもいうところを、まるで芝居の「と書き」のように、簡潔に「一同の沈黙」といつたわけ。——【53】 gibt: 字の間が空いているのに注目。これは、英語ならば斜字(イタリク)を用いるところを、ドイツ語ではこうした隔字體を用いるので、此の一語を強調するためです。英語では、助詞を強調するときには do を用いるといつたようなことがあります。ドイツ語は、口でいう時には力を入れて發音する、書く時には隔字體、という方法があるのみです。

「やかましい!」大喝一聲、この混亂のまつただなかに、おつかない先生の聲が響いた。先生は戸口に立つていた。かれは先程からの大騒ぎをずっと見ていたのだ。一同沈黙。

「午後は授業をやる。」

## *Eine geniale Erfindung*

Ich habe eine geniale<sup>1</sup> Erfindung<sup>2</sup> gemacht.<sup>3</sup> Es handelt<sup>4</sup> sich nämlich<sup>5</sup> darum, Hasen<sup>6</sup> mit Schnupftabak<sup>7</sup> zu fangen. Das Verfahren<sup>8</sup> ist verblüffend<sup>9</sup> einfach. Sie wissen, alle genialen Erfindungen sind verblüffend einfach.

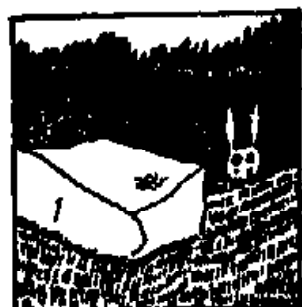
逐語譯: Ich 私は eine geniale Erfindung 一つの天才的な發明を habe.....gemacht しました。nämlich というのは即ち Hasen 兎どもを mit Schnupftabak 嗅ぎ煙草で zu fangen 捕える Es handelt sich darum [熟語] という問題です。Das Verfahren そのやり方は verblüffend おどろくべきほど einfach 簡単 ist です。Sie wissen 貴君は御存じでしょう。alle すべての genialen Erfindungen 天才的な發明は verblüffend einfach お

註: 【1】 genial (天才的): 「天才」という名詞は das Genie [ジェニー] で、g を(原語たる) フランス語式に發音しますが、その形容詞である [ゲニアール] の g はドイツ語式に發音します。これは、佛語の génie 以外に、ラテン語の Genius m. [ゲニウス] というのが時に天才の意に用いられるから、それから形容詞を派生させたのです。Genius, は、人間の一人一人について各々一柱ずつ配屬されていると云うことになつてゐる「守護神」、「護り本尊」のことで、それを西洋人がどういう風に考えているかということを説明すると「天才」というものの考え方がよくわかります(フランス語の génie も結局ラテン語の genius から来て、本來は「天才」ではなく、やはり守護神の意なので) 佛教の方でも、「佛性」という事を云います。つまり、どんな人間でも、その心の中には各々一體の「佛」が宿つていて、その佛は人々具足、個々圓成(にんじんぐそく、ここえんじよう)、すなわち「一人一人がみんな一つずつ具えていて、その一つずつが皆それぞれ完全無缺な状態にある」のだそうです。西洋人の Genius もまずそれに近い考え方のもので、畫などで見ると、よく天使のような姿をして、當人のうしろに立つていたり、頭のへんを飛びまわつていたりしますが、(だから Schutzengel [護りの天使] と云

Genius  
守護神

います),「佛性」様の方なら、さしづめ御當人のお膝か胸の中にでも結跏趺坐してござるところなんでしょうが、まだそんなオカシナ個性如來のお姿を繪や像でお見かけしたことはありません。けれども、とにかく人間という奴は、不知不識の間に、そういう Genius さまのお導きを受けて生きているということになつています。たとえば、何だかチヨット「蟲」が知らせたので乗らなかつたら其のバスが電車と衝突したなんてことがあると、日本人は「蟲」のせいにするが(無理もないです、日本人ほど蠅虫の多い國民はないそうだから)、西洋人は *Mein Genius hat mich davor gewarnt* (私の守護神が私をそれに對して戒しめた) などと云う。その他、いわゆる「靈感」とか「怪我の功名」とか云つたような、あたり前ではそんなに巧く行くはずのない事はすべて此の Genius のせいにしてしまいます。ところが、世の中には、たとえば Mozart とか Edison とか云つたような、まるで Genius その者のような人が飛び出すことがある。そこで遂に天才のことを Genius というようになつたのですが、しかし此の Genius というのは誇張していうのですから、滅多な場合に用いてはいけません。大抵は Genie (ジュニー) というべきです。日本語の「天才」はやや濫用される傾向があるから、ドイツ語に譯する時には單に *das Talent* [タレント](才) でよろしい。たとえば「語學の天才」なんてのは *Sprachtalent* で、*Sprachgenie* とは決して申しません。Genie は天才だが、天才は Genie に非ず。これ恰も、南瓜は野菜なるも、野菜は南瓜に非ざるが如

意譯：僕は一つ天才的な發明をしました。というのは、ほかでもない、喫ぎ煙草で兎を捕る方法です。しかも驚くべきほど簡単なんです。御存じの通り、い



Also,<sup>10</sup> man nimmt<sup>11</sup> eine Prise<sup>12</sup>  
Schnupftabak und legt sie auf einen  
Stein. Und das ist auch<sup>13</sup> die ganze



どろくべきほど簡単 sind です。

Also すなわち man 吾人は eine Prise 一摘みの Schnupftabak 喫ぎタバコを nimmt 取り, undそして sie それを auf einen Stein 石の上へ legt 置きます。Undそして dasそれが auch また man 吾人が sich 吾人自身に gibt 與える die ところの die ganze

し焉。——【2】*Erfindung*, は「發明」で、「發見」(*Entdeckung*) と區別しておぼえること。

【3】*habe...gemacht*: *have made*.——【4】*Es handelt sich darum*: これは熟語ゆえ、このままの形で覚えること。(ただし *darum* は *um das* ですから、*Es handelt sich um* ~ という形が基礎をなしているわけです)。どういう意味かという、それは實はコウ

Es handelt sich  
um ~ に就て

コウいうわけだとか「此處で問題になつてゐるのはコレコレの件だ」とか云つた場合に用いるのです。たとえば、人が大勢寄つてガヤガヤ騒いでいるとします。すると通りがかりの人は「いつたい何事がおこつたんですか?」(*Ja, was ist denn los?*) とか、あるいは「いつたい何事なんです?」(*Worum handelt es sich?*) 直譯すると「それは・何の件をめぐつて・みずからを・スッタモンダするか?」となります。handeln は英の *deal* で、スッタモンダする、ゴタゴタする、わたり合う) と云つて問うでしょう。すると、仔細を知つた人は、「泥棒がつかまつたんです」とか何とかいう。此の「泥棒がつかまつたんです」は、*Nun, man hat einen Dieb gestellt*